
爪の音

聖兎月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

爪の音

【Nコード】

N75360

【作者名】

聖兔月

【あらすじ】

第三次世界大戦が終了し、途方に暮れる人類。そんな中、突如空を割って射し込んだ光と共に、神を名乗る女性が、人類に対してとある試練を提案してきた。それは、秩序の崩壊したこの世界の中から、三千万円という現金を持って、光の射す場所に自分がいるのでそこに来ること。持って来た者だけが楽園に至るチケットを手に入れ、持って来れなかった者は地獄に落ちる。生前の行いは無関係であり、必要なものは現金のみ。そして、先着一万名のみがその権利を有する。かくして、史上最大の現金争奪戦が始まり、その後、気が

まぐれな神は、天地開闢以来の最も過酷な罰ゲームを開始する。その名は「爪の音」という

序章 第三次世界大戦終了にあたって、神様大いに語る

あーあー、マイクテス、マイクテス。

あめんぼあかいなあいうえお。

うん、人類、聞こえてる？

雲の上から響く、スーパービューリフォーでおそれ多い私の声が。さて、私はお前達が言うところの神様です。

キリストでもヤハウエでもブツダでも、好きに呼べばいい。

どれでもあつてどれでもないから。

それにさ、はつきり言つて、そんなことはどうでもいいじゃない。

お前達、私に言うことあるでしょ？

ん？

助けてくれ？

水と食料が足りない？

子供が死にそう？

あははは。

あははははははははははははははははは。

あーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは。

何それ、チヨー笑えるんだけどー？

神に何を求めてるの？

神は人類を愛さなきゃいけない？

神は人類を救わなきゃいけない？

勝手に決めないで欲しいわね。

そもそも私がお前達にどうこう言われる筋合いなんてないんだしいー。

信仰してたとか、祈っていたとか、規律正しい生活してたとか、何とかの教典の通り、何とかの聖書の通りに生きてきたとかさ。

だから？ で？

お前達が勝手に、神はこうして欲しいと思ってるに違いないって

決め付けて、勝手にそうしてただけでしょ？

正直、チヨ―馬鹿じゃない？

マジで馬鹿。

そんなどうでもいいことより、何これ。

何この焼け野原。瓦礫の山。死臭と血煙の漂う大地。

お前達がやったんだよ、これ。

お前達つてさあ、類人猿の頃は除くとしてもね、言葉使ったり、文明築いたりしだしてから一応半万年くらい経ってるんだよね。

半万年近くも経つてさあ、何やってるわけ？

以前から何も学ばない馬鹿だとは思ってたけど、うん、今度という今度は改めて認識が変わったわ。

ウルトラスーパーゴージャスデラックススペシャルアンビリーバ

ブル馬鹿。

馬鹿なんて簡単な一言で手に負えないよね。

うぜえし。

最後の最後に神様助けて、か。

いい気なモンだね。

あのさお前達、もし私の立場なら助ける？

僕は助けるとかさ、私は助けるとか言う奴もいるだろうね。

でも本当に助ける奴、どれだけいると思う？

例えば私がお前達を助けたら、何か良いことがあるの？

毎日の食事でおかずが一品増える？

睡眠時間が二時間増える？

答えなよ、お前達。

祈るとか、信じるとか、どうでもいいし。

お前達がまともに生きてないから、たまに私がそれとなくしてやった警告とか無視して、勝手に殺しあつて、勝手に滅びそうになつてるんでしょ？

なに、私の言葉遣いが神にしてはおかしいって？

どうでもいいこと気にする奴が居るんだね。

お前達、神は高貴だとか上品だとか、勝手な物差しで決め付けないでくれる？

それに今さ、そんなこと言ってるわけじゃないんだから。

私の言葉は今、生き残ってる人類全てに同時通訳してるから、変に聞こえる人が居ても気にして欲しくないのよねー。

あ、それから私って女だから。

勝手におっさんとかにしないよね、マジ勘弁して欲しいし。

で、話が逸れたんだけどさ、私、お前達に最後のチャンスあげようと思うんだよね。

ここからはこの放送は、生き残ってる日本人向けの内容に吹き替えしてお送りします。

他の国では他の国で流してるから、そもそも今死に掛けてるお前達が、ロシアやアフリカがどうなってようともいいでしょ。

期待しても同じ、瓦礫の山と焦土しかないし。

と言うわけで、本題いくわよー。

えっとさ、ノアの箱舟って知ってる？

知らない奴は知ってる奴に聞け、と言いたいところだけど、大サービスでかいつまんで説明だけしてあげる。

要は、ノアっていうおっさんが居ただけど、ある時ちょっと世界が減びるようなバイ洪水が起きる事になっちゃってさ、その人にこっそり私が教えてあげたんだね。

結果、ノアのおっさんは私の言いつけ通り箱舟を作ったわけ。

馬鹿にされたりしたけど一生懸命作った結果、おっさんと動物達は洪水で死ななくて、無事に新天地を発見して、幸せに暮らしてめでたしめでたしってわけ。

で、今回はちょっとノアみたいなを出すのも厳しそうだから、私が特別に箱舟、ではなく、保護施設を提供してあげようっていう、もう私ってスゲー、神様最高！

いよっ、超太っ腹！

フッフ、実はダイエットしてるからお腹は割とスリムなのよ？

あ、聞いてない？

こほん、まあいいじゃない。要はそういうわけよ。

でもね、全員が助かるうなんて、そういう甘っちょろい考えは捨てて。

そこに入るには条件があるから。

あと、今回惜しくも施設に入れなかった人達には罰ゲームがあるからね？

第1章 先着一万名様限定、楽園入場チケット販売開始

馬鹿にしている。

というか、ふざけるな、いつか会ったらぶつ殺してやる。

きみじまなっこ

君島夏子はかつての我が家だった瓦礫の山の上で、両親の死体を探している最中に見つけた水に口を付けた。

ボトルは泥だらけだが、未開封のミネラルウォーターなので、さしたる問題はない。

いや、仮に問題があっても、渴きを抑えるためには飲まざるを得ないのだ。

水道の蛇口をひねれば、公衆便所でさえ水が出た時代が懐かしい。食事はこの三日を通じて、缶切り要らずの焼鳥の缶詰と、イカの薫製だけだ。

しかも、食べると喉がよけいに渴くという、どうしようもない食料ときている。

「贅沢言わないわ、せめて塩味のおにぎりやゆで卵くらい食べたいのよ」

馬鹿だねえ。十分贅沢だよ私。

誰も言ってくれないので、自分の心の中でこっそりと返事をする。

人と滅多に出会わなくなり、幾夜も過ぎていくうちに、自然と独り言が増えるようになってきた。

何か口に出して言わないといけないような、そんな強迫観念に駆られる。

地平線の彼方、今日も日は沈もうとしていた。

「私も行こつかなあ、楽園」

昨日の夕刻、同じ頃に神と名乗る何かは、突然空の上から一方的な演説を始めた。

その時だけ、曇っていた空から突如光が射し始めて、耳ではなく

脳に訴えかけるようにその声は届いてきた。

信じたくは無いが、女子高生言葉のアレが神だというのはおそらく本当だろう。

手品だトリックだと言うには、こんなご時勢にやるような事ではない。

それに、昨日のうちに同じく生き残っていた幼なじみの友人は東へ、楽園のチケットを手に入れる為に旅立った。

神が出した条件は、極めてシンプルなものだ。

『日本銀行券で現金、キャッシュで三千万円持ってこい。但し先着一万名様限定！ 地獄の沙汰も金次第だからね』

およそ神が言うセリフとは思えないが、あの声が出ているのだ、信じざるを得ない。

昨日夏子の隣に座っていた木戸優美（かどゆうみ）に至っては、この地獄から抜け出せると勝手に思い込んだのだろう、目を輝かせてその話に聞き入っていた。

何もかもが狂っていく中、幼なじみの彼女が狂う事を止めるなどできようはずもない。

結果は既に見えていたのだ。

第2章 そして友人は旅に出る

「神様！ オーマイゴッド！」

優美は感極まって、両手を広げながらよくわからないテンションで叫んでいる。

そして、夏子はうさんくせえと鼻をひくひくさせながら、光の指す空と優美の顔を交互に眺めていた。

「てゆーかさ、あんたアレが畏だとか疑わないの？」

「畏でも何でも、今飲む水、明日の食料にさえ事欠いてるんだよ私達？」

思い出すだけでも、ぐうの音も出ない反論だ。

夏子と優美は今、コンビニやスーパーだったと思われる場所を漁って、その日その日を食いつないでいる。

お弁当やおにぎりは全て、当たり前だが腐っているのだ。

残されているのはボトルや缶に入った飲み物と、保存が利く缶詰やスナック菓子の類、後はちょっとしたご馳走としてチョコレートや飴など、甘いものだ。

「私行くからね！ 信じないなら夏子ちゃん、あなただけここでずっと居ればいいよ」

肩をいからせ、胸を張って、今までにない強気な言葉を吐く。そして、夏子が言い返そうと唇を開いた瞬間に、優美の次の言葉が続いた。

「私もうやだよ！ 今はまだ九月の終わりだからさ、秋だし過ぎしやすい気候だし、我慢できるよ？ でも、冬はすぐにやって来るんだよ？ 水や食料もだけど、毛布とか探さなきゃいけない、それでしのげる？ 自信ある？」

「そりゃあ無いけどさ、あんなクソ胡散臭いの信じるの？」

「やらない後悔よりやった後悔だよ、こうしてる間に、現金で三千万円見つけて駆け込んでる人がいると思うと、いても立ってもいら

れなくない？」

「あんだ、学生時代はいじめられっ子だったのに、急にバイタリテイ付いてきたね」

「本能が目覚めたただだよ。むしろ夏子ちゃんが落ち着き過ぎだよ」「こういう時は焦る方がヤバいの。それくらいわかるでしょ」

くいつと、昨日見つけた紅茶のボトルに口を着ける。

ミネラルウォーターと違い、糖分を含んだ心地よい甘さが、体中の血管の隅々まで行き渡る。

心身共に倒れそうなほど疲れている今、それはもはや命の水だ。

あなたもこれ飲んだら落ち着くかも知れないよ？

そう言葉にする代わりに、黙ってボトルを優美の前に出す。

「ありがとう、一口もらうね。だけど私は行くよ、止めても行くから」

「あの光が指す方に、天使の格好したチケットの売人がいるんだっけ。夜になつてもあそこだけは分かりやすいわね」

「あんな事できるくらい力を持つてる神様だよ、助けてくれるんだよ」

「信じる奴しか助けがないなんて、そんな神様なら要らない」

「信じてても信じて無くても、三千万円持ってきた人だけ助けしてくれるって言ってるよ」

優美は腕を組みながら、何かに納得したように強く頷く。

「今さら金って言われてもねえ。そもそも、何で現金じゃなきゃいけないの？ 色々と怪しい事ばかりじゃない。よく考えた方がいいよ」

「銀行とか信用金庫とか郵便局があった辺りを探せば、壊れ過ぎずに残った金庫とかにあると思うよ」

人の話なんてまるで聞く気は無いらしい。まあ、分からないでもないのだけど。

「今さら泥棒も糞も無いけどさ。マジですか？」

「夏子ちゃんはそのでばやばやしてなよ、私は行くからね」

優美は立ち上がると、瓦礫の山をゆっくりと降りていく。

その途中、ちらりと後ろを振り返った。

着いてきて欲しい。そう無言で訴えかけている。だが、夏子はそれを敢えて無視した。

行くときは自分で判断する。

それに、ここで軽々しく神の意思に乗ることが少し癪に障る部分もあった。

「行っちゃうよ?」

「さようなら」

「本当に本当に行っちゃうよ?」

「お元気で」

「あうあう」

「行きたいんでしょう」

「もう、夏子ちゃんの馬鹿っ!」

決断が鈍ることを恐れたのか、優美は月明かりを頼りにして、でこぼことした瓦礫の荒野を精一杯の速さで走っていった。

肩から掛けたポシエットの中に、さっき見つけた焼鳥の缶詰を一つと、さきいかを一パック詰め込んで。

第3章 未知なる世界に三千万円を求めて

そんなやり取りがあつてから、丸一日が過ぎようとしている。

数日分の食料と水を確保し、ぼんやりと遠くを眺めている間に、今日だけでも三人は遠くに人影を見た。そのうち一人はこちらに気が付くと、敵意が無い事を示しながら近付いてきて、軽い世間話を交わした。

少し薄汚れたが、割とまだ清潔なポロシャツにジーパンを穿いた、中年の男性だった。

持っていたキャラメルをあいさつ代わりに一つくれると、彼は私に問いかける。

あなたは樂園には行かないのですか？ おおよそ分かりきつた質問だ。

彼もまた、善意で言ってくれているのは分かっている。

だが、水や食料に困っているとは言え、まだ少し頑張ればコンビニヤスーパーの残骸から保存食を確保することは比較的容易だ。

そのせいか、意外と相手が男でも、敵意を感じさせるような人間に出会う事は今のところ無い。

若い女性一人では危険だ、一緒に行かないかと誘ってはくれたが、かつての友人だった優美以外には、あまり係わり合いになるつもりは無い。

純粹な善意から言っているのかも知れないが、それでも何か下心があるような気がして、異姓にはいまいち心を開くことができない。結局、少しだけ気まずい空気を残して男は去っていった。

再び静まり返ると、少し広い壁の残骸に寝転がる。

遠くに東の空が目映った。

「ま、いいけどさ。今さらレイプされるなら、むしろこっちから八メてやるわ」

絶望が一回転して開き直り、もはや悟りの域に達している。

君島夏子。二六歳独身はまだ、女盛り花盛り、恋に恋する乙女に
ごぞいます。

彼氏居ない歴六年、ちょっと渴いています。

「そう、欲しいのは潤い！ もうすぐお肌の曲がり角なのよ！」
自分でも何を言っているのか分からなくなってきたが、それでも
絶望するよりはいい。

暗いことを考えると、死にたくなる。

優美はとろくて少し抜けたところのある友人だが、天然ボケで明
るくて、戦後の荒んだこの世界に於いては、自分にとって必要な存
在になっていた。

ああでも、決して百合の花満開なんかじゃないんだぞ。

リリーフラワーがオープンなんて、そんなことは無いんだから！
そんなことを思いながら、不意に体を起こして辺りをきよるきよ
る見回してみる。

ひょっとしたら半べそになって、或いは、照れくさそうな顔をし
た優美が戻ってきているのではないか。

しかし、どこまでも続く蒼い夜には、人の気配など感じられない。
街が、国が、星が、死に瀕している。

世界はその横顔を変える事はなく、吹く風さえもどこか金属的で
冷たい。

「独りぼっちって、想像よりずっとつまらないな」

目を閉じればあの頃の日常と、三年F組の教室がまぶたの裏に浮
かんでくる。

県立桂崎高校に教師として就任し、生まれて初めて担任を受け持
つこととなった。

うるさい子がいて、大人しい子がいて、少し不良っぽい子もいれ
ば、ずば抜けて勉強ができる子もいる。

新米教師として過ごした時間は、騒がしくて温かくて、ぬるま湯
がゆっくりと流れる、小川がせせらぐ音に耳を傾けるような日々だ
った。

いじめや学級崩壊などが起きないよう、できる限りの注意を払い、私らしい教育とは何かを常に考え、日々を生きていく。

たまの週末は優美と会い、学校教師だって大変なんだよと酒を飲みながら話をする。

でも、その大変な日々が嫌いじゃないと、私は苦笑いしてグラスに口を付けた。

そんな回想をしていると、どこから乾いた映写機の音が聞こえてくる。

からから

からから

薄いクリーム色のスクリーンに映し出されるのは、まぶたの裏に焼き付いていた過去。

手を伸ばせば届きそうな気がするのに、触れようとした瞬間に全ては消える。

夢想から目を覚ました時、ぼんやりと込み上げる現実に、頬を涙が伝っていた。

「みんないい人で、いい子達ばかりだったのに、ね」

東の空には、風に揺れるカーテンのように光が揺らめいている。

雲間から除く金色の帳。

逢魔ヶ刻の幻のように、それは妖しく揺れている。

「楽園に行けないと罰ゲームかあ」

思い出を心の奥にそっとしまつと、神とはいったい何かと考える。

彼女は戦争で滅亡寸前まで自分達を追い込んだ人類を軽蔑し、馬鹿にしている。

仮に三千万円を用意するために、何人も罪無き人々を殺した鬼畜が居るとしよう。

神はそんな人間を、金さえ用意すれば楽園に招待するのだろうか。一万人もまともな手段だけを以て、三千万円用意できる？

普通に考えればあり得ない。

そう考えると、三千万という変に中途半端な数字と、現金と言う

具体的な欲望の権化は、白々しい畏のような気がする。

例えば欲に目が眩んだ人間を騙し、まとめて処理するとか。

「でも、それは絶対じゃない」

声に出して自分に確認をする。

そうかも知れない、という予想であって、畏だと決まったわけではない。

そもそも神が嘘を吐いてどうする。

だいいち、あんな渋谷のセンター街に一山百円で売っていきそうな頭の悪い女子高生言葉を使うような女神が？

考えれば考えるほど、夏子は頭痛がしそうになってくる。

そもそも明日をも知れぬ身で、水や食料の心配をしなければいけないのに、なぜこんなことにまで神経を使わされるのだろう。

そう考えると、開き直っていた心が、今度は神に対する怒りへと変わってくる。

「あーもう、うざったいわ！」

こうなったら確かめるしかない。

夏子は思い立ったら即、行動に移す方だ。

まだ夜はこれからだと言うのに、ありったけの食料をぼろぼろのリュックに詰め込み、光が射す方を目指して歩き出した。

一応腰には三得包丁を差している。

喧嘩に自信は無いが、何を今さら恐れるものか。

失うものなど命だけだ。

いや、正確に言えば怖いのだが、こういう時に限って人の心は得てして、良い方に物事を考えてしまいがちになる。

怖くない。

そう思い込むことで、本当に怖くなくなる。

むしろ、映画などで危険を回避し続ける主人公のように、自分もそうなるのではないかという、漠然とした自信が湧く。

とにかく前に進むことで、何かが変わり、何かが分かるような気がした。

どちらにせよ、このまま留まり続けても近いうちに食料は底を尽く。

目的を持つことは、死や絶望的な未来から自分を少しでもごまかしてくれる。

心は今、空気の抜け続ける風船も同じ。空元気でも、中に入れねば壊れてしまう。

「楽園だ！ 優美待ってる、私の方が先に到着してやる！」

意気揚々と口に出し、ポケットの中にある財布の中身を確認すると、今や意味の無いクレジットカードが三枚と、三万二千元だけが残っていた。

「よし、あと二九九六万八千円！」

……

……

…

「につ、にせんきゅーひゃくきゅうじゅーろくまんはっせんえん！」
繰り返すつくじけそうになる。

頑張り自分。超頑張り。

言っていて、涙がこぼれそうになると、ぐいっと金色の空を見上げる。

かつて坂本九が上を向いて歩こうと歌っていたのは、まさにこういうことだったんだ。

さすが日本人初のUSAでビルボードのランキングトップを飾ったアーティスト。

危機的状况だからこそ身にしみる、それはまさに知恵袋。

なのに、溢れ出した涙はやっぱり、頬を伝って地面に落ちる。

強引に袖でそれ拭くと、銀行が集中している駅の方に向かって夏子は歩き出した。

第4章 戦争とヤクザとアキハバラ

「おお神よ、他の奴がどこで何がどうなろうと知ったことじゃねえ。だから答える、今この状況、これは今まで汚れ仕事をしてきた俺に對する神罰か」

陣内仁は、既に元がマンションだったことをかろうじて認識させる、既に倒壊した建物の前で、途方に暮れて立ち尽くしていた。

第三次世界大戦で、まさか核兵器が使われるとは思わなかったと言えば嘘になる。

だが、さすがにいくら人類が馬鹿でも、これは使わないだろうと思っていた。

あくまでもお互いの抑止力のためには必要、しかし、使わないと言うのが暗黙のルール。

「つーか使うな。」

「今時小学生の子供でもわかるだろ？」

もはや怒りの矛先をどこに向けていいかわからない状態になっている。

ソロモンハウスカンパニー極東法人代表取締役、それが仁の肩書きだった。

仕事は主に農作物の輸出入を手がけているが、裏ではアジア随一の闇の武器商人としてその名を知られていた。

華僑社会に強力なパイプを持ち、ロシアマフィアが何度も手玉に取られている。

黄色死イエロー・デスと呼ばれ、その莫大な資産と兵力の後ろ盾にはユダヤ人の影が常にちらついていた。

彼は女、金、名誉、おおよそ考えられる全てを、十分過ぎるほど手に入れていた。

だが、そんな彼にも人に言えない秘密がある。

「俺のフィギュアコレクション、全部パーかよ?! 以前秋葉原で

二日間徹夜して買った、魔法少女シャイニングアヤの等身大フィギュアなんて、通販限定は三体のみで二十八万円もしたんだぞ?! 十三年かかって集めたアニメエキングなんて、創刊号から先月号までコンプリート。美晴さんの抱き枕シリーズなんて、抽選限定の通販で買ったんだ!」

陣内仁、彼は重度のアキバ系おたくだった。

萌えキャラと呼ばれるものに極端な嗜好を持っており、実在するどんな美女にさえ目もくれることはない。

仕事柄、銀座や歌舞伎町、香港や上海の歓楽街に顔は利くが、あくまでもビジネスとしてであり、性的な意味での好奇心、欲望は微塵も存在していない。

彼の趣味を知らない一部の女達は、スティックでダンディだと彼を評したが、単純に女性に興味が無いだけであり、その態度がクルに見えるだけだ。

そんな彼が、人生最初で最後となるであろう大取引を終え、一息吐いた時に第三次世界大戦は始まった。

世界の大国は互いに核の撃ち合いとなり、その炎は地球の全てを焼き尽くす。

そんな中であつて、彼もまたごきぶりのようにしぶとく生き残った一人であつた。

だが、命からがらに戻った自宅では、迎えてくれるはずのアキバ系キャラクター達は姿を消し、残されているのは、元それらだったであろう塵芥のみ。

何かが焼け、残された灰にそつと手を入れ、掬い上げてみる。だが、ぱらぱらとそれは零れ落ち、やがて地面に降り注ぐ。

「うおおおおおおおおおおおおおおお!」
いつも冷静な、氷河のようとも言われる男が吼えた。

今の仁には心も理性も無い。ただ一匹の獣がそこにいる。

彼にとって彼女達の消失は、結婚を翌日に控えた婚約者をレイプされた上に殺される程のショックだった。

慟哭。

それはまさに純粹なる叫び。

響き渡る仁の声は、そのまま空に溶けていく。

もし彼が元はただの善良な一市民ならば、この時静かに近付いてくる気配に気が付いていなかっただろう。

叫び声の中に姿を隠しながら、何者かがその背中 of のすぐそばまで来ていた。

壊れた車の陰で、じっと息を潜める小さな背中。

それはまだ年端もゆかぬ少年だ。

両親を先の戦争で失った彼は、水と食料を捜し求めていた。

重いものを自力で動かすこともできず、ただ飢え、渴いている。

途中出会った大人達を見ても、隠れてしまい上手く接することができない。

そんな状況の中で幾日かの時が過ぎ、ついに少年は決意した。

人を襲い、食料と水を奪おうと。

このまま静かに死ぬことを、少年の本能は確かに拒否した。

手に持っているのは、たまたま見つけた錆びたカッターナイフ。

チキチキと何度も出し入れしていくうちに、これで何とかしなければと、精一杯の勇気を振り絞ったのだ。

(あと少し……あと少しであのおじさんの首に……)

じつとりと、粘着質の汗でシャツが背中に張り付く。

呼吸を整える為、できるだけ一回一回の息を大きくする。

大丈夫だ、自分にもできるはず。

既に、少年は殺し合いを一度見ていた。

それは運が悪かったのか、或いは良かったのかはわからない。

たまたま潜伏していた廃車のそばで、食糧を巡って男達三人が争いを始めたのだ。

少年が居た地域は食料が乏しく、男達も若くて短気な者ばかりだった。

ある日、三人の男がいたが、その中の一人がよく分からない言葉

を叫びながら殴りかかると、もう一人の若い男が後ろから角材で、叫ぶ男の頭にそれを叩きつけたのだ。

鈍い音がして血しぶきが飛び、被害者の中年男性は倒れ込む。初めて見る本気の喧嘩。いや、一方的な殺戮。

倒れた男は虫けらのように蹴りを入れられ、腹に、胸に、顔に、何度も執拗な攻撃を受ける。

人とは思えないような叫び声が辺りをつんざく。

普通の子供であれば、ここで目を逸らして震えるか、思わず叫んでしまった事だろう。

だが、彼はそれを見つめていた。少しも見逃すまいと。

殺すか、殺されるか、目の前にあるのはそんな争いなのだ。

生きようという本能が目覚め、それが彼に麻薬のような陶醉感と氷のような冷静さを与えていた。

殺らねば、殺られる。

男達が消えた後、少年はまじまじと死体を見つめる。

辺りに注意しながら車の影から身を乗り出し、男のズボンをまさぐると、ポケットから錆びたカッターナイフが出てきた。

今彼が手にしている、名も無い男の遺品。

(神様もあてにならない、自分で何とかしなくちゃ……)

ぎゅっと目をつぶる。

心臓が飛び出しそうな程高鳴っている。

その柔らかな首筋を狙う。

力の弱い自分では、失敗はすなわち死につながる。

嫌だ、怖い。ぎゅっと目を閉じ、心を無にする。

「小便ちびりそうだな坊や」

全身から血の気が引いた。

まぶたを開くと、隠れていた車のバンパーのすぐ横で、仁は煙草を吸いながら腰をかがめてこちらを見ている。

その手には、自分の錆びたカッターナイフよりも遥かに大きく、ぎらぎらとした夕暮れの光を反射する両刃のサバイバルナイフが握

られていた。

「人を殺すのは、初めてなんだろう？」

「あ……うあ……」

「相手が悪かったなあ、俺がいくらアキバ系のおたくでも、実生活までおたおたしてねえんだよ」

「ふぐうつ……ひくつ……」

「おたくとおたおたを掛けてみたんだが、うーん、坊やにはちょっと高度すぎる洒落だったか。上手いこと言っじゃねえか俺！ ってちよつとセルフ萌えしてたんだが」

困ったように頭を掻く仁の態度は、余裕に溢れていた。

この小さな暗殺者が次にどんな態度に出るのか、ちよつとした好奇心もある。

たとえばすり傷でも自分に付けられるのなら、将来はこっちの才能があるかも知れない。

こんな状況だというのに、目の前の子供の未来をぼんやりと思いつかべる。

「すっ」

「す？」

「すびばぜん……」

「おお、予想はしていたが小便を漏らすじゃねえ！」

「うああああああん！」

やっぱり子供も二次元が良いかも知れない。

泣き喚くその姿を見ながら、仁は困ったように立ち尽くすだけだった。

第5章 未来は小さなその手の中に、過去は大きな自分の中に

近くのスーパーらしき瓦礫の中から、子供服らしいものを探し出してきた。

作業時間はおよそ三時間四十分。

夜で月明かりだけが頼りな状況の中、この短時間で見つかっただけでも奇跡に等しいと言えるだろう。

彼は案外ラッキーボーイかも知れない。

だが、その反面気になる事がある。なぜ自分は子供の為に服を探さねばならないのか。

疑問には思ったが、考えるのも面倒になってそのまま作業を続けた。

「僕、向山藤次むかいやまとうじつて言います」

「俺は陣内仁だ。ここに住んでたんだが、今は見ての通りの有様さ」

「お父さんとお母さん、死んじゃったんです」

「聞いてないから言わなくていい」

ぐぐぐ

仁ではない方のお腹から音が上がる。

それは静寂に対し、あまりにも大きい。

「……………」

「……………」

「お腹空いた」

「いかの塩辛しかない。我慢しろ」

「いかの塩辛？」

「瓶詰めタイプの保存が利くやつだな。あと酒がここに」

「お酒は無理だよ」

瓶の蓋を開け、くんくんと匂いをかぐと、藤次はしかめつらをした。

普通に考えて、小学校低学年らしき子供が食べるものではない。

だが、菓子パンやらポテトチップなど、望むべくも無いことを藤次も知っていた。

「ジューズは無いが茶ならここにある」

「うー、ください。とても塩辛いです」

「だから塩辛というのだ」

「大人はみんなこんな塩辛いもの食べるんですか？」

「食べる奴も食べない奴も居る。あと二十年もしたら、その美味さが分かるかも知れない」

「あと二十年後、僕は生きてるかな」

「死んでるかも知れないなあ」

「あううー」

自分のお宝コレクションを失ったショックを、子供をいじめて解消する。

だが、思い出せばやはり、仁の心には止めどない暗雲が立ち込めてくる。

気が付くと、仁は藤次のそばで頭を抱えて体育座りをしていた。

「どうしたの陣内さん」

「大人は失う事もある……」

「何かなくしたの？」

「ああ、大切なものをな」
「なでなで」

「何をしている」

「がんばろう陣内さん」

「そうだな、彼女達は俺の心の中でいつまでも生きている」

「彼女達？」

「気にするな、俺はもう大丈夫」

「がんばろう陣内さん」

そう言っつて、藤次は半分以上残っている塩辛を差し出す。

「俺はいい、お前が頑張りゃいいんだ。それより、塩辛なんて食つてると喉が渴かないか？」

「お茶も全部飲んだよ」

「お前は、ガキだからって貴重な水分を！」

「痛い痛い、陣内さん痛い！」

「いがぐりげんこつ、四八の殺人技の一つだ」

握りこぶしで藤次の頭をぐりぐりと押す。

緊張感の無いやり取りが心地良い。

ほんの少し前、藤次は仁を殺そうと身構えていた。

その目に宿った殺意は、迷いはあるものの確かに真剣なものだ。

仕事柄、こんな時は相手が子供でも容赦無く殺さねばならない。

相手が子供だと油断して、死んでいった商売仲間を何人も見ている。

だが、それはいつも外国でのこと。

日本の子供にはまだ、そんな追い詰められた野獣のような切迫感が無い。

大人を欺くほどの手練手管も。

そのせいだろうか。気が付くと、今ここでこの命を散らせる事よりも、精一杯生きようとする剥き出しの本能を、ほんの少しだけ応援したくなっていた。

きつと自分があと三十年若ければ、藤次と同じように、この錆びたカッターナイフを手に使っていた事だろう。

もちろん、結果がどうなるかなど考えず、一か八かで。

もし運命が味方するなら、藤次も生き残るはずだ。

そして、いつかは殺す事になるかも知れない。

いや、今度こそは真剣な殺し合いを

「陣内さん、何で笑ってるの？」

「思い出し笑いだ、俺もキモいな」

「うん、キモいね」

藤次の頭に二度目のいがぐりげんこつが見舞われる。

今度は少し容赦しなかったので、藤次の目には涙が光った。

第6章 やがて私は途方に暮れる

そう、確かに涙が光っていた。

まるで今しがた殺された無念を、友人に伝えるかのように。

かつて友人だったもの。それは冷たく変わり果てた肉塊。

彼女のポケットからは財布が抜き取られ、見事に札と小銭が抜かれていた。

露骨であからさまな、それは見えない誰かの宣戦布告。

死体なんて捜せばいくらでも転がってるだろうに、わざわざ殺して奪ったのだろうか。

そう思うと、その理不尽な死に怒りが込み上げてくる。

殺した犯人に対してもそうだが、あっさりと死んで、冷たくなっている友人にも。

「簡単に死んでんじゃないわよ、まったく」

優美の死体のそばに腰を下ろすと、もう夜の帳が下りた町の、遙か遠くを見つめる。

死は恐ろしい、もっとも忌むべきものだ。

しかし、こんな風になってしまった世界では、いつそ死んでしまっている方が楽かも知れない。

「百合の花なんて咲かせる前に、彼岸花添えさせてどうするのよ」「空きっぱなしの目を閉じてやり、頬の涙を拭ってあげた。

墓を掘ってやりたいとも思ったが、そういう道具も、掘れそうな地面も見当たらない。

だが、そのままにしておくのは、あまりにも忍びない。

服も破られ、白い胸が露わになっている。最も忌まわしい現実が、そこには横たわっている。

やはり一人では危険だった。殴ってでも止めるべきだったのだ。

だが、今さら後悔しても遅い。

人生はゲームのように、セーブもロードもできない。

なるべく平静を装いながら、棺桶の代わりにできそうな、大きな衣装ダンスを見つける。

中に入っていた服は、意外にも自分のサイズとほぼ同じだった。袖を通すと、かなりジャストフィットする。

「胸が少し足りないわね。でも、気にしたらいけない。どこかの偉い人は、女の人を胸の大きさと判断するのは良くない事だって歌ってるわ」

こんな状況でも、少しくらいはふざけていないと、冷静さが音を立てて崩れ落ちそうになる。

だから平静を保って、できるだけいつも通りを装うのだ。

悲しいと思うから悲しい。辛いと思うから辛い。

心の痛みを、自分の心のナイフで抉る。

私は悲しくない、辛くない。

「あの世で私の好きな天安堂のマロンエクレア買って、ちゃんと待ってるのよ優美。先に食べてたりしたら、お尻ぺんぺんだからね」
自分もあまり長くはないかも知れない。

楽園なんて、そもそもあるかも分からない。

けれども、貧乏くじならもはや引き慣れている。

くすりと、夏子は自嘲気味に笑った。

一瞬、死んで動かなくなっている優美の顔が、自分の今の姿に重なる。

まるで自分の行く末を暗示しているようで。

今さら経験の無いねんねじゃないとは言え、レイプされて殺されるなんて、やっぱりごめんこうむりたい。

けれども、誰かと安易に手を組めばいいというものでもないだろう。

信用できる理由は？ 根拠は？ 女性同士ならば安心できる？

そんなことも考えたが、力の弱い者同士では、せいぜい話し相手ができるくらいだろう。

それに、女だから信用できるというのも甘過ぎる。

いよいよ末期的なこの場所で、都合の良い仲間なんてそうそういない。

「あつ、女がいるぞ」

男の声に、夏子は思わずその場に凍り付く。

ほんやりするにも程があるだろう私。

ああ神よ。女子高生みたいなトークしてる神よ。

私に何か恨みでもあるのか。

確かにあなたにちよつとムカついたけど、それだけで神罰か？

思わず歯を噛み締め、次に諦めを含んだため息が出た。

ゲームオーバー？ まさかね。

三徳包丁もあるし、いつそ戦ってみようかしら。

「ちよつと君、僕達は危害を加える気は無い、安心してくれ」

背中越しに声がする。

そんな事、今これから私をレイプしてやろうって奴でも言える。

っーか本当に安心して欲しいなら近付かないで欲しいんだけど。

と、思っても言えない。

いざとなると自分の弱さに腹が立つ。

腰に挿した包丁、きちんと戦いの武器にできるだろうか。

「こつちを向いてくれないかな。僕達はあなたと争うつもりは無い

よ」

僕達？ ってことは二人以上か。上等だよ畜生。

振り絞った勇氣は、その手に包丁を持つ力を与えた。

まさにそれはほんの一瞬、まばたき程度の時間。

こつりと男の額に切っ先が当たる。

眼鏡のひよろつちい男の額から、たらたらと血が流れ落ちた。

何も持っていないことを示すように、両方の手は小さく万歳をし

ている。

男はさして抵抗する様子も無く、少しぎこちないながらも笑みを

浮かべた。

「は、始めまして、僕の名前は柳勉やなぎつとむ、あつちでボウガン構えてるガ

タイのいいのは三木原毅、みきはらしんじそこで亡くなってる彼女を殺したのは僕達じゃない、信じてくれ」

「証拠は？」

「うーん、無いんだけど、そうならボウガンだけじゃなく、僕自身も武器を持って、今すぐ君を脅してもいいんじゃない？」

「それもそうね」

優美の腹には、致命傷になったらしい大きな何かの刺し傷が残っている。

おそらく夏子の持っているような包丁か、サバイバルナイフ辺りで刺したのだろう。

それに、相手は男が二人。

どうせ抵抗したところで結果はかなり危険だ。

暴れてもメリットは少ないと考え、夏子は包丁を腰に戻した。だが、気は抜けない。

「やれやれ、本気で殺されるかと思ったよ」

「仮にも私は女性なの、もう少し気を遣って声を掛けて欲しいわ」
言いながら、ちらりと優美の遺体を見る。

あのタイミングでは、犯人登場と誰もが思うでしょうと、目で二人を非難した。

さすがにこれには、勉も毅も申し訳ないと頭を下げざるを得ない。

「戦争が終ってまだ時間も経ってない上に、変な神とか降りてきたり、友人がこんな風にされたりで気が立ってたの。こちらも謝るわ」

「気持ちはこちらですね、せめて一緒に冥福を祈らせてくださいませんか」

毅が提案すると、夏子はきよとした表情を見せた。

「やけに礼儀正しいのね。見た目でもっと怖い人か思ったけど」

「あははっ、よく言われますよ。でも、建築関係に勤めていれば、もはやあいさつ代わりみたいなものですね」

「なるほど。ちょっと意外だったわ」

「まあ、頭が弱い分は体でカバーしないといけませんから。ちなみ

にこつちの勉は俺と違って、大学院生だったらしくて、理系のエリートらしいです」

「なかなか心強いわね」

「ところで、君島さんも楽園希望ですか？」

「他にすることも無いしね。仕方ないから」

「ようし三木原君、三人で頑張つて九千万円だ！」

ひよろつちい勉が胸を張り、自信満々で胸を叩く。その姿は、対照的でどこか滑稽だ。

「勝手に仲間にしないで」

「わかつたから、包丁の柄で僕の額をつつくのはやめてくださいよ！」

「三木原さんの方にやると後が怖そうだから」

「正直ですね……」

「よく言われるわ」

取り付く島さえ与えない。

あくまでも二人に気を許したつもりはなく、仲間になるかも決めてはいない。

むしろ、勝手な勢いとハイテンションで押し切ろうとする辺りに、夏子の中では既に不信任が湧き始めていた。

この二人はいざという時、きつと私を裏切る。切り捨てるだろう。覚悟を決めれば、犠牲になる前に何とかなるか？

それはきつと、天の神のみぞ知ることだ

第7章 ツンデレヤクザと空気の読めない子供

「町があるのか？」

「うん、知らないおじちゃん達が言ってた」

仁はさもびつくりしたという声を上げる。

それもそのはず、こんな瓦礫の荒野に、既に復興の兆しがあるというのだ。

政府も警察も司法も、そして楽園のチケットを買う以外に、まったく貨幣経済が存在しないこの世界に於いて。

「そこでは水とか食料もたくさんあるんだって」

「頭がおかしくなった連中の幻覚とかじゃないのか？」

「わかんないよ、僕も車の中で聞いたただけだもの」

「つまり、町に行くのに水や食料がギリギリだったのに、それを持ち逃げしようとした男が始末されたってことだな」

「うん」

言っていることは生々しく、今ここで藤次が仁に嘘を吐く理由はない。

彼の証言が本当なら、そこはかつて学校で習った、戦後の闇市のような活況を呈している事だろう。

そんな場所が、あの神が指し示した方、雲から光が漏れる方にあるというのだ。

仮に一人先着限定の例のイベントがそこで行われている事を考えると、そこに何らかの集落ができていることも、確かに想像に難くない。

だが、こんな状況で秩序は本当に保たれていると言えるのだろうか。

所詮は噂話であり、何の根拠がある話でもない。とは言え、確認する必要があるだろう。

「陣内さん、僕も少しは役に立つたでしょう？」

「うん、ちょっと見直した」

「でもさ、三千万円も現金で集められるかな」

「俺の取引先なら数億円くらい現金でいつも置いてた。ちょっと寄り道していけば、まだ誰も手を着けてないならあるはず」

「陣内さんってすごいね、ひよっとしてお金持ち？」

「うん、俺は金持ちだぞ。かなりお金持ちだ」

「なあんだ、それじゃ楽園行きは確定だね」

「銀行預金にあっただけだからな。通帳見せるだけで行けるなら確定だったんだが」

「けちだよ、神様」

「こら。そんな本当の事言ったら、いつどこからあのウザイ女の声が聞こえてくるかわからないだろ？」

あれから朝を迎え、早くも本日一回目のいがぐりげんこつがお見舞いされる。

子供と大人という、少しバランスの悪いコンビにも、徐々に慣れが出てきていた。

「うわあ、痛い痛い」

「お前に必要なのは空気を読むことだな」

「空気って読めるの？」

「場の雰囲気を見て、話の流れとかを理解するってことだ」

「話の流れ……」

「分からないなら分からないでいい。嫌でもそのうち理解できるよ
うになる」

「むっ」

藤次は自分が生き残るため、仁の邪魔にならないため、少しでも大人と同じ知識、力を手に入れたと思った。

いくら心が急いでも、体は大人になれない。

ならばせめて、頭で考える力なら対等になれるかも知れない。

そう思い、幼い脳を藤次なりにフル回転させていた。

「ここから歩いて二時間半くらい、で行けるかなあ。普段は自動車

で行ってたから」

「どこに？」

「あつちに港があるんだ、そこに倉庫だった場所がある。まあ、ちよつと色んなものに混じって大金がいつも置いてあつたんだ」

「港の倉庫にお金？」

「大人の社会には色々あるんだ」

子供に説明する必要は無い。

こちらの世界など、知らなくても良い事ばかりだ。

と、その時、仁の胸ポケットから一枚の写真が落ちた。

「わあ、綺麗なお姉さんだね。陣内さんの恋人？」

「榊川つゆたん、俺の永遠の心の恋人だ」

「榊川つゆたん？」

魔法少女シャイニングアヤでは、ライバルのマジカル京子を演じ、劇場版オリジナルアニメ、ガールズ・アンダーグラウンドではヒロインのあずさ役で秋葉原全土を萌えさせた。

新進気鋭ながら大役をそつなくこなすその大器っぷりに、今後が楽しみ過ぎるアキバ系の間人国宝とも言える声優なのだ。

……と、心の中でそつと語る。

相手は子供。

否、子供ではなくてもおおよそ語るべきことではない。

仁は自分のおたく知識をひけらかす事が、少なからず不快感を与える事を理解していた。

だが、それでも、言わねばならないことがある。

「いいか藤次、ある一部の世界に於いて、仲良し、或いはすごく好きな人に親しみを込めて、名前の後に『たん』と付けることがある。だから、彼女の正しい名前は榊川つゆ、だ」

「つゆたん！」

「藤次、お前がつゆたんをつゆたんと呼ぶにはまだ十年早い」

「なんで？」

「えーっと、まあ、大人の社会には色々あるんだ」

「なんか陣内さん、顔が赤いよ」

「照れたら負けなんだ、覚えておけよ藤次」

「くすくす、変なのー」

(ああ、なんかすげえムカつく……いや、我慢だ俺。相手は子供だ)

「ひとしたん！」

「超いがぐりげんこつ」

「うあああ」

「パワーアップだ！」

「きゃー、ひとしたん痛い痛い、あははは」

(……俺、こんなところでガキ相手に何やってるんだろ……)

「どうしたの陣内さん、また体育座りなんてして」

「ちよつと敗北感にさいなまれた。大丈夫だ、すぐ立ち直る」

子供を相手に話した記憶は、遠い彼方になっている。いつも腹黒

い商売相手達との探り合い。こういう時間は嫌いではないが、どこ

かくすぐつたくて戸惑いを感じる。

最後の煙草に火を点け、ゆっくりと味わいながら煙を吐き出した。

これを最後に禁煙せねばならない。

もう煙草の自動販売機も存在はしていない。

「藤次、いつまで俺に付いてくる？」

「僕も楽園に行きたいって言ったたら、陣内さんは怒り……ますよね、

やっぱり」

「お前に三千万円くれてやれと？」

「あ、いえ、だめですよね、ごめんなさい」

正直過ぎて文句を言う気も湧かない。

吸い終わった煙草を足で揉み消すと、藤次の目線まで腰を屈める。

「三千万円、自分で運べるか」

「え？」

「もしもあつた場合、自分で運べるか」

「は、はい……」

「楽園に着くまで、自分でその金を守れるか？」

「は……はい……」

「何でも人に頼れると思うな。だからガキはガキなんだ」

「はい……」

仁が歩き出すと、慌てて藤次も後を追う。

瓦礫を縫ってちよこまかと、まるで元気な子犬のように。

「たまたま俺がそばに居たら、手伝ってやるかも知れないけどな」

「え？」

「二度は言わない」

「は、はい！」

（今のセリフ、ちょっと恋愛シミュレーションゲームの主人公っぽいな……）

違う、自分の普段のキャラはこんなじゃない。

今日二度目の体育座りする仁。

そのそばで、ご主人の帰りを待つ忠犬のように藤次も座った。

第8章 まだまだ神様は語り足りない。人間達に多くを語る

おっはー、みんな元気してる？

楽園入園希望者、無事に合格者が五千人を突破しましたよ！

みんな拍手！ ぱちぱちぱち！

あはははは、ホント必死だねお前達。

ちよつと前まで札束なんて腹の足しにもならないって、生ゴミ以下の扱いしてたのに、汚い本性丸出しで、殺し合って奪い合っちゃってさ。

刺したり刺されたり、撃ったり撃たれたり。

痛かった？

悔しかった？

それでも勝てばいいからね。がんばれがんばれ。

後できつと何とかなるとか、甘っちょろい考えは捨てておこうね。お前達にもはや何にも期待してないから、むしろどんどんやっちゃってください、うん。殺し合い上等ルール無用、何でもありでOKよ。

ついでにレイプ？ バリバリやっちゃえ。私がされるわけじゃないし。きやはは

ああそうだ、ここで不安だったみんなに良い事教えてあげちゃうよ！

今までに人助けやボランティアで良いことしてきた人も、殺人しまくり強盗しまくり、レイプしまくりの鬼畜野朗も、楽園行けなかった奴は死後も全員地獄送りね

うふふふ、あははは、不条理だとかおかしいとか、よく分からない恨み節が聞こえてきちゃったわね。

何チヨー寝惚けたこと言ってるんのクズ共？

今まで散々やりたい放題やってきた、お前達の仲間の連帯責任だよ。だから、それが嫌なら何が何でも三千万円持ってきなよ。

両親でも恋人でも、親友でも恩師でも、女も子供も老人も、みんなきつとあんたの金を狙ってるよ？

だって、人は今この瞬間、金の前では肌の色も宗教も、話す言葉も生まれも見た目の太い細いも美醜も全て関係なく、完全無欠で平等だからね。

あ、ちなみに三千万円って数字に変な意味は無いから安心していいよ。

一円でも少ないのは却下だけど、多いのはいくら増えてもかまわないからね

文句ある？ あるなら五千万円にしようか？ 一億円でもいいよ？

あはははは、冗談冗談。

大丈夫、三千万円さえ持ってきたら、一万人は楽園行き、しかも死後の天国まで約束しちゃうぞ。

これは断然燃えるよね！

存分にヒートしちゃって！

HEY YOU！ お前達をつまらない命、消えるまで燃やし尽くしちゃいなよ！

さあ早くゼニ持って来い

ゼーニもってこーい

猫も杓子もカネカネキンコー

第9章 通信教育で空手を習っていた僕が本気を出す

ああ殺したい。

あのムカつく女神だけは百回殺したい。情け無用で、マジで殺したい。

夏子の指がぺきぱきと音を立てる。怒りが闘気となって、全身から滲み出ている。

それはまるで、何かに憑かれているようにさえ見えるだろう。

「君島さん、なんか気合入ってますね」

「あんな外道な天上界ラジオ聞かされて、平然としてる方がおかしいのよ!」

「でも、焦っても三千万円は空から降ってきませんよ」

「そうね、ところでお金はどこから調達するつもりなの?」

「良い質問です、この地図を見て下さい」

勉は背負っていたリュックから、セロテープで何度も折り目を補強した、すりきれそうな古い地図を出す。

褒めてください、そんな態度が少々鼻に付く。

だが、まだこれでは何のことか分からない。

「これは……この周囲の沿海部の詳細地図ね。これがどうしたの?」

「ここ、赤い丸印で囲んでるよね」

「あるわね」

「春日井組と香港マフィア、二つが協同で管理しているマネーロンダリング用の金庫です」

「は?!」夏子は思わず頓狂な声を上げる。

「元々はインターネットに流れてるタブロイド記事だったんだ。そもそも、そんなものが簡単にネットに流出するはずがない」

「そうよね」

「ところが! これが実は実際の春日井組の金庫番とされていたKのPCのデータなんだね。どうやら海外のロリコン無修正画像を

集めていたら、毒めんたまウイルスに感染しちゃったらくて」

「証拠は？」

ペテン師でも見るような目の夏子に対し、勉は怯まず続ける。

「実際に友人が行って、危うく事務所に連れ込まれかけた事が一度聞いた話だと、常に数人の屈強な男達が周囲をうろついているし、それに関する目撃証言はたくさんある」

「裏付けも一応ある程度取れてるわけね」

「流出した情報によると、少なくともこの場所には常に数億円相当の現金が保管されていたという。戦争での被害はゼロではないだろうけど、まだ相当額残ってる可能性は高いと思うね」

「すごいわね、実は元大学院生じゃなくて、単なるネットおたくの引きこもりだったんじゃない？」

「うう、三木原君、何だか僕ばかりいじめられてないか？」

「俺もちよつと、君島さんと同じこと考えたことある……」

「なっ、なんだよ、お前なんて高卒の低学歴のくせに?!」

「あ？」

「しまった!」

「何がしまったんだよテメエ、もう一度言ってみろ」

極限状態だったせいだろうか。それとも、思っていたことはどうしても口に出してしまうものなのか。二人の争う姿を見て、自分を信じるという言葉など、ほんの少しでも信じようとした自分が愚かしいと夏子は感じた。

秩序など存在しない。優美の死体を思い出せ。ひよつとすればこの二人が犯人なのかも知れないではないか。

「前々から俺を見る目が変だと思ってたんだ!」

「僕だって今の大学院に入るため、どれだけ勉強したと思ってるんだよ?!」

「俺だって親方に怒鳴られなくなるまでに、どれだけ苦労したと思っただよクズ!」

「なっ、く、クズだって? 僕がクズならお前はミジンコの糞だ!」

「ぶつ殺すぞオラア！」

「じよ、上等だよ」

醜い。

しかし、その争いを止めねば、火の子は自分にも降りかかりかねない。こんな事なら、最初から関わるべきではなかった。などと今さら後悔しても遅いのだが、夏子は二人の間に割って入る。

「いいかげんにしてよあんた達、ここで頭に血を上らせて何か良いことでもあるわけ？」

「すっこんでるアマ！」

「何ですって？」

ありつたけの殺意を込めて睨み付ける。それだけで殺はびくりと後じさった。

場合によっては本気で殺す。秩序を求めた者達が、自らそれを乱すならば容赦はしない。

そんな気持ちには、声だけでも十分に伝わった。

「ほら見る、君島さんが怒ってるじゃないか！」

「あんたもだよ」

「はい……」

目で殺す魔力があれば、二人は確実に今この世に存在はしなかっただろう。

彼女の目は血走り、獣のような何かを湛えていた。

「とりあえず港の倉庫に行くんでしょ、ひよっとしたらやくざかマフィアの生き残りがお金を取りに来てる可能性もある。急ぎまじよ
う」

「おー」

上っ面だけの、調子の良い奴ら。

夏子の中には既に、二人に対する信頼感などありはしなかった。いかにして彼らと手を切るか。もし自分に手を出そうものなら、本気で殺せるのか。頭の中で何度もイメージトレーニングをする。

少なくとも三千万を取ったら、その後は単独行動できるようにし

よう。

守ってもらえるかも知れないと、わずかでも期待した自分が馬鹿だった。

ふと気が付けば、あちらこちらの瓦礫の山から、血まみれの腕がよきりと、まるで新芽のように顔を覗かせている。

そう、この国では史上最大規模とも言える悲惨な戦争が起こったのだ。

地域によっては黒い雨が降り注ぎ、三日どころか一週間は空が晴れなかったと聞く。色々な国と戦争をしたのは知っていたが、どこで何が起きたのかさえ、もはや知る由も無い。

ただ一つ分かっているのは、この悲惨な現実。

どこからか生き残ったカラスが死体をついばんでいる。

蠅がたかり、卵を産み、その腐肉を蛆がもりもりと食べている。

おそらく、わずかな現金を奪われて殺されたのだ。

それは敵のしわざ。

周囲は全て敵なのだ。

漫画のようには上手くないかない。

助けてくれるヒーローもいない、神の奇跡は、一応起きたと言えるのだろうか。

だが、あんなものは奇跡と思いたくはない。

そしていつ仲間割れするとも分からない男二人の連れ合い。

食料、水の備蓄はあと二日分。

はつきり言って、気が狂いそうな自分に必死でブレーキを掛けているというのが正直なところだろう。

「一つ聞いていいかしら」

「分かることなら」

「もしその倉庫にやくざかマフィアの残党が居たなら、あなた達は私を守ってくれるのかしら」

「えーっと……」

早くも勉が困った顔を始める。

だが、相手が小悪党だと分かっていたら扱いてもたやすい。顔に出さぬよう、夏子は心のメモを取る。

「冷静に考えて、まず自分の身を守らせてもらいます。もし手が空いていて、可能であれば他の誰かを助けます。ここで変にヒューマンドラマぶつた事を言ってしまったって、身勝手に変な期待をさせたくはないですからね」

三木原毅、案外まともな奴かも知れない。同じく心にメモを取る。「おいおい三木原君。ここは嘘でも、まず女性を守るって言うべきだろう」

柳勉よ、お前は頭のねじを数本どこかに置き忘れて来たのか。思いつきり心のメモに、大きく強く殴り書き。

分かり易過ぎる程の小悪党っぷり。

絶対恋人にしたくないタイプ。

というか、戦前でもタイプじゃなかった事だろう。

「じゃあ柳君は、今回姫様を守るナイトを引き受けてくれるんですね」

「当然じゃないか、男として！」
今まで生きてきて、これほど頼りがいの無い言葉を聞いたことがない。

前代未聞というか、言葉も出ない。

毅は皮肉で言っただつもりなのだろうが、当の本人は薄い胸を叩いて、任せると言いたげに鼻息を荒くしている。その横で、すまないねと言いたそうに毅は夏子に目で語った。

「何だか逃げ足の速そうなナイトさんね」

「僕の強さを疑ってるね？ 実は僕、通信教育で空手を習ってたんだ！」

一瞬、何を言っているかわからなくなる。悪い夢なら覚めて欲しい。

絵に描いたような駄目男だ。

平和な日常でも寒い状況が、この場合は自分の命に関わる。渴い

た笑いも出ては来ない。

「俺は柔道を高校時代やってただけですから、ひよつとしたら柳君
にかなわないかも知れませんか」

「さあてどうだろう、僕も実戦経験はまだ無いからね」

頭痛薬が欲しい。先の大戦でなぜ、この男は死なずに生き残った
のだろう。

それこそ神の奇跡か気まぐれか。

「自分の身は自分で守るわ、大丈夫」

「強がる女って素敵だぜ」

（だぜって何?! だぜって何さ?! 調子乗りすぎるとあんた本
気で殺すわよ?!）

声にならない声、ある種の殺意が全身を駆け巡る。

握りこぶしが震え、唇の端がひくついているのを、毅は苦笑気味
に見ていた。

彼としても、お調子者で寂しがりな勉に、半ば強引にパートナー
にされているような状態だ。

いつか危機的状況になった時、勉は自分を裏切るだろうことも彼
の中では予想済みだった。

そして彼もまた、この君島夏子という女のことを決して信用はし
ていない。

お互い口に出しては言わない、薄氷の上に築かれた信頼関係だ。

だが、それでも今は、もっと危ない敵と出会う前の牽制にもなる。
そういう意味では、枯れ木も山の賑わいというものだ。

少なくともこの程度の男や、元OLらしい女に寝首をかけられる程、
まだ自分は落ちぶれていないと毅は思っている。

「とにかく倉庫まで早く行きましょう。彼らの残党がいるかどうか
わからないし、インターネットに情報が出ていたのなら、他にも気
付いて取りに来る人が居るかも知れません」

「そうだよ、もたもたしてる場合じゃない」

（お前が言っな）

と、心の中だけで呟くと、精一杯の笑みを浮かべて歩き始める。
既に楽園入場者五千人を突破。
心の中には焦燥感がつのっていた。

第10章 蒼い大海原とロンドン猫

そもそもやくざやマフィアがそれっぽい格好をしているという、世間的な認識が間違いなのだ。

本当に恐ろしい奴らは、ギンギンの派手なアロハシャツを着ていたり、髪を金色に染めたりはしていない。

それはチンピラ、三下、下っ端だ。

本物は同じ命の取り合い、戦場を駆け抜けてきた修羅だけが身に付けた、隠し切れない血の匂いと殺意がにじみ出ている。

そして、彼らは滅多に争う事はない。

銃や刃物を使う時は、どちらかが死ぬか再起不能になるまで殺し合いは続く。

本当に強く、本当に恐ろしい者達だからこそ、衝突は避けるのだ。だが、それは平和だった時代。

今や状況は一変している。

途中で拾ってきた双眼鏡で、少し小高くなった瓦礫の山から身を隠しながら、仁と藤次は倉庫の周囲を観察していた。

さすがにマフィアも春日井組も、組織として壊滅してしまったのだろうか。

一見した限りでは人の気配は無い。

だが、いきなり正面から近付いていくのは危険にも程がある。

春日井組であれば、まだしも日本語が通じるだけマシだが、相手が香港マフィアであれば厄介だ。

言葉が通じない奴もいるし、交渉成立と見せかけて、背中から撃ってくる奴もいる。

一応距離を取りつつ、近付いていくのが正解だろう。

「陣内さん、あそこに悪い奴らがいるの？」

「うーん、俺達は金を奪おうとしてるからな、今は俺達が悪い奴ら」

「あれ？」

「深く考えるな、こつこついう時代だ」

「はい！」

「こんな時に元気な返事するな……」

懐の中にある、最後の武器を改めて確認する。

たまたま死んでいた警察官の懐から失敬したニューナンプ、それと、自分が元々装備していたグロツク。

ニューナンプはリボルバー式になっており、替えの弾が無いため六発だ。

一方のグロツクは、替えのマガジンが一つあるので、全部で二十発は撃てる計算になる。

だが、敵の数や装備がわからない。居るとしても一人か二人だろうから、よほど正面切って挑まない限りは、問題は無いだろう。

ただ、ゆつくりとしている暇も無い。

ぼんやりしていれば食料も水も無くなり、楽園の枠も埋まってしまつたろう。

今朝方、あの渋谷系女子高生のような神のご神託が下った。

既に半分の枠が埋まっているという。

それは仁の心に、今までにない焦燥感を与えた。

時限爆弾を抱えて、その解体作業をさせられているような気分だ。

「落ちて着け藤次」

「うん」

「焦るな藤次」

「うん」

「いいか、こつこついう時は深呼吸だ」

「すうー、はあー。」

「よし、大丈夫だ」

「なでなで。」

「……………」

「落ち着いた？」

「少しだけな」

「よかった」

思わず体育座りをしそうになって、さすがにぐつと堪える。いい加減に、子供に翻弄され過ぎだ。

自分の方が仮にも三十年近く人生の先輩をしているのに、いったい何をしているのだろうか。

いや、案外こいつが大物なのかも知れない。

ちらりと藤次を見ると、屈託の無い笑みを浮かべ、仁の方を見ている。

藤次の目は、自分を完全に信頼しきっている。

なるほど、それで落ち着いているわけか。

納得すると同時に、嫌なプレッシャーが胃に込み上げてくる。守るべきものを傍に置いて戦う。

それはアニメやゲームでも現実でも、圧倒的に不利な事だ。そんなリスクを避ける為、相棒などは一切作らず、たった一人で生きてきた。

頼れるような身内も斬り捨て、一匹狼として闇社会に身を置くようになって久しい。

アキバ系に心を惹かれたのは、そこには失ったはずの心の平安があったから。

可愛くてひたむきな妹が居たり、厳しくて優しい姉が居たり、お日様の光と、緑の匂いがよく似合うような、学園での楽しい友達との生活。

どんなにひどいことをされても、主人公である自分を裏切らない二次元の恋人達。

そこだけが自分の逃げ場で、そこだけが彼の楽園だった。

ふと横を見ると、藤次が何か言いたげな仁の視線に気が付き、にっこりと笑う。

「なあに？」

「弟萌え、か」

「もえ？」

「うおおおおおおおおおおおお！」
できるだけ小声で叫ぶ。

自分で言ってみて、あまりの変態的倒錯振りに、さすがの仁もがつくりと膝を付いた。

ああでも、最近はそのいうのも流行しているという。

まさにビジネストレンドの最先端かも知れない。

「ん？」

「そこ、かわいらしく首をかしげるんじゃない！」

「痛い痛いーっ、僕何もしてないよ?!」

「存在が悪い」

「よくわからないけど、何だかとてもひどいことを言われている?」

「って、そんな馬鹿なことしてる場合じゃないんだって!」

「陣内さん、今日はテンション高いね」

「いつもと同じだ」

「痛いってばあ!」

いがぐりげんこつを叩き込みながら、もう片方の手で双眼鏡を覗き込む。

すると、目の前に人の顔が現れた。

言葉よりも先に手が動く。

ひよろつとした面長で、どちらかという痩せぎすという感じ。

手にスライドが既に引かれたグロックを握ると、照準を相手の心臓付近に定める。

相手はもはや観念したように両手を挙げ、引きつった笑みを浮かべている。

「名前と目的、そしてここに居る理由を言え」

「西坂出学院大学大学院前期博士課程工学部素材学科、柳勉！ あちらの倉庫にあるお金を拝借に来たところ、お子さま連れの人あなたを見かけ、声を掛けようとした次第です！」

「何だ、一般人か」

こちら側の人間かと思っていたが、一気に緊張の糸が緩む。

殺気を感じなかったとは言え、こんなひよる長い青二才に近付かれていた事に、仁は軽く落胆する。

「やれやれ、油断大敵か。こんな奴に近付かれるとは、俺もヤキが回ったかな」

「それはきつと、僕が通信教育で空手を習っているからですよ」

「よく分からないが、それは無い」

一言の下に否定すると、相手が銃を持っている事も忘れ、勉は露骨にむっとした表情を見せた。

だが、もちろん仁はそんなものを気にはしない。

「そこに隠れてるらしい二人、出てこいよ。こいつは鉄砲玉か？」

「あの、銃を持つてる理由を言っただけないとたぶん出て来れないかと」

「ああこれか。モデルガンだよ」

「どう見ても、そんな安っぽさが無いのですが」

「細かいツツコミするね君、ここで死ぬか？」

「い、いえ、決してそんなつもりじゃ！」

「まあ元々あっちの業界に関わる仕事はしてた。違法な武器の密輸商人だ」

「やっぱり！」

「お前、喧嘩売ってるのか？」

「三木原さん、君島さん、助けて！」

勉が半べそになって声を上げるのを聞いて、またも緊張の糸が緩む。

こんなに根性の無い鉄砲玉も珍しい。それに脅しが強すぎて、目の前で小便をちびられても困る。

仁は銃を懐に戻すと、全てをリセットするように溜息を吐いた。

「悪いな藤次、嫌な場面を見せちゃまって」

「陣内さん、超カッコイイです！」

「へ？」

「なんか、ゲーム『エイジオブウルフ2』に出てきた殺し屋のカイ

ンみたい！」

「え？ マジ？ 今の俺ってちょっとカインっぽい？」

エイジオブウルフは、仁が大好きな格闘ゲームの一つだった。

いい大人がと笑われそうだが、平和な時代にはゲームセンターのオンライン対戦で上位成績を取った事もある。

カインは特に、仁のお気に入りキャラクターになっていた。

「フフフ、テキサスの水牛の方が手ごわかったぜ」

「うわ！ カインのキメ台詞！」

「似てた？ 今の俺、似てたか？」

「ばつちりです！ うわー、なんかすごい！」

生まれて初めて、仁はガッツポーズをした。恥ずかしげもなく、こんな場所です。

「俺、秋葉原のゲーセンでロンドンキャットって名前で、カイン使ってたんだ」

「なにいつ、貴様がロンドンキャット?!」

突然、勉が驚いたような声を上げる。

「む？」

「俺はブルーオーシャンだ……」

「何だと？ あの店で最強のチャンプとして知られた謎の覆面ゲー

マー、貴様が？」

「初めましてロンドンキャット。あなたの噂もよく聞いていたよ」

「ブルーオーシャン。こんなところでお前と会うとは、運命を感じざるを得ないな」

盛り上がる二人を後目に、壊れた自動車の陰に隠れていた二人が姿を現す。

だが、仁達はまるでその事に気が付いていない。夏子はやれやれと肩をすくめ、小さく呟く。

「何してるの、あんた達」

氷のような視線が、背後から二人を刺し貫いた。

その刹那、本能的に仁の中には改めて、恥ずかしさが込み上げて

「僕が悪かったよ君島さん」

良いネタを掴んだ。

将来危機的な状況になったら、この件は手札に使えるかも知れない。

あくまでも合理的な思考を巡らせる夏子。

その冷静過ぎる横顔を見て、毅は絶対に自分がハツコイエンペラーという名前で、同じゲームセンターの中で知られていた事を明かしてはならないと深く胸に刻んだ。

第11章 ブルーオーシャンの逃走

「さて、三木原さん、それにブルーオーシャンとロンドンキャット、この現状を打破するための意見を出して欲しいんだけど」

「まずその名前をやめてくれ、俺には陣内仁という、親にもらった立派な名前が」

「じゃあロンドンキャットなんて、変な名前でゲームしなきゃいいんじゃない？」

「くっ！」

人間というのは、嘘よりも本当の事を言われるほうが遥かに痛い。特に隠していたはずの秘密等は、その典型例と言える。

内緒にしていたはずのポエム帳、机の奥に潜ませた若い頃描いた漫画。

しかし、時としてそれは大人になっても続いている事がある。

今まさに、勉と仁が置かれている状況はそうだった。

後悔先に立たず。

今さら取り返しがつくはずもない。

「とりあえず君島さん、あまりふざけないで下さい。今がどういう状況なのか、あなたならわかっていられるでしょう」

「こんな屈強な男達に囲まれて、肉体的に不利な私は、こんな状況だからこそ自然と傍流に追いやられてしまうでしょう。握った強みは死んでも離さない、それが私の生きる鉄則」

「あはは……タフだね君島さん……」

「女が優遇されてるなんて、勘違いしてる馬鹿とか多いからね」
毅然とした態度は、まるで永久凍土のようだ。

だが、それだからこそ、ハツコイエンペラーなどという二つ名を知られなくて正解だったと、毅は心から安堵のため息を漏らす。

「これでハツコイエンペラーが居たら、秋葉原ゴッドスリー勢ぞろいなんだけどな」

「今までで一番恥ずかしい名前ね、それ」

夏子の言葉は、氷の刃となって毅の心に突き刺さる。

「どうしたの三木原さん、顔色悪いわよ」

「い、いえ、何でもありませんよ」

(今までで一番恥ずかしい名前……か……)

思わずそこから逃げ出したい衝動を堪えて、ぐつと拳を握る。

そもそも、今は恥ずかしい過去を暴露して遊んでいるような余裕は無いのだ。

「そろそろ本題に戻ろう。今朝の神のアナウンスを聞いたならば、今我々が悠長にだべっている時間が無いことはみんな分かっていることだと思っ」

「そうね、ここは一つ専門家に従いましょうみんな」

夏子の提案に、勉と毅は黙って頷く。

あくまでも表社会で生きてきた彼らにとって、リスクはあれど、今は目の前にいる陣内仁と手を組む以外に術は無い。

裏社会に生きていた人間というだけで、普段なら絶対に近付きたくない職業の人間だが、今は贅沢を言っている場合ではない。

それに、藤次のような幼い子供、それも血縁関係も無い連れ合いを持っていく事が、彼の人柄を表している。

誰もがそんな思いを持ったからこそ、危険を承知で声を掛けたのだ。

「いいか、この倉庫の出入り口は表のシャッターの所しかない。窓は二階にもあるが、およそ人が入れるスペースでもない」

「つまり？」

「中に誰かいる危険はあるが、正面から入るしか方法が無い」

勉は露骨に嫌そうな表情を浮かべ、その横で毅は軽く何かを考えるような素振りをする。

結局のところ、またも誰かが正面切つて動かねばならないのだ。

さっきは自分がジャンケンに負けた為に表に出たが、今回もまたそうなったら、今度こそ殺されるかも知れない。

そう思うと、さすがに気が気ではない。

「それ以外手段は全く無いの？」

「見ての通りシャッターが閉まっていて、あとは通用口があるだけだ。このドアの鍵を壊して、中に入るしか無いだろう」

「それ以外方法が無いんだろうけど、あなた以外は足手まといになりかねないわね。ましてや一人は子供だし」

「ここまで来て言い訳するのか？ ならば、勝手に死ぬ。カネが欲しいなら、ガキだろうと一般人だろうと、生き残る為の作戦には命を懸けてもらおう」

「正論ですね。俺はあなたの意見に賛成だ」

毅は頷き、他の三人に同意を求める。

「自分の身を自分で守る。っていうのは分かるわ。でも、今言ったけど、藤次君は子供よ？ こんな荒事に駆り出して、自分で何とかしろって言うのはちよつとひどすぎない？」

軽蔑の眼差しを向けた瞬間、夏子のブラウスの裾を藤次が引つ張る。

「お姉さん、僕は足手まといになりたくない」

「子供はいいのよ、何も心配しないで」

「僕も、戦えるよ」

「藤次君、無理はだめ」

「こいつは無理なんて言っていないぞ。君島さん、あんた藤次を何だと思ってる」

「何って、子供に何ができるって言うのよ！」

「子供だから何もできないって言うのか？」

「そうよ、あんた達もそう思うでしょう」

柳と三木原を射抜くように見据える。

だが、その横で仁は続けた。

「例えば五人でお金を手に入れた。しかしそこには仮に一億二千万しか無かった。向山藤次は働いていない。そんな時、お前達は藤次にも平等にお金を分け与えるのか？」

「どつという意味ですか」

最初に口火を切ったのは毅だった。

勉はその横で、じっと成り行きを見守っている。

気怠そうに仁は続ける。

「簡単な事だ。今三千万円という金の持つ意味が、かつての貨幣経済の時代と違うんだ。いや、それ以上に重要だろう。一円少なくとも神は楽園に入れないと言う。もしもお前の分け前が五百万円足りないなら、その金をお前は藤次にタダで渡すのか？」

辺りは静まり返り、誰も口を開かない。

すぐさま返事をできるはずなどない。

誰もが生きたい。

楽園に入りたい。

その為ならば、犯罪さえ厭わないと覚悟を決めている者達ばかりだ。

金が足りないことは、死を意味する。

「楽園に入れなきゃ、いくらのお金も全部紙くずだ。意味が無い。しかもこのゲームに負ければ地獄行き決定と来ている。そうであれば、どんな卑劣な手段を使っても天国に行ける保証付きという状況で、お前は何もしなかった藤次を平等に扱える自信があるか？」

「あなたはどつなんだよ！」

見かねたらしい勉が声を上げる。

脂汗が頬を伝い、拳は高ぶる感情に震えている。

「俺は嫌だね、働かなかつた奴にそんな貴重な金は払いたくない。

だから藤次にも働かせる。自分の手で楽園に行くチケットを、自分の力で手に入れさせる」

「陣内さん、あんたマジでこんな子供を使う気？」

「大マジだ。こいつなりに精一杯生きようとしているのに、答えてやらないお前達の方が失礼だろう」

全員の目が藤次に注がれる。

最初は俯いていたが、やがて覚悟を決めたように、凜とした目で

皆の顔を見つめた。

少年は今、大人への階段をまた一步昇ったのだ。

「決まりだな、君も俺達のパートナーだ」

「三木原さん?!」

「今は猫の手も借りたい状態でしょう。彼が真剣に協力をしてくれるなら、今は助け合えばいいじゃないか」

「君島さん、あなたならわかりますよね?!」

「藤次君の自主性を尊重するわ」

「ちよつとちよつと、こんな子供の失敗に巻き込まれて、僕らみんな全滅とかなつたらどうするんだよ?! お前ら頭おかしんじゃないの?」

「おかしくて結構、柳さん、あんたの好きそうな民主主義的な多数決なんだが、何かまだご不満でもあるのか?」

「あるね、大いにある! 僕はこの件から下ろさせてもらつよ!」

「じゃあ好きにすればいい」

夏子の言葉に、勉は金魚のように口をぱくぱくとさせる。

自分はもつと、この中で必要とされていると思っていた。

それが、たかが少年よりも下だと言われたのだ。

解せない。理解不能。

こいつらはいつたい何を言っている?

「ははっ、おっ、お前達、僕を仲間から外してもいいのかい? インターネットで調べていた情報は欲しくないのかい? まだたくさんあるんだぞ?」

「往生際が悪いな、ブルーオーシャン。ゲームと現実が違うんだ」

「ちよつと待ってくれ! 三木原君、君なら分かるよね?」

「焦り過ぎですよ。落ち着きなさいな柳さん」

「あああ焦ってなんかいない、そもそも何だ? こんなぼつと出のやくざ者なんて信じるのか? 大学院生で将来は博士になるはずだった僕より、こーんなやくざ者の言うことを真に受けるのか?」

「やくざ者で悪かったな、お前とは仲良くしたかったよブルーオー

「シャン」

「あははっ、なっ、何だよ何だよ。本当は僕が居ないと困るだろ？」

「誰も出て行けとか言ってるんですけど、落ち着いてください柳さん」

「何だよ何だよ、ああそうさ、僕は邪魔なんだよ！ 学校時代から大学院までずっと友達は居なかつたさ。悪いかな？ 頑張ってるんだよ！ 精一杯頑張ってるんだ。みみ、見てるよお前達！ 楽園に先に入って、お前達なんて入れてやらないんだからな？」

「あなた、だんだん本性が出てるわね……」

「うわああああああ！ 畜生、ちくしよおおおおおお！」

柳は叫び声を上げて、来た道を逆方向に走っていった。

だが、誰も追いかける人間など居ない。

もはや頂点に達した疑心暗鬼は、増える事はあっても減りはしない。

「陣内さん、僕が悪いのかな」

「いや、お前はお前だ、ガキだからとか考えるな」

「うん……」

せつかく増えた仲間の失踪。

その事に、藤次は責任の一端を感じてしまう。

だが、この場に居合わせた誰もが胸を撫で下ろしていた。

明らかにしてあからさまに無能な人間を排除する。

それも正当で、合法的に。

極限状況に置かれているからこそ、どうしても譲れない事がある。

そして、それは言葉にするまでも無く誰もが共有していた思いだった。

無意識と偶然が織り成した追放劇。

誰も相手を非難する事などできようはずもない。

第12章 楽園と、それ以外

神は教えを与えたもつた。

我らに道を与えたもつた。

だから我々は、忠実に神のご意志を反映せねばならない。

今まで幾度と無く、宗教は血で血を洗い流し、我々の前に忠誠と信仰を試して来た。

そして二十一世紀となった今、神は再び問おうとしていらつしやるのだ。

「ああ神よ、私達はあなたの愛子です！」

感極まって、鈴木敬一郎は快哉を叫んだ。

無論、彼は現在までに五千人いる楽園入場者の一人である。

三千万円は近所にあつた消費者金融の社長の家から盗み出し、見事それを完納した。

「なあなあ、こちらマジで救われてるん？」

山上春乃はまだ着慣れない、だぶだぶとした不思議な白衣の袖を

振りながら敬一郎に問いかける。

楽園に入つてまだ数時間の彼女には、まだ自分が助かつたという実感が無い。

神はそのように呼んでいるが、楽園という象徴的な建物や町は無く、ただ真つ白い世界が広がるばかり。

そして、自分の着ていた服が今のように変化して、頭には変な輪っかが載つただけに過ぎない。

三千万の金を用意する為、彼女は五人の老人を手に掛けた。

人よりも背が低く、童顔で優しい顔立ちをしている春乃に、油断をする者が多かつた事が幸いだつた。

生きるためにと、容赦なく首を絞めては金を奪い、今ここにいます。

時折争つたせいもあつて、彼女の頬にはまだ少し血が付いている。かつては単なるフリーターとして生きていた彼女が、ある日を境

に殺人鬼に身をひるがえす。人を殺すのに必要なのは、逃れようのない現実と、一人目を殺す勇氣だ。

同じ人の形をして、同じ言葉を話して、ひよっとすれば町でかつてすれ違ったかも知れない誰か。

彼女はそれを手に掛けた。

生きるために、ただ純粹な本能として。

「君はまだ楽園に慣れてないだけなのですよ。そしてもう、これ以上罪も無い人を殺しては駄目ですからね？」

「別に、殺したくて殺したんやないし」

罪悪感が無いわけではない。

冷静になれば、苦痛に歪んだ老人達の顔がまぶたの裏に浮かんで消える。

仕方なかった。

「ごめんなさい、せめてご冥福を祈ります。

謝る言葉をぐっと飲み込む。

楽園行きの手ケット、それはまるで蜘蛛の糸だった。

地獄の底に垂れ落ちてきたから、一心不乱にそれを登り続けただけ。

誰よりも早く登ろうとして、ただそれを手繰っただけ。

奈落に落ちていった人々の顔など、覚えていない。

思い出したくもない。

「人間は今まで好き放題やり過ぎたのですよ。だから、神様が怒っても当然なのです」

「そう、やね」

春乃は大阪の貧しい家で、三女として生まれた。

決して豊かではないけれど、温かな家族に囲まれて、たくさんの友人達が居て、春乃は幸せだった。

そんなある時、アルバイト代を貯めて、やっと巡ってきた憧れの東京旅行の日が来た。テレビの向こうで見ていた渋谷や池袋を、友人達と歩いてみる。

大阪とは桁違いの発展した町並みと、大阪弁の飛び交わない不思議な街。

何もかもが新鮮で、驚きに満ちていた。

そして、突如降ってきた激しい光に思わず目を閉じた後

「なあ、ビックリカメラとか、そういうオチってないやるか？」

「残念ですけど、今私達があるこの世界が真実なのです」

「こんな何でも有りの世界が？」

「最終戦争を超えて、愚かしい人類に神が光臨され、その神がおっしゃったのですから、それをありのまま受け容れる事が大事ですよ」

「そっちなあ……」

いちいちオーバーリアクション気味のこの男が、春乃は少々鬱陶しく感じる。

別に仲良くなどしたくなかったが、今は仕方ない。

元々三千万円を手に入れれば、後はどうでも良かった。

神が伝えた場所に行くと、今の自分と同じ、不思議な白衣と光る輪を頭に載せた人間がいた。

その姿形から天使なのかと思ったが、どうやら先に楽園に入った同じ人間達らしい。

では、一人目の楽園に入る際の手続きは誰がやったのか？

鈴木に問うと、どこかの学校の制服のようなものに身を包んだ、気怠そうな若い女が楽園への水先案内をしていたという。

あくまでも自称一人目の証言であり、その姿形の不釣り合いな様を考えるに当てにはならないと彼は付け加えた。

そして、現在は実際の楽園の人間になった者達が交代で、ボラントイアによる楽園の水先案内人を引き受けさせられているらしい。

それも、半ば強制的なものようだった。

楽園に最初に入ったとき、春乃は憔悴しきっていた。

人を殺し、泥水をすすってここまでやってきたのだ。

そして、全てが終われば休ませてもらえると信じていたのだ。

だが、現実には常に非情なもの。

飯に、断ると何かのペナルティがあるかも知れない。

そう考えると、その事を問いたただす事もどこかはばかられた。

「いいですか？ この天使の輪が付いた私達を、楽園の外の人々は危害を加える事はできません。つまり、悪意を持つての攻撃はもちろん、事故や病気とも無縁となるのですよ」

「つまり、不老不死なん？」

「いいえ、歳は取りますし寿命が来れば死にます。ただ、病死、事故死、何らかの理由による他殺などが無くなるのです。神は我々に安楽を与えたもつたのです！」

安楽を与える。

その言葉にだけは同意しかねたが、春乃はそれをぐっと飲み込む。「うち、アホやからようわからんけど、絶対に安全ってことやね？」簡単に言えばそういうことになります。少々子供っぽく言わせてもらえば、私達は無敵バリヤーに守られていると思ってくださればよいでしょう」

「なるほど、説明ありがとう」

「今時の大阪の方は、お礼に『おおきに』って言わないのですね」

「何年前の話してるん？」

あからさまにむつとして、春乃は言い返す。

「いやいや、まあいいですよ。」

とりあえずやることは教えた通りですからね。三千万円を持ってきた人なら、その手で頭を触ってあげればいいだけですから」

「りょーかいや」

この男は何を考えているか分からない。

ただ、楽園の事を何も知らない自分にとって、この敬一郎という男は導いてくれる先生のようなものだ。

そして、彼の言うことが本当であれば、自分は完全無欠に救われたのだ。それなのに、春乃の心はなぜか心が晴れない。

うかうかする暇も、考える時間も与えられぬまま、神様の手伝いをするはめになってしまつては、正直言つて拍子抜けというか、予

想を大きくはずれた事だった。

だが、もはや後戻りはできない。

手伝うより他は無いのだ。

楽園のいくつかある出口の一つから出ると、淀んだ空気に思わず軽い吐き気がする。

手には古びた拡声器を持たされている。

ぼろぼろで、知らないメーカーの名前が書いてある事から、これは魔法でも何でもない、ただの機械なのだろう。

それは人間に安心感を与えるためか、それとも予算不足なのか、春乃にはわからない。

しかしやることは決まっている。自分はそれを遂行せねばならない。

気が付くと、いつの間にか人だかりができていた。

妙な白衣を着た、天使の輪を付けた人間の降臨。

そばにあった闇市の人々は、ぐるりと春乃を囲むようにして距離を取り、徐々にざわめき始める。

春乃は拡声器のスイッチを入れ、口元に当てた。

「えー、私は神の使者なんですけど、なんや、手伝えて言われたんで参上しました。

以後よろしくお願いしますー。

とりあえず、三千万円持ってきた方、お手数ですけどこちらに来てもらえますか？」

気怠い声が、拡声器を通過して辺りに響き渡る。

最初静かだったのが、やがて、群衆の中から声が上がった。

「何が神の使者だ！ 俺達を馬鹿にしゃがって！」

「死に腐れ外道！ 地獄に堕ちろ雌豚！」

「三千万持ってこれない奴には死ねと？ はっ！ いい気なもんだな」

予想通りの罵詈雑言に、思わず春乃はため息を吐く。

うんざりだった。

「あなた達は何かを犠牲にしたのか？」

「私のように行動した？」

後悔と贖罪の意識を振り切って、人を殺したの？」

「字面じゃなく、実際に赤の他人を殺す時、どんな風に思うかわかる？」

ナイフを刺した時、案外と簡単に人の体にそれは差し込まれていく。

それに驚きつつ、目の前の被害者は世にも恨めしそうな、そして死にゆく現実が信じられないと言つような表情で、じつとこちらの目を見据えてくる。

まるであの世まで、瞼の裏にその姿を焼き付けていこうとするように。

口から漏れるのは精一杯の呪いの言葉。

自分の手に伝わるなま暖かい血の感触。

カッと見開いた瞳は徐々に色を失い、唇を舐めて感じるのは鉄と塩の味。

べっとり赤く染まってゆく手。

そうして手に入れた三千万円を、一人では守りきれないと知り、同じように金を持った仲間を捜し、徒党を組む。

時には仲間割れをして、時には何かを失って、刀や銃や、鉄パイプやバット、様々なものを血で汚しながら、光の射す方へ歩いていく。

狂うこともできず、死ぬこともできず、正気と狂気の境を行ったり来たりしながら。

そして、気が付けば天使の前に立っていた。

周囲には、金を巡って争つたらしい、真新しい人間達の骸が転がり、彼らの血でできた水たまりを超えて、天使に慈悲を乞う。

そうして手に入れたのが、楽園の入場権利なのだ。

それを甘つちよるいヒューマニズムと、現実を否定するだけの人々に罵詈雑言を浴びせられるのは、春乃としては甚だ心外なことだ

った。

とつとと死ねばいい。

早く死ね。

死んじまえ。豚糞野郎共。

「あんな、文句言うのはみんなの勝手やけどな、うちら単なるアルバイトやから、何言つても神様に届けへんよ?」

「神に会わせる! 俺がぶっ殺してやる!」

「ふざけんなクソ大阪人! 手出しできねえからってイキがってんじゃねえぞオラア!」

誹謗の嵐、罵倒の津波が、全ての方向から押し寄せる。

目を血走らせた数十人の男達は、手に手に何かの武器を持ち、今にも飛びかかりそうな勢いで、女一人である春乃の周囲を囲んでいく。

通常であれば、土下座をして命乞いをしていたことだろう。

だが、今の彼女にとって、それは虫けらも同然だった。

「はいはい、クソでもうんこでも好きに言つてな。うちは貧乏人に用は無いいん」

火に油を注ぐような発言に、群衆はさらにいきり立つ。

だが、もはや春乃の耳には届かない。

刀で斬りつけようが、機関銃で蜂の巣にされようが、彼らは自分に傷一つ付ける事はできないのだ。

群衆はそれを理解しているのか、誰一人として手を出そうとはしない。

或いは、敵意を持った者は近づく事さえできないのかも知れない。どちらにせよ、どうでもいいことだ。

舐めるようにして、人々の顔をじつと見る。

醜い、正視に耐えない。

春乃は全てを吐き出すようにため息を吐く。

「三千万円集めた人はこっちに来てーなー、貧乏人に用はあれへんから」

「無視してんじゃねえよメス豚！」

「本気でぶつ殺すぞクソがあ！」

群衆はますますヒートアップしていく。

もし自分に特殊なバリヤーが装備されていなければ、今頃は挽肉にでもされていたことだろう。

だが、現実として彼らは、指一本触れることさえできないでいる。

「私達は三千万円を人数分持ってきた、道を空ける！」

「なにい？」

殺気だった群衆が静かになる。

声の主を探して、血走った目が一斉に辺りを見渡す。

数発の銃声、そして叫び声。潮が引くようにして、一カ所だけ人が散った。

「どいてくれ、死にたくないならな」

もはや布きれ同然の衣服をまとった、満身創痍の五人の男達がこちらに近づいてくる。

先頭を切って、少し前を歩く男は頭がはげ上がっていた。

その姿は、かつての高校で嫌いだった、年老いた化学の教師を思い出して、少し不愉快な気分になる。

えんじ色のジャージに身を包み、手には拳銃を装備している。彼がリーダーなのだろう、他の男達はバットや鉄パイプで、ジャージの男の背後と左右の守りを固めている。

男達の真ん中には、台車に乗せられた大きな木箱が揺られている。おそらくその中に、人数分の札束が用意されているのだろう。

「うおらあああああああ！」

張りつめた静寂が突如破られる。

道を空けていた群衆の中から、刀を持った男が走り込んできた。頭上に構えた日本刀は、振り下ろす以外の選択肢を全て奪う。がら空きとなっっている脇を守ろうともしていない。

一撃必殺、決死の突撃だった。

「うわあつ、やめつ、てつ」

勝負は一瞬だった。

最も年老いていたであろう男の頭上に、日本刀は力任せに振り下ろされる。

切れない包丁でトマトを切ったように、中途半端に肩から腰にかけて刀がめり込む。

「まだ……死にたくな……い……」

血しぶきが男の全身に掛かる。それは赤いシャワーのように。

男の仲間達は、手に持った武器で臨戦態勢を整える。

だが、襲いかかってきた暴漢は、振り下ろした日本刀をもう構えようとはしない。

リーダーらしき男から、殺意が無いことに違和感を感じていた。

「俺を殺さないのか」

「お前からはそれ以上の殺気がしない。目的は自分一人分、楽園に入るための三千万円が欲しいだけだろう、違うか」

「？」名答」

「一番老いた渡辺さんに目を付けたのは、偶然でもないはずだ。

そして、お前はこれ以上私達と争うことも望んでいない」

「ふん、説明する手間が省けたか」

「いいだろう、お前に渡辺さんが使うはずだった三千万円、くれてやるよ」

リーダー格らしい男は、銃口を向けつつもにこやかな笑みを浮かべた。

「自己紹介は楽園に入ってからでいいだろう。天使さん、私達五人を楽園に連れていってくれ」

「くい、と顎で合図する。

とりあえず仕事は仕事だ。

春乃は男達に近付く。

自分と同じ、正直でまっすぐな生への欲望。嫌いじゃない。

「はいはい、それじゃうちが頭に手を載せたら終了やから。

ここで金額と人数は確定やで。

これ以上邪魔したりしたら、めっちゃ怒るからね」
じろりと群衆に睨みを利かすと、人の輪はさらに数歩後ろに後退する。

立ちこめる殺意と、獲物を狙う肉食獣の群れのような視線。まるで爆発寸前の時限爆弾を抱えているような気分だ。

だが、春乃はあまり気にもせず、手を頭に載せる。

「ほな、いくでえ」

指先から光が溢れ、やがてそれに包まれると、中の人間は楽園へと転送される。

光が消えた時、彼は既に楽園の中の住民となって、自分と同じ服装になっており、先に入った住人達から、色々と説明を受けることになる。

残された男達は食い入るようにそれを眺めた。

まるでお預けを食らった犬のように。

「焦らんでもええからね」

二人目に手を載せ、これも無事に終了する。

三人目、いよいよ救われない人々のすすり泣く声が、辺りを包み込むようにして流れる。

嫉妬、絶望、あらゆる希望を失い、それでも生きねばならない人の性。

辺りはまるで、お通夜のような様相を帯びている。

他人の幸福を喜ぶような余裕など、彼らにあるうはずもない。

「うるさいなあ。泣いてる暇があったら、あんたらも金探してきい
や」

四人目に手をかざす。

これも無事に完了した。

そして、いよいよ乱入してきた男の番になった。

「はい、最後」

「宜しく頼む」

手を載せる 何も起こらない。

もう一度手を載せる。

「あれ？ 三千万円ちゃんとある？」

「あるだろ、木箱の中にほら！」

「楽園の入場資格はあるっぽいなあ、手はちゃんと反応してるし、なんでやる」

「おいおい、早くしてくれよ」

「うーん、ちょっと待っててな」

と、待たせてみたものの、果たしてどこの誰に何を言えばいいの
だろう。

神に呼び掛ける？

それとも鈴木を呼び出す？

「えーっと」

「どうしたんだ、早くしてくれ！」

その時、空から聞き慣れた声が聞こえてきた。

「チャオ

神様だびょん！

みんな元気してた？

はい、ちょうどだった今、一万人目の登録が終わっちゃいましたあ。

ブツブツ、残念無念ご愁傷様！

三千万円集められなかった貧乏人、死ねば？

三千万円集めたのに楽園にあぶれた人、いやー惜しかったね。

でも、神様の私は平等なのだー、うん

老いも若きも、男も女も、とりあえずみんな今から楽しい罰ゲームです。

どんな事をするのかは少しの間秘密なんだけど、注意事項の大ヒントを大発表しちゃうーす。

うっひょお、神様太っ腹だね、人類頑張れ！

さてさて、そんなスペシャル私からのご神託、

『吸血鬼に気を付けて』

以上、神様でーしたっ
」

第13章 おっかなびつくり驚天動地、人類史上最大の罰ゲームのはじまり！

空から流れた報せに、夏子は思わず札束を取り落としした。勉と袂を分かち、やっとの事で手に入れた楽園行きの金。

それが全て、無駄になってしまったのだ。

信じるものと信じられぬもの。

取捨選択を繰り返しながら、無我夢中でやっとここまでたどり着いたはず。

慎重に、十分過ぎる以上の注意を払って倉庫に潜入し、金を見つけた後は、皆で一心不乱に札束を数えた。

多少の誤差はあるだろうが、ざっと見積もっても軽く二億円はある。

この後にもし勉が戻ってきたり、暴漢に出会ったとしても、二人までなら買収をしてなお釣りが来る計算だった。

救われたはず。

それだけの大仕事を終えたはず。

なのに、なぜ？

「君島さん、とりあえず落ち着くんだ」

「落ち着けですって？ どうやって？」

夏子は仁の胸ぐらを掴み、食ってかかる。

血走った目は、もはや理性の光が薄れていた。

「別に大地が割れて溶岩が吹き出したわけでも、空から隕石の雨が降り注いだわけでもない、俺たちはまだ生きてる、それでは理由にならないか？」

「なるわけないでしょ！」

「じゃあ今すぐここで死ぬか？」

「何で私が死ななきゃいけないわけ?!」

「少なくともゲームオーバーじゃない。俺達はまだ可能性が残されている。それだけでも十分じゃないか？」

胸ぐらから手を離し、一心不乱に考えを巡らせる。
深呼吸をして、夏子は誰も居ない方に向きを変えた。

「まあ……確かに……」
絞り出すような、精一杯の声だった。

ほんの少しでも気を抜けば、そのまま闇の中に落ちてしまいそう
で。

だが、気絶したとて、目を覚ませば現実是不変ならない。
今一番必要なのは理性。

それが夏子自身を踏みとどまらせていた。

「俺も陣内さんに賛成ですね。まだ幼い、年頃の子供の前で取り乱
すのはどうかと」

「ごめんなさい……」
なでなで。

「君島さん、いいこいいこ」

「うん、私は良い子なのよ藤次君」

「ところで、吸血鬼ってドラキュラとか、そういうのだよね」

「そうよ」

「ドラキュラが町に溢れかえるってことかな？ 僕、十字架作るよ」
「神があれだけ常識はずれなんだから、吸血鬼が果たして、十字架
や日光に弱いかどうかはわからないわよ」

夏子の発言に、仁は考え込むように俯く。

命懸けで集めた札束は再び、ただの紙くずになってしまった。

そして、一万人以外の残された人類には、過酷を極めるだろう罰ゲ
ームが始まる。

「うーん」

ぼりぼりと、毅が頭を掻く。

仁はじつとそれを見つめた。

なぜそれが気になるのか、自分でもわからない。

「どうしました？」

「頭、掻いたよな」

「掻きましたよ」

「頭、掻いた」

「何ですか、変なものでも見るみたいに」
「ぼりぼり。」

それは爪の音。

ぼりぼりぼり。

何か心が傷跡を付ける。

ぼりぼりぼりぼり。

ごく普通の光景なのに、どうしてそんなに気になるのだろう。
ぼりぼりぼりぼりぼり。

「吸血鬼ねえ」

「何か分かったの？」

「いや、別に」

その時、一匹の蚊が目の前を横切る。

小さな羽音、その行く先を目で追うと、不意に消えたように見えなくなってしまう。

まるで現代の忍者のようだ。

「蚊ってまだ居るんだな」

「最近下水道が発達したせいで、年がら年中いるらしいわ」

「かゆいのやだよお」

「好きな人の方が珍しいわよ」
「ぼりぼり。」

殺はまだ頭を掻いている。

「どうしたんだ？ さっきからちよつと長いな」

「頭のうなじの辺りを蚊にやられたっばくて、何かすごく痒いんですよ」

殺の頭頂部に目が行く。別に変わった部分は見あたらない。だが、なぜかそれが引つ掛かるのだ。

間違い探して、後一カ所が見つからないような、足りない何かが見あたらない。

「まあいい、とりあえずここらで食料とねぐらを確保しようか。楽園に行けないなら、次はこの世界で生き残る事を考えよう」

「そうね、賛成」

「吸血鬼って言うくらいだから、夜に気を付けた方がいいんだろうか」

「俺と陣内さんで交代で、寝ずの番をした方がいいですかね」
「そうだな」

辺りは日が暮れ始め、血のように赤く染まっていく。

これから始まる罰ゲームの事を思い、仁は軽く唇を噛んだ。

第14章 死ねばいいのに

石を投げる者が居た。

鬼畜と蔑む者が居た。

馬鹿と嘲笑う者が居た。

そして、それら全てを受け容れざるを得なかった。

人を殺してまで三千万円を手に入れたはずなのに、なぜ自分はこので立ち尽くしているのだろう。

愚かにも程がある。くだらないにも限度がある。

手に持ったままの日本刀はべっとり人の血と脂に濡れ、西日を浴びてキラキラする。

「なんか残念やったねえ」

「あはは……そうだな……」

「まあ何て言うかさあ、結果は結果やし、厳肅に受け止めて前向きに生きたらええんちゃうかな？」

「同情か、余裕だなあんた」

「そらもう、うちは既に樂園の中の人やし」

「罰ゲームって何だよ、吸血鬼って」

「ああ、それうちも知らんねん、知ってたら教えたってんけどな」

「俺、どうしたらいいだろ」

「さあなあ」

けらけらと春乃は笑った。

がつくりと膝を突いている男、名前を迫田景人さこたけいとという。

埼玉県の方から、樂園の方角を目指してひたすら歩き続けてきた。だが、その旅はもう終わりを告げたのだ。

「大丈夫、神はあなたを見捨てませんよ」

修道女のような服装をした、一人の女性がその傍に寄り添う。

最初、彼女が何を喋っているのか、春乃は聞き取る事ができなかった。

金色の髪、そして透き通るような白い肌に青い瞳。およそ日本人には見えない。

「クリス、君はまだそんな馬鹿げた事を言っているのか」

「一人くらい、こんな馬鹿げた人がいても宜しいのではないでしょうか」

そつと膝を突くと、その胸に迫田の頭を抱き寄せた。

子供を慈しむように、ゆつくりと、優しく。

「ねえお姉さん、あんた日本人とちゃうよね？」

「両親はドイツ人です。私はこの国で生まれ、育ちました」

流暢な日本語は、声だけ聞いていればまるで日本人そのものだ。

そして、それ以上に驚いたのは、まるで平時のような落ち着いた態度、物腰だった。

さすがの春乃も、これには少しばかり好奇心が動く。

「ねえ、あなたこの人の恋人？ 奥さん？」

「天使様、私の名はクリスティ・カデルと申します。こちらの迫田景人さんと共に、旅をしていました」

「天使じゃないよー、見た目そんな感じじゃけど、うそっこやし」

「いいえ、きつと神はあなたを天使様にお選びになったのですよ」

「神なあ……」

あんなよく分からないもの選ばれたいとは、正直あまり思わない。

ただ、生き残るために仕方なく付き従っているだけ。

春乃にとつては、もはや神も仏も無い。

あるのは現実と、明日の糧を得る方法。

「なあ、今ここでメロドラマ演じてもさ、ぶつちやけあんた達地獄行きやで。どう思う？」

「どうもしません、神の意に従います」

「その神が一人しか救わへんてゆってるやん？ 何かキリスト教の敬虔な信者っぽいけれど、そんなん全く無視してるよ、あの女」

「神は私達に、試練をお与えになっておられるんですよ」

「試練とかちやうつて。この状況、マジやばいって思わん？」

「人類が愚か故に招いた結果です。それに対し、神は怒られたのです」

「はあ、あんたとことん頭ん中がお花畑なん？」

「そうかも知れませんか」

クリスは口元に指をあて、上品に笑う。

こんな末期的な社会の中で、その姿に言いよつた無き違和感を感じた。

それは信じ切つた者の持つ特有の自信。

否定も拒絶もはね除ける、その凶太すぎる程の精神。

善いことを行う、善くあれ、そう思っている宗教家や精神論者の、鼻が曲がりそうなお人好しの匂い。

社会が破綻する前、春乃の未来を憂えて訪ねてきた。

高校教師をしていた親戚の叔母のような、どこか狂気をはらんだ目の光。

虫酸が走る、反吐が出る。だが、それを否定することはできない。心の中によりどころを持たない人間は、脆く、弱く、そして醜いのだ。

どこかに、ある種の同族嫌悪がある。

春乃はそれに気付いていた。

気付いているからこそ、それを態度に出すことを踏みとどまる。

かつて持っていた優しさ、思いやり。

それを自分でえぐり取つて、春乃は今の楽園のチケットを手に入れた。

「この男、名前なんて言うん？」

「迫田景人だ。名前があるのにこの男なんて言うな」

「どつちでもええよ、それでこの迫田って言う奴、あんたのこと差し置いて楽園行こうとしたクズやで」

「三千万円ならもういただいています。そちらの迫田さんに」

「へ？」

意外な返事に、春乃は思わずきよとんとする。

「迫田さんは自分のことより、私に先にお金をくれました」

「それならさつさとこっち来たらええやん。何しとつたんよ？」

「迫田さんがくださったお金は、元は彼以外の誰かの物です。私には使えません」

「はあ」

「いい加減気付けよクリス！ もうそんな時代じゃないんだ！」

「私がお金を使えば、神の御心を裏切る事になります」

柔らかな物腰で、落ち着き払った態度で、淡々と言葉を紡ぐ。

この期に及んで偽善を垂れる。

どこまでおめでたい頭をしているんだ。

この生物は本当に、自分と同じ種族の女という生物学的な区分にあるものなのか。

今や法も秩序もない、この混沌とした世界で。

「あんだ、つくづくアホやね」

「そうですね、愚かなことだと私も思います」

くすくすと笑う。その笑顔に、思わず吐き気がこみ上げてきた。

「もうすぐ罰ゲームも始まるのに、クリスさんは不安ちゃう？」

「そうですね、しかしそれが神の思し召しなら、私は受け容れましょう」

「俺は死なん！ お前も死なせん！」

「口で言うのは簡単やけど、どうなるかわからんでえ」

「吸血鬼なんて俺が残らずぶっ殺してやる！」

シャツの裾で日本刀を拭いて、がむしやりに空を斬る。

触れようとする者、近づこうとする者、全てを容赦なく彼は斬り捨てるだろう。

仏に会えば仏を殺せ、祖に会えば祖を殺せ。

サバイバルの状況下に於いて、最も大切な事だ。

彼こそが正しい、そしてクリスは間違っている。

春乃は自分に言い聞かせる。

自分に罪は無いのだと。

「あんたは頭に血い上りすぎ。クリスさんのことマジで守ろうと思うなら、もっと冷静にならなあかん思うよ」

話題を変えて、自分の心の迷いを逸らす。

「お前みたいな、楽園側の住民に言われたくない」

「まあなあ。それはええけど、もうすぐ夜や。」

吸血鬼が本当に出るなら危ないんちゃう？」

「吸血鬼だろうと神だろうと、クリスに手を出す奴は殺す」

そう言っつて、殺意のこもった瞳を向ける。

さつき、老人をためらいなく斬り捨てたこの男の事だ、吸血鬼だろうと人間だろうと、恐れるものは無いだろう。

「うちも楽園に帰るけど、また生きてたら話そうや」

「俺はもう会いたくない」

「ほな、またねー」

春乃が手を振りながら、夕闇の中に消えていく。

クリスだけが、それをにこやかに手を振りながら見送った。

「気に入らんわあ偽善者が。罰ゲームで死ねばええのに」

楽園へと戻る道すがら、春乃はぼそりと呟いた。

第15章 夜が来る。長い夜が

痛い。

すごく痛い。

いつまで私はここで寝ているの？

寒くて、暗くて、そして痛い。

「くっっ」

「目が覚めた？ まだ動いちゃ駄目だよ」

「ここは……？」

ぼんやりとした意識の中、辺りを見回す。

古いテレビの電源が入ったように、周りの風景は徐々に輪郭を取り戻し始める。

夕暮れ時、瓦礫の匂い。

ぐっ。

どれほどの間何も食べていなかったのだろう。

気が付くと、腹の虫が鳴いている。

「僕が見えるかい？」

「ひっ！」

改めて、自分が今置かれている状況に気が付く。

ビルが崩壊し、その下敷きになりそうになった姉を助けて、それで

「僕の名前は谷村光樹たにむらみつぎ、大丈夫、君に危害を加えるつもりは無いよ」

ぼろぼろのシャツとジーパンに身を包んだ少年が、形をとどめないほど壊れたトラックの荷台に腰を下ろしていた。

逆光を受けるその姿は、どこか幻想的で、神様のようにだと彼女はぼんやり考える。

「君は名前は何て言うの？」

「えっと、私は木戸睦美きとむつみ」

「木戸さんだね、応急手当、って言えるかわからないけど、消毒だ

「けはしておいたよ」

「そう言つて、胸からへしゃげた薬の容器を取り出す。
有名メーカーの薬だ。」

「幼い頃に、怪我をすると母に塗つてもらつたことがあつた。」

「別に、助けてなんて頼んでないわ」

「思わず考えていた事と反対の返事を口にする。」

「本当はお礼を言おうと思つた。」

「けれど、いつそ死んでいれば良かったような現実が、目の前に横たわっている。」

「なぜ生きているのだろうか？」

「後悔が双肩に重くのし掛かる。」

「睦美は思わず頭をくしゃくしゃと掻いた。」

「とにかく落ち着かなければ。」

「幸い腰のポケットにはまだ煙草が余っている。」

「ライターも無事だつたらしく、風を遮りながら火を点けた。」

「あはは、やっぱり不良生徒さんだ」

「何よ、今さら未成年は煙草吸つちゃいけないってわけ？」

「髪の毛が赤かつたから、そうかなあと思つたけど予想通り」

「この言葉には、助けられた睦美も思わずカツとなる。」

「セーラー服着て、髪の毛が赤かつたらみんな不良なわけ？ 煙草

を吸う未成年は死ねばいい？」

「あははは、本当に不良生徒さんだ」

「何よあんた、さつきからいちいち腹が立つわね。私より年下のくせに」

「僕は二十歳だよ、ほら、自動車免許」

「そう言つて、ジーパンのポケットから皮のパスケースを取り出して投げた。」

「そこには、確かに二十歳を表す生年月日が書かれている。」

「げえっ、そんな顔してマジで二十歳？ ロリコンじゃないの！」

「ロリコンって言葉の使い方間違つてるよ」

免許証を戻すと、光樹は座っていたトラックの荷台から降りてきた。

よく見ると、その手には小さな缶ジュースが握られている。

「スモールサイズだけど、飲む？」

「親切ね、何が目的？」

「別に何もいらナイよ」

睦美は思わず眉をひそめる。この状況で誰を信じると言うのか。既に秩序が崩壊した社会で、他人ほど信用できないものは無い。君が寝てる間に、樂園のチケットも完売しちゃったしね」

「樂園？」

「うん、樂園というのはね」

光樹は事の仔細をゆっくりと、分かりやすく睦美に語る。突如空から、神の掲示があったこと。

現金で三千万円を持って来なければ地獄に墮ちること。

一人限定の救済は、残念ながら既に終了してしまったこと。そして、罰ゲームが始まること。

全てはにわか信じがたい。

だが、雲間から射す不自然な光、まるでオーロラのような金色のカーテン。

それはどこか神秘的で、言いようもない不安を煽る。

あそこに天使が居ると言われると、逆に何も無いと言われるよりも合点がいく気がした。

「あんだ、三千万円を探しに行かなかったの？」

「うん」

「何で？」

疑わしい視線を向ける睦美に、光樹は笑顔で答える。

「倒れてた君を、ここに放っておくわけにいかないよ」

「本音は？ 何か見返りが欲しかったんでしょ？」

「見返りなんていらナイよ、ただ」

「ただ？」

「話し相手が、欲しかったんだ」

「あきれた……」

本気だろうか、この男は。

始終にこにこと笑みを絶やさない、まるで無垢な少年のようだが、さつき見た免許証によれば自分より年上だという。

睦美にとつては、およそ彼の行動が理解できるものではない。

自分の事を看っていて、それで人生最大で最後とも言えるイベントを、ただ指をくわえるようにして見送ってしまったのだ。

「痛っ」

「まだ無理に動いちゃだめだよ」

「あんたに指図される覚えはないから！」

そう言いながら、痛む部分をさする。

どうやら右肩と左足をやられたらしい。

動かそうとすると、鈍い痛みが走る。

倒れてきたビルの下敷きになった時、死を覚悟した。

いや、もういつその事、これで死ねれば楽だとさえ考えた。

姉はうっかり者でドジで、不器用で、しかし頭が良く、常に親の期待を一身に受けて育ってきた。

対する自分は、まるで欠陥品扱い。

だからこそ、親に抗い、社会に背を向け、不良と呼ばれるような人生を歩んできた。

しかし、姉はそんな自分に気を遣い、心から私を心配してくれた。自分の方がよほど心配されなければならないのに、妹の心配ばかりをして

元気だろうか。

野暮な質問、答えなど分かるはずもない。

でも、生きていて欲しい。私の方がよっぽど、死ぬべき人間だったのだから。

「ねえ」

「なにかな？」

「やっぱりあんた、救いようがない馬鹿野郎よね」

「あはは、そうかも」

苦笑すると、光樹の手から缶ジュースを受け取る。

黙って栓を開け、一気に飲み干す。

ぬるい炭酸飲料の甘みが、五臓六腑に染み渡っていった。

「礼は言っておくわ。ありがとう」

「うんうん、女の子はそうやって素直な方がかわいいよ」

「かわいい？ 何それ、口説いてんの？ 馬鹿？」

「馬鹿かも知れないなあ」

こんなガキ臭い男にかわいいと言われたことに、喜びと戸惑いが入り交じる。

小学生の時以来だろうか。

周囲の男共は、基本的に自分の体しか見ていなかった。

綺麗だとかエロいだとか、もはや褒め言葉にもなっていない事も含めてよく言われるが、かわいいなんてのは久しぶり過ぎて、逆に照れくさい。

「ところでさ、あんたこれからどうすんのさ」

「どっつて？」

「神にも見捨てられて、罰ゲームが始まるってのにさ、呑気にうかうかしてられるわけ？」

「そうだなあ」

今気が付いたと言わんばかりに、顎を指で触りながら俯く。

姉が男に生まれていたら、こんな風だったかも知れない。

後先を考えず、行き当たりばったりで行動する。

困っても何とかかなると思っていて、実際それで何とかなってしまう。

だが、今回ばかりは勝手が違う。助けしてくれるような人間は、周囲にはいないのだ。

「木戸さんはどうしたらいいと思う？」

「何で私に聞くんだよ！」

「三人寄れば文殊の知恵って言うし」

「二人しか居ないけど」

「あ、そっか」

さもひらめいたように手をたたく。

自分はずくづく、こういう天然ボケのキャラに縁があるらしい。

「とりあえず吸血鬼対策。これはすぐにでもしないといけないよね」

「いや、あんた一人ですればいいじゃん」

「一緒にやろうよ」

「何で？ あんたと行動を共にするなんて一言も言っていないけど」

「怪我してるのに、一人じゃ無理だよ」

「放っておいて」

「駄目だよ」

「うっさいわね！」

「じゃあ、協力してくれなくても僕は勝手に君を守る。

それならいいだろう？

君はまだほとんど動けないんだから、このままじゃ危ないよ」

「ふん、私は自分の事しか考えないからね。あと、変なことしよう

としたら殺すわよ」

「それでいいよ」

光樹はそう言いながら、近くにあった鉄パイプと、どこかから拝借してきたらしい麻紐を使って十字架を作り始める。

何となく予想はしていたが、本気でそんなもので吸血鬼とやらが防げると思っっているのだろうか。

あんな映画か小説の中の作り話に。

睦美は軽い頭痛を憶えた。

「あんたねえ、十字架作るくらいなら、それそのまま殴る方が早くない？」

「鉄パイプなんてそこら中にあるよ。これはこれで、備えておけばいい」

「まあ、あるにはあるけどね……」

「懐中電灯、木戸さんも一個持っておいて」

「これはあつた方がいいわね」

「にんにくは生ものだから手に入らないし、聖水なんてのも手に入りそうにもない。」

白木の杭も無いから、実質的には朝まで落ち着ける時間は無いかも」

「吸血鬼、ねえ」

神というのがどういうものかはわからない。

そもそも彼が自分に嘘を吐いていないという保証さえ無い。

そんな中で、こんな狂ったような事を本気で始める。

何を信じ、どうすればいいだろう。

万が一の為に、武器だけは確保しておくべきか。

「その鉄パイプとつてよ」

「はい、ついでに十字架もあげるよ」

「いらない。鉄パイプだけでいいわ」

「持っておきなよ、ひよつとするかも知れないだし」

無邪気な笑みを浮かべて、睦美の傍に片手で持てる程度の十字架を置く。

気休めにもなりやしない。

だが、それを無碍に断るのも気が引けた。

「よし、後は少し日が暮れ終わるまでに休んでおこうかな」

光樹は、睦美から少し離れた場所に腰を下ろす。

怪しい行動は無い。

ただ、彼は座ってすぐに腕を掻き始めた。

ぼりぼり。

ぼりぼりぼりぼり。

「あら、蚊に刺された？」

「季節はずれだっていうのに、まだ居るんだね」

「秋って言っても日中は少し暑いくらいだから」
ぼりぼり。

「かゆみ止めなんて持ってないよね」

「あるわけないでしょ」

ぼりぼり。

ぼりぼりぼりぼり。

爪の音がなぜか、いつもより大きく聞こえるような気がした。

第16章 罰ゲームの名は『爪の音』

「ああ、素晴らしい！ 温かい食事ですよ春乃さん！」

「たかが数週間の間やったけど、まるで何年ぶりかみたいな感動やねえ」

楽園の中、そこはまるで、絵に描いたような区画が整理された土地となっている。

一日の仕事を終えた春乃は、敬一郎に案内されて、共同の食事ホールへ着いたところだった。

「温かな湯気を立てる白いご飯、そしておみそ汁。さらに塩鯖とお新香まで！」

「ああ、うち生きてて良かった、楽園来て良かった、ほんま良かったわ！」

お預けを食らっていた犬のように、用意された食事にむしゃぶりとつく。

いつの間にか用意されていた食事部屋には、テーブルと、誰が配膳したかわからない塩鯖の定食が供されていた。

もちろん、全員の分がきちんと余る事無く用意されている。

神の力なのだろう、あまり疑問も持たずに箸を付ける。

そんなことよりも、今欲望を満たしてくれる事が大事だった。

もう死んでもいい、温かな食事を噛みしめると、感動のあまり涙が出てきた。

「温かな食事というのは実に素晴らしいです。

偉大なる我らの神のお力に感謝せねばなりませんね」

「そうやねえ、うん、ほんまそう思う。神最高！」

たつぷりとよそわれたご飯を全て平らげると、初めて人心地着いた気がする。

ぼんやりとした頭で、椅子に身を預けていると聞き慣れた声から響く。

「あーあー、楽園日本支部の皆さん、お食事お楽しみいただいているでしょうかー。」

神様です。

元気してる？

今日は私が好きな焼いた塩鯖の定食にしてみました。

年寄り臭い趣味だと思ったり、鯖嫌いだった人いるかなあ？

ごめんねー、でも温かいご飯食べられたんだから、贅言言わないでよねー。

残しても怒らないからさー。

ところで今から、大事なお知らせがありまーす。

注目して下さいねー、はーい、ちゅうもーく。

なお、ここから先は外の世界とライブ中継で繋がっちゃいます。

みんな心の準備はOK？

それじゃ、いっくよお！

1、2、3、スタート

ドドドーンズババーン

パラパツパバーン

レディースアーンドジェントルメン、イツツシヨウタイム！

全世界約二億とんで三〇〇万人の生き残った人類の皆様、大変お待たせ致しました！

それでは今から罰ゲームの正解を実況生中継で行っちゃいます。

このまま教えられないで今日が終わると思いきや、意外と素早い発表だとびっくりした 人も多いと思うのね。

だって、秘密にしてたらあんな達、三日くらいで人類滅亡しちゃうそうだから

あははは

そんなつまんねえくたばり方しやがるんじゃないやねえよクス共！

たっぷり苦しんで、誰にも救いを求める事ができないままに死に腐れって感じ？

さて、気になる罰ゲームのタイトルは、ずばりシンプル『爪の音』です。

これは何かっていうと、みんなが大嫌いな蚊にスポットライトを当ててみましたー。

ノミとかシラミとかダニとかも仲間に入れようか考えたんだけど、いまいちかなーと思ったので、ボツなのだ。

そもそもノミって少ないし、シラミってどこにいるかよく知らないし、ダニだとそこら中にいそうだし、それだとすぐに楽園の外の人類滅亡しちゃって面白くないからね！

そこで蚊だけ限定で、5%に保菌種を作りました。

冬も夏も関係なく、彼らは生まれて増殖しまーす。

私特製の、新種ウイルスを持った危ない種類のものでーす。

で、こいつらに血を吸われると、こわーい病気に感染しちゃうんだな、これが。

病気がどんな風に発症し、どんな風に進行するかは追々分かるから安心してね！

もーね、未だかつて無い地獄が訪れるよ。

すっごい地獄、溢れんばかりの地獄。

前代未聞の驚天動地、映画や物語の中にさえ存在しなかった本格派で最高の地獄が！

見たくない？

私はすっごく見たい。

あはははは！

っーか、見る。

目ん玉かつ開いてまぶたの裏に焼き付けるバーカ！

これはあんだ達、愚かすぎる人類が最後に背負う償いの十字架なんだよ。

頑張れば生き残れるなんて、甘っちょろい考え持つちゃダメだぞ死ぬの。

一人残らずくたばって。

苦しんで、苦しみ抜いて、あり得ない程の苦痛に耐えかねて悶え苦しむの。

それがあんた達が行ってきた事への償い。

好き放題やらかしてきた代償は大きい、その重さを感じなさいな！

全てを言い終わると、放送は止まった。

食堂の中で、誰もがしばし発する言葉を失う。

だが、数秒の後、春乃は敬一郎に語りかけた。

「なあ、鈴木さん」

「何でしょう」

「今も神、信じてはる？」

「ええ、もちろんですとも」

意外な返答だった。

人並みはずれた悪魔のような神。

到底、楽園の中の住民を愛しているとも思えない、その不遜な態度。

疑問を抱くことは当然のはずだった。

しかし、敬一郎の顔には別段焦る様子も無い。

春乃は言いようも無い苛立ちを感じた。

「あんなアレでナニな神やのに？」

「ハルマゲドン、ラグナロク、世界中には終末思想がいくつもあります。これはその一つの形。神の思し召しは絶対であり神聖、我々のような人間など及ぶものなど無いのですよ」

「そっかあ、せやね、あはははは」

「はははは」

こいつとはなるべく疎遠になろう。

春乃は心の中でそっと呟いた。

第17章 ハツコイエンペラーの乱心

ぼりぼりぼりぼり。

毅はつむじの辺りを執拗に掻きむしっている。

我慢出来ないほどの痒さではないが、たまに掻かないとむず痒くて仕方がない。

ぼりぼりぼりぼり。

ぼりぼりぼりぼりぼりぼりぼりぼり。

「ねえ、三木原さん」

「ああ」

ぼりぼりぼりぼり。

「すごく、言いくい事なんだけど」

「何ですか」

「それ、蚊にかまれたのよね？」

毅の手が止まる。

恐れていた一言を、ついに聞いてしまった。

「ただの蚊であって、病気とか関係無いですからね？」

「本当に？」

「当然ですよ！」

毅以外の三人は、神の啓示のあと、明らかに距離を取っている。

その病気が感染するかどうか、神は告げなかった。

ならば、感染する可能性は否定できない。

もし空気感染、血液感染、皮膚感染ならば？

「ちょっと待てよ、俺の事を汚らしいものみたいに扱うのか?!」

「悪いが三木原さん、あんたは近づかないでくれ」

「陣内さん?!」

「あんたに恨みは無いし、嫌いなわけでもない。」

ただ、現状リスクがある以上、俺達が無闇に近づこうものなら殺す」

「ちょっと待ってくださいよ。じゃあ何ですか、俺一人でこのままどこかに行けって言うんですか？俺が何をしたって言うんですか？」

「すまない……」

「すまないって何です？今さら冗談じゃない！

ただでさえこれから始まる罰ゲームなのに。

皆で協力して乗り切らなきゃいけないでしょう？」

「あんた、既に感染者かも知れないだろう」

「感染したって証拠は？たかが5%程度の蚊ですよ？

証拠も無いのに、あなた達は決めて掛かるんですか？」

「感染してない証拠も無いな」

「ひどい！あんまりだ！人権侵害だ！俺はほら、正常なんだ

ぞ？」

「うるさい」

グロツクの銃口が火を噴いた。

それは毅の足下に着弾すると、砂埃を上げて宙に消える。

今必要なのは沈黙だ。

多少荒療治だとは思ったが、これが一番有効だっただろう。

「とにかくちよつと落ち着け、ハツコイエンペラー」

「知ってたんですか?!」

「すまん、気付かない振りをしてた」

言った後で、しまったと後悔するがもう遅かった。

毅の顔からみるみる血の気が引いていく。

ただでさえ分裂した状況で、これは最悪だ。

「わかったらこっちに来ないで。ハツコイエンペラー」

「その名で呼ぶなああああああ！」

「だってハツコイエンペラーじゃない」

「君島さん、ハツコイエンペラーをいじめないで」

「藤次君、僕の名前は三木原毅ですから……」

「そうよハツコイエンペラー」

「だからその名で呼ぶなああああああ！」

「落ちてえっ！」

辺りの空気が痺れるような大音声。

禅寺の僧が入れる喝のように、仁の叫び声で周囲は静けさを取り戻した。

一方、毅はなぜ自分が怒られるのか分からないまま、頭の中で状況を整理しようとする。

とりあえず自分は悪くないはずだ。

何度も言い聞かせるように、違う方向を見たまま頷く。

「ハツコイエンペラーはいつもサイレントでクールな奴だ。

アイスマンという二つ名を持っていたことを忘れたのか」

「ああ、確かに俺はそうとも呼ばれていましたね」

(よし、掛かった)

「それが何だ、状況が変われば人も変わるのか？ お前はその程度のつまらない男か？

いつもお前が使ってるキャラ、元ソ連KGBの局長だったミハイル・チャレンコフそのままに、お前の戦いぶりには無駄が無かった。そして、ミハイルならきつと今のお前を見て言っだろう」

一呼吸の間を置いて、仁は続ける。

「北極で戦ったシロクマの方が手強いぜ。ってな」

「北極のシロクマ……」

常識的に考えて、シロクマの方が強いには違いない。

だが、ゲームキャラクターの心情にシンクロした時、彼の中ではそれが最高の鎮静剤の言葉となっていた。

落ち着け毅、お前はそんなつまらない男じゃないはずだ。

シロクマごときに劣ってどうする。

ここぞという時に、慌てふためいてどうする。

「取り乱してしまつてすまない。ロンドンキャット」

「落ち着いたようだな」

「ああ、もう大丈夫だ」

「でもさあ、どうでもいいかも知れないけど、ハツコイエンペラーっていう名前、センスのかけらも無いわよね」

一瞬にして空気と時間は凍り付き、一呼吸の後に動き出す。

「うおおおおおお?!」

「てめえ、君島あツ、この馬鹿オンナあつ!」

「馬鹿女だあ?!」

「みんな落ち着いてよ」

事態が収拾するまで、その後十五分の下らないやりとりが続いた。どこか抜けたような空気は、緊張感を和らげる。

それはあくまでも気休めに過ぎない。

仁は頭の中で冷静に、皆に気付かれずどうやって殺を始末するべきかを思索していた。

第18章 偽善であれ、光りあれ

「クリス、蚊帳を見つけたぞ！」

「かや？ それはなんですか？」

「蚊が入るのを防ぐ網のようなものだ。」

ホームセンターの残骸らしかったから、調べたのがラッキーだった」

「よくわかりませんが、迫田さんが幸せであれば私は幸せです」

「ふん、お前はもう少し人の事より自分の事を考える。」

「こんな時代じゃ、俺だっけいつお前を裏切るかわからないぞ」

「迫田さんになれば、殺されてもかまいません」

「冗談を本気にするな！」

「うふふ、おいたが過ぎましたか」

見渡す限り、地平線の果てまで続く瓦礫の荒野。

楽園入場券の争奪戦が終わった今、人が多い場所は危険だと思い、景人はクリスを連れて来た道に戻っていた。

吸血鬼と聞いていたせいで、つきり映画で観たようなヴァンパイアが襲いかかってくるのだと思っていた。

ところが、実際の敵は蚊だという。

最初、そのアナウンスにほっと胸を撫で下ろした。

だが、すぐに事の重大さに気が付き、景人は愕然として膝を突いた。

もしどこかで眠っていたとしたら、知らぬ間に何らかの病に感染している可能性がある。

人間や獣と違い、彼らは羽音以外はほぼ姿を捉える事も難しい。

本物の吸血鬼の方が、よほどありがたかったかも知れない。

人類は常に、ほぼ見えない敵と戦わねばならなくなったのだ。

心休まる場所などどこにも無い。

「かつて、ペストはヨーロッパで猛威をふるったんだってな。」

ペストの媒介は鼠に付いていた蚤だったらしい」

「そうなんですか。よくご存知ですね」

「常識だろう。世界史で習ったはずだ」

「もう覚えてませんわ」

落ち着き払った上品な笑顔。

景人はそれを失いたくは無かった。

鉄パイプを四方に立て、そこに蚊帳を吊る。

完全な防御と言うには厳しすぎるが、無いよりは遙かにましだ。

少なくとも、蚊には絶対的な防御力を発揮するだろう。

「問題は外出時だな」

食料の調達、水の調達には必ず蚊帳の外に出ねばならない。

その際は、虫除けスプレーをするか、厚着をする他はない。

顔を出すことさえ憚られる。

「どうしましたか？」

「何でもない」

怒りにはエネルギーが要る。

矛盾した世界、非力な自分、愚かな戦争を起こした人類。

しかし、神は手を差し伸べるどころか、自分の命を絶望と奈落の

底に叩き付けたのだ。

滅びてしまえばいい。

何もかもくだらない。

全部滅びてしまえばいい。

滅び去れ！

などと、永久に怒るわけにも行かないのだ。

今自分には守るべき恋人が居る。

食べ、飲み、睡眠を取らねばならない。

楽園という希望を閉じられ、混沌を包み込んだ夜が近付いてくる。

「クリス……俺は……」

「何ですか？」

「弱くて、済まない」

「なぜ謝るのでしょうか。」

私は迫田さんに感謝こそしても、恨んだ事など一度もありません」

「愛した女一人守れずして、まるで人形じゃないか」

「精一杯守って下さって、私はとても嬉しく思います」

「世辞だろうか？ 空元気だろうか？ 絶望的なこんな世界で、俺なんかを選んで後悔してるんだろう？ そうだろうか？ なあ、そうなんだろう？」

「ふふふ、そんなつまらないことで悩んでいらっしやっただんですか？ つまらない？ そんなことは」

そこまで言った時、ふわりとその唇が塞がれた。

それは時を止める魔法。

ほんの一瞬で、全ての言葉は奪われる。

「愛しています。あなたのことを」

「クリス……」

「地獄に堕ちても、後悔などしません」

まっすぐな瞳に、思わず膝を突いてしまった。

聖母が居る。

ああ、俺の愛しいこの人は聖母だ。

彼女を救うためならば、どんな悪鬼羅刹にでもなろう。

ぼんやりとする景人の頭を、そっと胸元に抱き寄せ、クリスは頭を撫でた。

甘い匂いが鼻をくすぐる。

「私が先に神の国に行けば、門の前であなたをお待ちしています」

「馬鹿っ！ 死ぬことなんてもう言うな。」

口が裂けても言うんじゃないっ！」

「ふふふ、では私を守って下さい、景人さん」

「当然だ！」

消えかけていた希望の炎は、いともたやすく燃え盛る。

守るべき人がいる。

その間、自分は死ぬわけにいかない。

防御の仕方さえ把握すれば、病気に掛かる事は無いだろう。とにかく蚊帳をつり下げ、床には拾ってきたガムテープで補強する。

隙間を無くす事で、蚊が一匹も入れなければいい。内部はさつき見つけておいた殺虫剤を撒く。

これでは完璧なはず。

この中に居れば、当面の間は問題ない。

「素敵なお城になりましたね」

「そのうち、ちゃんとしたベッドで抱いてやるよ」

蚊帳の中で、華奢なクリスの体を抱き寄せ、半ば強引に唇を奪つ。ちよつとした仕返した。

抗わず、ゆっくりと愛撫されるがまま、舌がクリスの歯と歯の間に差し込まれてゆく。

ぴちやりぴちやりと、淫靡な水音だけが聞こえる。

むさぼるようにして舌を絡ませ、控えめに彼女はそれに応える。胸に手を滑り込ませようとした、その時だった。

「その人、助けてくださいっ！」

「うおつとつ、なっ、何だいきなり?!」

突然後ろから大きな声で呼び掛けられた。

まさに今、事に及ぼうとしていた時だけに、その焦りは計り知れない。

だが、必要以上に取り乱す事も出来ず、急いで呼吸を整える。

声がした方を見ると、片方の足を引きずるようにして、こちらに近付いてくる女の姿があった。

怪我をしているのだろうか、鉄パイプを杖にして、実に辛そうな様子だ。

「お願いです。谷村さんを助けてあげて！」

「お願いっ、ひぐっ、お願いします」

「藪から棒に何だ。あんた誰だ?」

「私は木戸睦美って言います。」

あっちの方で谷村さんが倒れてるんです。

何かおかしくって、あの、罰ゲームの病気みたいで

「罰ゲームの病気？」

その言葉を聞いた瞬間、ぎょろりと景人の目が動く。

今ここにやってきた、睦美の全身を舐めるように見回す。

もし切り傷などでもあろうものなら、そこから血液感染している可能性もある。

そうであれば、この娘も、すぐに斬り捨てねばならない。

「悪いが俺は医者じゃない。他を当たってくれないか」

「そんな……」

女はその場にへたり込む。

もう打つ手が無いのだろう。

この辺りには人が無く、それ故この場所を選んだのだ。

下手に他人と関わり合うような真似は、自殺行為だ。

相手が女子供だろうと、それは変わらない。

利用するかされるか。食うか食われるか。

憐憫や同情は自分やクリスの死を招く。

それは絶対にあってはならない。

「私に何ができるかわかりませんが、お手伝いしましょうか？」

「クリス?!」

「まだ若い女の子じゃありませんか。」

その願いを無碍に断るなんて」

「君は甘いんだよ！ いい加減にしてくれ！」

俺がどれほど心配してると思ってる？」

「では、この子と共に私をここで斬り殺して下さい」

「くっ」

「あなたはおっしやいましたよね、一人殺すのも百人殺すのも同じだと」

「クリス、私を困らせないでくれ」

「私の命は殺された一人の命、百人の命に等しいのです」

「等しくなんか無い、命には価値の差がある」

「では私の命は安いものでしょうね」

「クリス！」

「お名前は何というの？」

私はクリステイ・カデル。

あちらの男性は迫田景人さん。

それで、谷村さんとおっしやる方はどちらに？」

「私は木戸睦美です。」

紹介はいいから、彼はこっち、来て！」

クリスの手を引いて、走り出そうとした瞬間、睦美は自分が怪我をしていることに気が付く。

だが、既に地面に勢い良く足を突いていた。

「うあああつ」

「大丈夫?!」

「私はいいから、それより谷村さんのこと」

ぼろぼろと涙をこぼしながら、睦美はさすがのように言葉を搾り出す。

それに答えるなど、偽善そのものの姿。

既にここに居る者達は、全て地獄行きが確定している。

ああ、それなのになぜ助け合おう？

「あなた、足から血が出てるわ」

「うるさい！ これくらいどうってことないから！ それより谷村

……痛っ」

見てもらえない。

しばった傷口に血を滲ませて、痛みを耐えている。

それも、自分ではない誰かのために。まるでどこかの大馬鹿野郎にそっくりだ。

そいつはどうしようもない寂しがり屋で、意地っ張りの

「おい女、その谷村って奴に何をどうすりゃいいんだよ」

「女じゃない、私には木戸睦美って名前がある！」

「うるせえ！ その谷村に何すりゃいいんだって聞いてんだよ！」

「助けて……くれるの？」

「ああ、だから早く場所を案内しろ」

「はっ、はいっ！」

睦美は半分ベそをかきながら、クリスと景人に光樹の居る場所を伝える。

ここから、わずか数十メートル向こうの方にある、倒壊したビルの裏側に居るらしい。

それを聞いて、まだ自分の気配を感じる力の低さに、景人は少々落胆した。

「ありがとう……二人ともありがとう……」

「感染だけは勘弁して欲しいがな」

「大丈夫、薬を探すのを手伝って欲しいだけだから」

「薬？」

「かゆみ止めだよ」

思わず耳を疑う。

だが、睦美の表情は真剣そのものだった。

第19章 キミダケガボクノトモダチ

「ふうっ……ふうっ……ぐっ」

うめき声を上げながら、毅は瓦礫を投げ捨てるようにして目的の物を探している。

少し離れた場所で、テントのようなものを設営し、そこで仁、夏美、藤次は休んでいる。

蚊と蚤の対策と言っても、虫除けスプレーを体に掛けて、殺虫剤のスプレー缶を傍に置く以外には有効な手だてが取り得ない。

身を隠す場所など、この世界のどこにも無いのだ。

人類はただひたすら、見えない魔の手に怯えながら、昼夜を問わず脅かされる。

眠る時、誰かに自分を見張っていてもらわねば、気が付けば小さな悪魔の攻撃を受けているかも知れない。

「ああ、不安で不安で仕方ない。不安で不安で仕方ない」
ぼりぼりぼりぼり。

三木原毅はまさに、今自分がその悲劇の供物になろうとしている事を、頭の中では否定しつつも感じていた。

外に行くと言ってテントを出ると、思いつきり頭頂部を掻きむしる。

テントの中でやるものなら、一瞬にして疑いの目を向けられるかも知れない。

そうすれば、仁はすぐさま自分に銃口を向けるだろう。
ぼりぼりぼりぼり。

早くかゆみ止めを見つけねば。

おかしい、あまりにもおかしい。

掻けば掻くほど、痒みの範囲が広がっていく。

痒みが強いほど、掻くたびに訪れる快楽が強まっていく。

気が付くと頭に手に行く。

そして爪を立ててしまっ
ぼりぼり。

ぼりぼりぼりぼり。

爪の音が青い夜に響き渡る。

ぼりぼりぼりぼり。

痒くて痒くて気持ちいい。

「危険だ、このままじゃ」

そろそろ仁がテントを出てくるのではないだろうか。

そうすれば、自分が感染していると思われるだろう。

とは言えたった五%だぞ？

たかが二十匹に一匹だ。

たまたま頭がすぐく痒いのが、ちょっと強いただけかも知れない。

そうだよ、偶然だ。だからかゆみ止めを早く見つけて、あそこに

戻ろう。

もし感染を疑われたりしたら

「ああ畜生、早く出てくれよ、もう時間が無い」

この辺りにはドラッグストアがあったらしい。

虫除けスプレーも、殺虫剤もここで手に入れた。

蚊取り線香もあったし、栄養ドリンクも目薬もあった。

なのにかゆみ止めが見つからない。

戦争が終結したのは夏の終わり頃。

まだまだかゆみ止めはあっていい。

あるはずだ。

殺の手は瓦礫をかき分け、気が付けば手首は切り傷から出た血で

濡れている。

だからだと粘着質の汗が頬を伝い、コンクリートに小さなシミが

いくつも浮かぶ。

この壁をどけたら出てくるかも。

このガラスの破片の中にあるかも？

やがて無情に顔を見せる、土とアスファルトの地面。

「クソッ、何で出てこないんだ?!」

無性に腹が立って、傍にあつた瓦礫の山に蹴りを入れる。
だが、足の方が弱い。

すぐに痛みが全身を突き抜け、はたとその場に座り込んだ。

「痒いよ……やばいんだよ……何だよおい、俺が何したって言うんだよ……」

ぼりぼりぼりぼり。

ばりばりばりばりっ!

「ふう」

搔きむしり過ぎたせいか、頭頂部はひりひりと痛むようになっていた。

手にはごっそりと、血に混じって毛が貼り付いている。

絶望が、ゆっくりと心の中に忍び込む。

冷たいその手は、後ろから頬に触れ、顔全体を包み込む。

恐怖は既に、心の全てを支配していた。

「うわああああああああ!」

思わずのけぞり、転げ回った。

と、その時手に掴んだもの。それは夏場によく見かける、かゆみ止めの薬瓶だ。

「よおおおおおし!」

急いで瓶の蓋を開け、頭頂部にすり込む。

「うああ、しっ、しみる!」

もはやぼろぼろになった皮膚に、薬は拷問のように染みこむ。

だが、同時にそれは全身を駆け抜けるエクスタシーへと変化する。
息が止まりそうな程、それは何とも言えない、甘い恍惚感をもたらした。

「はあ……はあ……ああ……何てこった」

その場に座り込み、膝を抱える。

どうすればいいのか、もはや自分でもわからない。

こんなおかしな体で、この先をごまかし、生きていけるだろうか。

感染しているのかも知れない。

いや、間違いなく感染しているのだろう。

毅の心は動揺する。

だが、落ち着こうとしても、落ち着ける理由が見あたらぬ。

彼は半ばパニック状態になっていた。

神に見放され、地獄へと墮とされる。

このままではどうすることもできない。

「ああ、そうだ、確か……」

カッターナイフ。

それはポケットの中でふくらみを作り、自分はここにいるよと訴えかけている。

使って欲しいよ毅さん。

ああ、カッターナイフの音が聞こえる。

「君は俺を助けてくれるかい？」

うん、だって毅さんが苦しそうだから！

「そうなんだ、俺は今とても苦しいんだよ。」

苦しくて仕方ないんだ」

僕を使って毅さん！

「ありがとう。それじゃまずは取り出すよ」

チキチキチキチキ

「可愛い音だね」

やだよ、照れるなあ毅さん。

「そんなことないさ、君の刃は綺麗だよ」

じゃあ、僕を頭の上にかざしてね！

「ああ、こうかい？」

そのまま突き立てて！

ザシユツ

「うあああああああ！」

痛い？

大丈夫毅さん？

「痛いよ！ ああああ痛いよおおお！ 畜生畜生！ 次はどうするんだ？」

痒い部分を中心にして、周囲を円で囲い込むように僕を回して！
きりきりきりきり

「ぐうあああああああ？！」

ダメだよ。声が大きすぎると誰かに気が付かれちゃうよ？

「そ、それもそうだ………」

ゆっくり、慎重にね！

「ぐっ、くっ、ふうふうあああ………んんんん………」

うん、いいよ。

焦らないで。

ほおら、終わったよ毅さん！

「ぐうっ、そっ、それでどうすればいい？」

頭の皮を剥がすんだ！

「なにい？」

このままにしておく、また痒みが襲って来ちゃうよ！

「そうかも知れないが………」

ほら、目の前にちよつと汚いけど帽子があるよ、これでごまかし
ちやえ！

「そうだな、帽子か、ああ帽子だ」

それは泥にまみれ、部分的に破れてぼろぼろになっているベレー
帽だった。

だが、今はこれをかぶらなければいけない。

そして、その前にやるべきことがある。

「ふううあああっ、づあっ！」

脳の中身をかき混ぜられるような、信じられない痛みだ。

だが、このままでは死ぬと思うと、手は止まることはない。

「はあっ、はあっ」

途中から一気に力を入れ、強引にそれを剥がした。

頭は割れるような痛みが伴っている。

剥がした頭皮を投げ捨て、目深に帽子を被ってみる。

「こ、これでいいの？」

うん、ばっちりだよ！

「ありがとう……助かったよ……」

嬉しそうな声。

カッターナイフが笑う。

なぜ声が聞こえてくるのか、疑問も浮かばない。

物が喋ろうと喋らまいと、もはやそんなことは些細な問題だ。

大切なのは今。

そして生き残るために、それはきつと必要な出来事なのだ。

夜が更け、気が付くと月だけが、殺の事をじっと見ている。

徐々に眠気が襲ってくる。

おやすみなさい、良い夢を。

薄れゆく意識の中、カッターナイフの音が聞こえた。

第20章 あなたは神を信じますか？

『あなたは神を信じますか？』

突如言われて、答えられる人は何人居ることだろう。

普通、答えられようはずもない。

居るかも知れないし居ないかも知れない。

そもそもこれが普通だ。

常に用意していた、当たり障りの無い答え。

居ると明確に言える奴は頭がおかしい。

しかし、居ないと一概に否定などできないのだ。

日本人にとつての神など、そういうものだ。

ところがどっこい、イスラムやキリストの神を信仰する人々は、その答えの為に、時にその命を捨てる事さえためらわないという。

居るかどうかわからないものに、彼らは命を賭けられるのだ。

素晴らしい。

神は素晴らしい。

でも、居ない物はしょーがないよねえ。

じゃあさあ、私の前にまず現れてよ。

奇跡でも起こして、手本を見せてよ。

できないのに信じるなあ？

あはははっ、あーっははははははははっ！

ありえないって、マジありえない！

ぶっちやけありえない！

救ってよ。

助けてよ。

世界なんてどうでもいいから、この私だけを助けて。

もし助けてくれたら何してもいいよ。

私にできることならなんだってする。

『カミサマタスケテカミサマタスケテカミサマタスケテカミサマタ

スケテ』

ノートに何度書いただろう。

神様、見てるでしょ？

現れてよ。

奇跡、一つ頼むよ。

一万回書けば現れてくれる？

足りない？

百万回書けば？

足りない？

じゃあ一兆回？

書けるかなあ。

でも、もし現れたらどうしよう？

チキチキチキチキ

カッターナイフしか武器が無いなあ。

チキチキチキチキ

こんなものでも、頸動脈に今ぶっ刺せば死ぬんだよねえ。

チキチキチキチキ

例えば英語教師の熊沢とかさあ。

チキチキチキチキ

私をいじめる桂と但野と大宮とかさあ。

チキチキチキチキ

私も死ぬよね、こんなちんけなカッターナイフで。

チキチキチキチキ

廊下に刺したら学校、死ぬかなあ。

チキチキチキチキ

地球に刺したら、人類滅亡？

チキチキチキチキ

どうでもいいよ神様、死んじゃえ。

チキチキチキチキ

カッターナイフ、カッターナイフ、鳴くよ歌うよカッターナイフ。

チキチキチキチキ
あかいあかい、あめがふる。

第21章 進化する地獄、深化する絶望

「痒いって、こんなに苦しい物なんだね」

薬を塗りながら、光樹は諦め半分に呟く。

確率わずか5%だったのが、どうやら大当たりをしてしまったのだらう。

異常な痒みは、もはや疑いようも無い。

左腕の肘から上の部分、ほぼ全部が痒いなど、尋常な事ではない。早くも自分は人類脱落だらう。

意外と人生の幕切れはあっけない。

「ねえ木戸さん。クリスさんと迫田さんと一緒にどこかに行ってもいいんだよ？」

「うがぁーっ！ うっさい病人、寝ろ！」

「そんなに目くじら立てなくても……」

「喋る元気があるなら寝てな！」

「眠くないよ、別に」

「ブン殴られて眠りたい？」

絞め堕とされて眠りたい？

それとも永遠に眠りたい？」

「どれも遠慮するよ」

苦笑しながら光樹は頭を掻いた。

徐々に痒みの範囲は広がってきている。

だが、かゆみ止めの薬をケースで発見したおかげで、しばらくは大丈夫となった。

それに関しては、特に迫田景人の活躍がある。

一番無愛想で、自分を邪魔者扱いする景人だったが、光樹にとっては命の恩人だ。

何とか仲良くできないだらうかと、蚊帳の中で寝ころびながら思案する。

どちらにしろ、自分は本当に長くない。

既に感染は確定しており、かゆみ止めが常時必要な程、その感覚は時間を追って強くなっている。

その面積も、時と共に徐々に広がりを見せている。
自殺すればいいだろうか。

しかし、そうすれば残された睦美が悲しむかも知れない。

いや、そもそも彼女は自分のことを悲しんでなどくれるだろうか。

「僕はまた、思い上がった勘違いをしているのかな」

寝返りを打って、目をつぶったままぼんやりと考える。

思い返せば、小学校に上がってから高校を卒業するまで、ずっといじめに遭っていた。

大学に入って、友達は居ないけれども平和な日々が始まる。

自動車の免許なんて取ってみたり、コンビニエンスストアで深夜のアルバイトをするようになった。

経済学部の勉強は好きじゃないけれど、やっと自分にも平和が訪れた。

そのはずだったのに。

「戦争なんて、いじめより嫌いだ」

独りぼっちのテントで、ぎゅつと唇を噛む。

ぼりぼりと音を立てて腕を掻いた。

左腕は、見た目に全く変化は無い。

だが、何か毛虫がはい回るような不快感だ。

思わず掻きむしらずに居られない程の衝動、不思議な感覚だった。

そして、痒い部分を掻くことで、それがある種の恍惚感をもたらしている事に、一抹の不安を感じる。

痒いから掻くという、その単純な行動が快楽に変わるのだ。

「やばいよね、このままじゃ」

皆の居る前では、これ以上心配を掛けるわけにいかない。

痒いと言っても、実際には相当我慢をして、空元気で笑顔を作っている。

本当は、掻きむしりたくて仕方が無く、かゆみ止めを目一杯すり込んでごまかしているのだから。

「うとう、痒い痒い痒い痒い」

薬が切れてきたらしい。

腕の皮膚は真っ赤になり、至る所が内出血をしている。

掻くどころか、触るだけでも痛みが走る。

かゆみ止めも最初は効果があったが、徐々にそれも薄れてきた。

「お加減はいかがですか？」

「あ、クリスさん、ご迷惑をお掛けしています」

「迫田さんと木戸さんが今、新しいかゆみ止めを探しています。

「ご心配なさらなくてくださいね」

「ありがとうございます」

睦美が連れてきた二人の男女。

片方は目が青く、金色の髪をしたドイツ人だと名乗る女性。

そして、日本刀を持って、爛々とした目をした筋骨たくましい男性。

二人は本当に僕の味方だろうか？

ひよつとしたら、感染した僕を殺すために。

嫌な想像を追い払いたくて、光樹は頭をぶんぶんと振る。

クリスは何がおかしいのか、そんな彼を見てくすくすと笑った。

「痒み、まだ収まりませんか？」

「え、ああ、はい」

急に真顔になって、クリスは光樹の腕を取る。

不意に女性に触れられて、思わず腕を引っ込めてしまう。

「だめですよ、か、感染しちゃいますから！」

「まだ感染すると決まったわけではないでしょう」

「そうですが、万が一という事も考えられますし！」

「あら、血が出ていますね」

よく見ると、腕の一方所に小さく傷ができていた。

掻きむしり過ぎたせいかも知れない。

「掻きすぎではいけませんよ？」

静かで憂いを湛えた笑み。

思わず、ぼんやりと見とれてしまう。

ああ、こんな人が自分の恋人だったなら、自分の人生はもっと違った方に動いていたかも知れない。

温かで、穏やかで、どんなに辛いときも希望の光が射し込むような。

「それでは、迫田さん達の様子を見てきます」

「はい、ありがとうございます」

テントと蚊帳の外に出ていくクリスの後ろ姿をぼんやり見送る。

ほんの微かに、香水のようなハーブの香り。

或いはそれも、病気に伴う幻かも知れない。

ぼりぼりぼりぼり。

気が付くと、人目が無くなれば無意識に腕を掻いている。

「ん？ 痒みが……」

突然、それは訪れた。

言葉にできない感覚。

痒みという何かが、徐々に肉へと染み渡っていく。

本来、皮膚の表面に『痒み』というのはあるものだ。

ところが、それが今は皮膚の遥か下に感じられる。

掻きむしっても、それはまるで、服の上から皮膚を掻いているような、もやもやとした不快感だけが残る。

「ちよつと待て、落ち着け、落ち着こう」

ぐるぐると、頭の中で記憶が錯綜する。

頬をつねってみる。

何が起きているのか。

さつきまで痒かったはずの腕の表面が、いくら掻いても収まらない。

さらに強く力を入れる。

だが、分厚い肉の層が本当に痒い部分に届くのを邪魔しているら

しい。

らしいというのもおかしいものだ。

だが、実際に痒いのはもっと皮膚の下、そう、それはまるで

「骨が……痒い……？」

信じられない。

元は痒かったはずの腕の皮膚を、ぼんやりと搔く。

気が付くと、外は雨が降り始めていた。

第22章 救ってくれない神様ならば、殺してしまおうホトトギス

「平和やねえ」

「まったく、こんなに平和では色々なやる気が失せてきますね」
「気が付くと、いつも隣には敬一郎が居る。」

そもそも地球規模で一万人しか救われていないので、日本だけで言えば、少なく見積もれば千人も存在していないかもしれない。

全員と会話をしたわけでも、数を数えたわけでもないが、ざっと観た限りではその程度の人数らしい。

元々人付き合いが得意ではないし、金を手に入れるときに結束した仲間とは、あまり顔を合わせたくは無かった。

三千万を手に入れる道中は、決して平坦ではなく、むしろ忘れてしまいたい。

だが、誰かとか話したい。そんな時、仲良くするわけでもなく、干渉してくるでもなく、必要に応じて何となく会話をする相手として、敬一郎はある意味ぴったりだった。

「なあ鈴木さん」

「何ですか」

「うちとセックスしたい？」

「別に、興味ありませんね」

「あはは、そっかあ」

「ええ」

実にたんぱくで素っ気ない返事。

だが、嘘でないことは態度や言葉で感じ取れる。

露骨すぎる質問にさえ、彼はあっさりとして悪意も感じさせない。それが逆に、春乃にとっては空気のように心地が良かった。

「ところで山上さん、外の世界にでも散歩に行きませんか？」

「へ？ なんでまた」

「神様の罰ゲームというやつを、この目で見てみたいと思ひまして」

言っていることを理解するのに、若干の時間を必要とした。

この平和な世界から、好きこのんで外に出る？

元から危ない男だとは思っていたが、やっぱりおかしいのだろうか。

「何のためにそんなめんどいことすんの？」

「神のご意志を、確かめたいんです」

「はあ、ほんなら一人で行けば？　うちはパス」

「いいですよ、それではまた夕食時にでもお会いしましょう」

敬一郎は春乃に別れを告げると、一人で外の世界へと繋がる門の前に来た。

途中出会う人々とは、こちらから大きな声で挨拶をするが、相手はどこか焦ったように慌てて会釈する。

敬一郎はそれをとてもおかしいことだと感じていた。

神の思し召しによって、自分達は楽園に入ったのだ。

神が許可を出したのだ。

だから我々は時に人を傷つけ、殺してまで金を奪い、そうしてこの場所に来た。

主体的な判断で、私達は神のお膝元にやってきたのだ。それを恥じる事など無い。

むしろ、それこそが神に対する冒瀆ではないか。

「嘆かわしい、ああ実に嘆かわしい」

今まで真面目に生きてきた。

ひたむきに、正しく生きてきた。

私は報われて然るべき人生を歩んできた。

だからこそ、今ここに居ることは至極当然のこと。

誰かに後ろ指を指されることなどあり得ない。

そして今、正義の価値観はシフトしたのだ。

それに従ったまでのこと。

ああ、正しく生きる。

胸を張って生きる。

それはとても素敵なことだ。

むしろ、こうした価値観の大転換にあたって、理解ができなかった愚民は取り残され、朽ち果ててゆく。

その御心を瞬時に理解し、実行し得た者にだけ、光の扉は開かれる。

世界を歩けば胸が高鳴る。

ここは神の国、地上の楽園。

そして、今日の前にそびえ立つ、まるでヨーロッパの古城を思わせるような重厚な鉄の門は、まさにあの世とこの世を分かつ境。

人通りの全く無い楽園の片隅で、敬一郎は一人胸を高鳴らせる。

神に見捨てられた人々は、今どんな地獄に居るのか。

哀しみ泣きむせている？

それとも血で血を洗う内戦が起きている？

悔い改め、静かに死を待っている？

それとも、もつと想像できない何かを待っているだろうか。

教えて下さい人類、あなた方の答えを！

見せて下さい人類、あなた方の現在を！

いざ行かん。

大きな扉を開けて、再び戦争で荒れ果てた荒野に足を踏み入れる。少し饅えたような、嫌なにおいが鼻を突く。

かつて日本の中心部であり、楽園競争の時はちょっとした町にも等しかったこの場所も、再び元の閑散とした雰囲気を漂わせている。

その時、懐かしい音がした。

蚊の飛ぶ羽音だ。

まだ秋とは言え、人間以外の生物を見たことでどこか嬉しくなってしまう。

例えばそれが、人類に疫病をばらまく悪の権化だとしても。

「蚊に罪は無いのに、神も酷な事をなさる」

見上げると、日は既に高く昇っている。

果たして、残された人類にどのような神罰が下されたのだろうか。

ひよつとすると、もう滅亡してしまったのだろうか？

「おおあああああ！」

斜め前方で叫び声が上がった。

がりがりど、何かを引っ掻く音がする。

見ると、バールのようなもので自分の背中をしきりと擦り上げている。

血涙を流し、獣のような咆吼を上げる。

彼の身に何が起きているのかはわからない。

だが、その気が狂わんばかりの姿態が全てを物語っていた。

「ははっ……あははは……あははははははは！」

神罰です！ 神罰なんですよ！ 背いた者を神は容赦しないんです！

「あんた、助けてくれ！ 頼むよ、背中が、背中があああああ！」

「知った事じゃありません。救われなかったあなたが悪いのですから」

「畜生畜生！ 地獄に落ちろクソ！」

「楽園に入れなかった者は等しく地獄行きなんですよ。ふふふ」

これが見たかった。

この姿が。

救われなかった者達が、悶え苦しみ呪いの言葉を吐いて死ぬ。

私のような神に忠実な者は生き、そうではない者は死ぬ。

人生は単純明快で、シンプルなのがいい。

「もつともつと、たくさん死ねばいいのに」

思わず言葉にしてしまう。

塵は塵に、灰は灰に。

救われない人間など、死んで燃えればそれ以上でも以下でもないのだから。

「天使様、わしら恵まれない者にもお恵みをいただけませんか？」

「誰だ？」

「取るに足らない、救われなかった年寄りですじゃ」

声のする方に振り返ると、そこにはまさに、今にも倒れそうに震えながら杖を突いた男が立っていた。

だが、なぜか着ているスーツは新品同様の小綺麗さがあり、泥などに汚れてはいない。

上品なひげを蓄えた、物腰の穏やかな好々爺。

だが、こんな世界に於いては、見た目や第一印象など、もはや意味を為さない。

彼の頭には当然天使の輪も無く、救われていないのだ。

「わかつてるでしょうけど、そのような姿で油断をさせ、仮に伏兵でも仕込んで私を襲っても無駄ですよ」

「存じておりますじゃ、それよりもあなた、楽園の方じゃろう」

「いかにも、そうですが」

「わしの名前は宗方成安^{むなかたせいあん}、戦前は横浜にて、小さな貿易商を営んでおりました」

「そうですか、それでは私は失礼します」

放っておいてもいずれ死ぬ。

むしろ、ほんの少しでも足下の不注意で転べば、それだけでもう一環の終わりだろう。

そのようなものを見ても、何の感慨も湧かない。

「あんた、わしの作った宗教に入らんかね」

「はあ？ 何を寝ぼけた事をおっしゃってるんですか」

「わしの宗教『三世の会』は、ただいまキャンペーン中ですよ」

ああ、この老人は体だけではない、頭までやられてしまっているらしい。

とても哀れだ。

けれども、自分はこのような老人に付き合う暇も、哀れむ余裕も持ち合わせていない。

「三千万を既に唯一神に支払ってしまったのでね、手持ちは一円もありません」

「ふおふおふお、わしなど神に三十億円を支払いましたぞ」

「そうですね、それは結構な事ですね。では、失礼します」
「待ちなされ」

「しつこいですよご老人、あなたと違って私は忙しいのです」

「三世の会は本物の神を祀るもの。神を裁く神の会。それを証明して進ぜよう」

「それが終わったら解放してくれませんか？」

「ええ、すぐに終わりますじゃよ」

「では早くしてください。どうするといふんですか」

「あなたを、殺してみせましょう」

「どうぞ、私達天使に傷を付ける事ができるなら、是非やってみて下さい」

「ふおふおふお、血気盛んな若い命、舌なめずりをしてしまいますぞ」

上品な老人の顔は、いつしか醜い化け物のように歪んでいた。

よく見ると、黄色く濁ったようなその瞳で、嬉しそうに笑っている。

言いようもない悪寒が背筋に走った。

気が付くと、手にべつとりと嫌な汗がにじみ出ている。

この老人に怯えているとでも？

いや、そんなはずはない。

「老人に優しいのは良いことですじゃ。老い先短いわしを哀れんで下され」

「ま、待って下さい。この腕に試しに傷を付けてみてください。どうせできないでしょうけどね」

「おやまあ、怖じ気づきましたかな？」

「ははは、そんなことはあるわけがない。」

神の庇護を受ける私が、今にも倒れそうなあなたに何を怯えらとおっしゃるので

「ではその胸に、このナイフを一突きさせていただけませんか」
懐に手を入れると、そこには冷たい光を放つサバイバルナイフが

握られている。

本当に刺されれば、ほぼ間違いなく致命傷となるだろう。

だが、自分は既に絶対的に、安全な身分を保障されている。

それ以前に、こんな酔狂に付き合うなら、この老人を殺せばいいのではないか？

敬一郎は今までに、四人の男女をその手で殺した。

金を手に入れるため、神の意思に従うため。

ならば、今もう一度この老人を殺せばいい。

簡単なことじゃないか。

だが、相手がこちらを傷つけられないのは知っているが、こちらは相手を傷付ける事は可能なのだろうか。

悩むなら、やってみればいい。

「どうされました。怖いのですか、この老いぼれが」

ふらふらと、まるで風に揺れる柳の枝のような、今にも倒れそう
で死にそうな、こんな老人になぜ恐怖を感じる？

自分は天使だぞ。

楽園の民なんだぞ、私は！

「とりあえず、あなたは死んでくださいよオ！」

かけ声と共に、そばにあった角材を振り上げ、その頭に力一杯叩
き付ける。

鈍い音を上げて、それは老人の頭にめり込んだ。

やった！

敬一郎は心の中でガッツポーズをする。

久々の殺人に思わず目をつぶり、無我夢中で振り下ろすのが精一
杯だった。

だが、手応えは確かに伝わっている。

人の頭蓋を打ち砕く、断末魔の音。

老人の頭はへこみ、今頃血を流しているはずだった。

「不意打ちをするなど、最近の若い方は常識を知らないのですか
う」

「ひいつ?!」

「次はわしの番ですな。こいつを、思い切り胸に突き立ててよろしいかな?」

「ま、ままま、待って下さい」

「嫌ですなあ」

「ああああ、あなた何者ですか? 私は樂園の民ですよ? 天使ですよ?」

「わしは宗教法人、三世の会の教祖、宗方成安ですじゃよ」

「何なんだそれ?! なんだよ?! あんた人間じゃないのか?!」

「人間じゃよ。失礼をおっしゃる」

「かかかか神の愛子に背くのか?!」

「わがままで身勝手に、信じる者以外救わない。そんな神にわしらがなぜ従う必要が?」

「しししししかし、神だぞ? 神! 神が言ったんだぞ?!」

「だからわしは自分で宗教を開いて、わし自身が神になったんじやよ」

「そんなこと、一度も聞いたことありませんよ?!」

「当たり前じゃよ、こんなものは若いあんた達の言葉で言えば、ゲームの裏技みたいなものじゃよ。」

ズルしてわしだけ無敵モード。気分爽快じゃて」

「卑怯だ!」

「先に角材で殴った、昨今のキレる若者の代表みたいなあんたが言ったら、説得力という日本語が死滅じゃよ」

「あれは不可抗力で、えっと、ああっ、あははは、これ、ドッキリとかですよね?!」

「腰が抜けて歩けんか? びっくりしたか? 冥土の土産に良い物を見れたじやろう?」

「いいいいいやだ! 死にたくない! 死にたくないんだあ!」

「うるさいんじやよ、あんた」

ざくり

「ぎにゃあああああああ?!」

「ふおふおふお、良い声で鳴くのう若いの」

「やめて、たつ、たひゅけて」

やっとの思いで立ち上がると、楽園の入り口に向かって全速力で走り抜ける。

振り返る余裕も、考える暇も無い。

今自分は未曾有の危機に立たされているのだ。

早く門をくぐって、その扉を閉じてしまわねば。

鬼が来る。悪鬼羅刹が群れを成し、我々の楽園になだれ込む。

そうすれば、自分がしてきたことは無意味になる。

自分がしてきたことは何だったのか。

血で汚れてまで手に入れたものは何だったのか。

私は正しい私は正しい私は正しい私は正しい。

そうですね神様?

だから助けて!

神様助けて!

神様助けてえ!

カミサマタスケテ

カミサマタスケテカミサマタスケテカミサマタスケテ……

第23章 カミサマタスケテ、ホントニタスケテ

カミサマタスケテ、ホントに助けて。

つまらない、くだらない、ないない尽くしの私の命を。

ノートに書くのも嫌になって、あれからどれくらい月日は流れた事だろう。

私の時間はまるで、濁ったどぶ川の流れに似ている。

誰も興味を持たないけれど、忘れられた場所で刻一刻と変化をしている。

二度と同じ時間は現れなくて、毎日毎秒新しいのに、その事に何の意味も無い。

退屈で人が死ぬなら、私は百万回死んだに違いない。

まるで売れないお笑い芸人のライブに、むりやり連れて行かれた気分だ。

「あーあ、チヨーたいくつうー」

机の上にほおづえを突いて、自分をいじめている桂と但野と大宮の方を見る。

名前しか知らないファッション雑誌を広げて、くだらない会話をしている。

私の視線に気が付いたけれど、何か言うわけでもなく、すぐに雑誌に視線を戻す。

あいつらも最近はいじめに飽きてきたのか、私を無視するだけになった。

他のクラスメートもそれに同調する。

話し掛けたら返事はするけど、別に仲良くするでもない。

ただそこにいる少女A。

私は名もない通行人。

映画やドラマで学校のシーンが出てくると、画面の中に映ってる主人公や脇役でさえない誰か。

それが私。

お前達、こつち見てみるよ。

孤独な私が退屈してるよ。

別に何がどうか言わないから、私と何か喋ってよ。

同じだよ。

私はあなた達と同じだよ。

何が違うの？

ニツポンジンじゃん？

ねえねえ、教えてよ。

と、心の中で思っても、言葉にできない私。

泥をこねて友達でも作ったなら、ちよつとは救われるかも知れないのになあ。

色褪せる世界。

灰色の砂嵐。

目を閉じて寝た振り。

そんな風にしていたら、放課後だというのに、担任教師の君島夏子が教室に入ってきた。

何か忘れ物だろうか？

教卓の中をごそごそと触っている。

ちようどいい、元気いっぱいに話し掛けてみよう。

「ねえねえ夏子おー、映画好きなんだって？」

「あなたねえ、教師に話し掛けるのに下の名前で呼び捨てってどうなのよ」

眉毛を八の字にして、不機嫌そうに出席簿で私の頭をこつんと叩く。

やれやれ。

この人だけだな、私の話をまともに聞いてくれるの。

「どつちだつていいじゃん。嫌われてるよりいいんだしさあ」

そう言つて、私はころころと猫みたいに笑った。

この人は世界史の先生で、受験戦争とはあまり関係のないポジシ

ヨンにいるせいかも知れないけれど、他の先生達よりも親しみやすいし、ちよつと気になっている。

授業以外では別に喋る機会も無かったけれど、今日は思い切って声を掛けてみた。

「映画は好きよ。あなたも？」

「ううん」

「じゃあ何でそんな話を私に振るの」

「暇だから。何かおすすめとかってある？」

私の言葉に、少し考えるように上を見る。

「あるにはあるけど、普通の女の子の好みじゃないようなのが多いのよね。」

たいていの女の子ってさ、ラブストーリーが好きでしょう？

でもね、私が好きなものって主に香港アクションだったり、ホラー映画だったり、アメリカンジョーク満載で、日本人の感覚とはちよつとズレた面白さのコメディだったりするし」

「面白ければ、男も女も関係なくないかなあ」

「私としてはそう思うんだけど、以前気になってる男の人と飲み会で、アクション俳優のグリーン・ボルタオスがフライパンだけでファイアと戦うシーンについて熱く語ったら、翌日から携帯のメールが無視されるようになったのよ……」

「あははっ、夏子ってばマジパネエ！」

「マジパネエってなに？」

「半端じゃない。すごいってこと」

「すぐく馬鹿にされた気がするんだけど」

「ねえ夏子、私はそんな風に冷たくしないから、何かおすすめ教えてよ」

ほおづえを突いたまま、につこりと笑ってみる。

用事があった時以外で、先生と話す最長記録更新だ。

つまらないかかって心配だったけど、なんて事はない。

結構楽しいよ。

「うーん、DVDで持つてるのはコレクションとして、アカデミー賞作品しかないけど、それでもいい？」

「アカデミーでもロボットミーでもいいよ。面白いのおねがーい」

「ロボットミーって……まあいいけど、そうだなあ。」

ちようど昨日学校の帰りに買ったのが今持つてるんだけど、家に置いてくるの忘れちゃってさ。

これとかどうか？

夏子が渡したDVDには、どこかもの悲しい書体でこんなタイトルが書かれていた。

『世界の終わりに夕食を』

あらすじを読むと、謎の奇病の発生と、第三次世界大戦でぼろぼろになった世界の中で、人間がどう強く生きるかという学校教師と生徒の話のようだ。

SF映画っぽいけど、人間ドラマが濃密に描かれて云々と書いてある。

「夏子はこれ、もう観たの？」

「まだなんだけど、他にも録画したままになってるドラマとかもあるから、一週間くらいなら貸してもいいわよ」

「やっぱりいい、それじゃ借りちゃうよ。ありがとう」

「気に入ればいいけどね」

「大丈夫。きつと気に入るよ」

DVDを貸し借りするなんて、ちよつとだけ人間っぽいになったかな。

ニホンジンっぽいになったかな。

ありがとう先生。

あなたの目には、私は普通に映ってる。

嬉しいよ。すごく嬉しい。

これからもまた、映画を貸してね。

そっだ、この嬉しかった今日をメモ帳に書きつづけておこう。

一日限りの私の日記。

嬉しい事は残ればいい。

ね、そう思うでしょ？

第24章 骨の上を、無数のアブラムシがはい回ってるみたいだ

『今日から日記をつけようと思う。』

そう、見知らぬ誰かがいつか拾った時の為に、自己紹介も書いておく。

僕の名前は谷村光樹、とある大学の経済学部の学生だ。

ちなみに、神様が行った罰ゲームのせいで、僕の命は長くない。

そんな僕が今いるのは、何かの工場があったらしい、大きな建物の中だ。

屋根はボロボロだけど、とりあえず雨の時は隅っこに居ればいい。風もさして気にはならなくなってきた。

みんなの優しさが身に染みて、ここにはいけないと思った。

そんなものは逃げる理由に成り得ないかも知れない。

けれど、あそこに居たら僕は皆を不幸にしてしまう。

ああ、それにしても腕が痒い。

いや、腕の骨が痒い。

骨が痒いなど、果たして信じられるだろうか？

しかし、実際に腕の肉の下、骨の表面がむずむずとしている。

いざ掻こうとしても、腕の肉が邪魔をする。

ばりばりと、皮膚を掻きむしる音だけが空しい。

どうすればいいのだろう。

かゆみ止めも効かない。

死ねばいいのに、死ぬ勇気も無い。

僕は惨めで、哀れだ。

神様、助けて。

僕を少しくらい哀れんでくれ。

いや、ください。

別に罰を与えられるほど、悪いことした覚えはないんだけどな。

ああ、痒い。

痒くて痒くて仕方がない。

こうしてペンを動かすなりして、気を紛らわそうとしているのに、痒みは少しも収まってくれない。

ああああああ

かゆいかゆいかゆい

かゆいよ！

かゆいんだよ！

助けてよ………』

その日の日記は、やや言葉遣いが乱暴になった気がする。

もつと気を付けよう。

それにしてもかゆい。

手を止めれば余計に気になる。

骨の上を、小さな無数のアブラムシがはい回っているような不快感。

畜生畜生チクショウチクショウ。

考えるときの言葉遣いも普段より少し荒っぽい。

人類も自分も、地球も宇宙も、何もかも一瞬で消えてしまわないだろうか。

消しゴムでノートの間違いを消すように。

ぱつと、さ。

「あははははは、核戦争でも滅びなかったのに、無理だよね」

ふと手を止めて、外に目を向ける。

雨はもう止んでいるらしい。

「あの子は、元気かな」

睦美の事が少し気になる。

ちよつと不良っぽくて、だけれども、どこか憎めない素直さを持っている。

少し年下の、妹ができたみたいな気分だった。

「あはは、人生リタイヤか。あはははは」

ごろりと横になる。

骨の髄からわき上がる痒みは、少しも手加減はしてくれない。なるべく気を紛らわそうと、つねったり横になったりもしてみたが、状況は変わらない。

そもそも皮膚が、肉がある。いくら掻きむしっても、皮膚の下まで爪が届くわけがない。

ぼりぼりぼりぼり。

掻きむしる音は無情で、どこか悲しい。

三人が目を離れた隙に、遠くへ逃げ出した。

誰にも迷惑を掛けたくない。

これ以上荷物になりたくない。

また生きている事を否定されるくらいなら、いっそ孤独のまままで死にたい。

ぼりぼりぼりぼり。

皮膚が分厚すぎる。

ぼりぼりぼりぼり。

足りない。

足りない足りない足りない足りない。

気が付くと、ポケットに錆びたカッターナイフが入っていた。

いつの間にこんな物が入っていたのだろう。

だが、気にするのも馬鹿げている。

これがあれば

「いやいや、待て待て待て、冷静になるんだ」

それは恐ろしすぎる想像だった。

腕に刃を立て、皮膚を切り開く。

ぬめつと、血にまみれた腕の中に指をくぐらせる。

きつと痺れるような、いや、突き抜けるような激痛が脳天まで走るだろう。

だが、歯を食いしばってそのまま爪を立てる。

中の骨を削るようにして掻きむしる。

ああ、そうすればどれほど心地よいだろうか。

痛みよりも遙かに勝る、エクスタシーが。

「くふうっ」

思わず声が漏れる。

骨自体に神経は無くとも、掻くことでその周囲に手が触れれば、痛みが突き抜ける。

しかし、それでも爪を立てずに居られない。

ぼりぼりぼりぼり。

爪の音が耳障りだ。

第25章 人間の証明

「独りぼつちには嫌だ。

独りぼつちには怖い。

僕はこんなに努力してきたのに、なぜまた今、こうして独りぼつちなんだろう。

夏子達と別れた後、勉は行くあてもなく彷徨ううちに、木戸優美の死体を見つけた。

「ご丁寧にタンスの中に入れられているのは、最初に出会った夏子がそうしていたからだ。

そのそばに倒壊したコンビニらしきものがあつた事もあり、ペットボトル入りの飲料や、スナック菓子などを見つけた事ができた。

パック入りのごはんもあつたが、こちらは電子レンジやお湯が無いため、固くてあまりおいしくない。

「ねえ、君も食べるかい？」

名も知らぬ、半裸の女性の死体に向かって問いかける。

もちろん死人は喋らない。

だが、死人は自分を否定しない事に、勉は安堵を感じていた。

つまらない奴らに囲まれて、つまらない人生を送りながら、つまらない現在を生きて、つまらない死を迎えるはずだった。

頑張った僕は誰にも理解されないけれど、きっといつかは報われる。

だけれども、そんな事を保証してくれる人は誰もいない。

そう、それが例え神様だとしても。

「蚊、そこら中を飛んでるね。僕ももうすぐそちらに行くよ」

死体となつた優美に話し掛ける。

白目を剥いて、血の気の失せたその姿に、哀れみと同時に喜びを感じる。

そして、そんな自分がとても情けない。

死ねばいい。

こんな僕は死ねばいい。

死ねばいいと思っっているのに、自殺もせずに生き延びて、感染もせずに生き延びて、のうのうとここで膝を抱え、ぼんやりと沈む夕陽を見ている。

太陽は生きていない。

生きていないから美しい。

僕は生きている。

だから醜い。

嫌なことから逃げてばかり。

やりたくないことには言い訳ばかり。

働きたくない事を理由に大学院に進学したけれど、研究したかったわけじゃない。

ただ、社会に放り出される事に不安しなくて、理系ならば大学院で年齢をいくら重ねても、下に扱われる事はないと思ったからだ。ましてや僕が居たのは国立大学で、そこそこ名も知られている。分野としては地味だと言われているものの、高度な研究には人材が不足している。

だから、いつでも僕が就職したいと言えば、きつとどこも諸手を挙げて歓迎してくれる。

そうに違いない。

そのはずだ。

勉強は膝を抱え、声を殺して泣いた。

横にしているのが死体でも、笑われるような気がした。

だから彼女に聞こえないよう、背中を向けて嗚咽を漏らす。けれども、気がしただけで実際には笑わない。

死体は優しい。

どんな過去も、どんな思いも、全てを聞き流し、表情を変える事は無い。

「お茶、飲むかい？　って、返事できないだろうけどさ。せめても

の気持ちだよ」

そう言って、ペットボトルのお茶で軽く優美の唇を濡らす。何だか良いことをしている気がして、ほんの少しだけ心が軽くなつた。

「楽園……行きたかったな……」

夏子は、毅は、仁は、藤次は、今頃どこに居るのだろうか。

無事に楽園にたどり着き、自分を嘲笑っているかも知れない。

綺麗な服に袖を通し、暖かなご飯を食べ、柔らかい布団で眠りに就く。

当たり前だった毎日が、こんなに幸せだったなんて。

最悪だ最低だと声を殺して泣きむせび、栄養補助食品の大豆バーをかじる。

ふと顔を上げると、夕闇の迫る荒野の中で、遠くに人の姿が見える。

思わず声を上げて後ろにひっくり返り、転げ落ちそうになった小高いごみの山に必死にしがみつくと、顔だけを出して様子を伺う。

男が二人に女が一人、息を切らして近付いてくる。

敵か？ 味方か？

今この世界にいると言うことは、三千万円を用意できなかった人達だろう。

ならば、自分と同じ境遇、仲間じゃないか。

そう結論を出すと、廃車の上に飛び乗って、おーいと大きく声を上げ、手を振る。

だが、向こうはゆっくりとした足取りで徐々に近付いてくるものの、自分にまるで気付いていないかのように、誰も反応をしてくれない。

物取りというわけでも無さそうだが、その無関心が返って不気味だ。

「僕は柳勉って言うんだ！ あなた達は？」

結構そばまで近付いている。

だが、ちらりとこちらを見るだけで、反応は薄い。
しかし、別に手に武器を持っているわけでもないし、何より女性もいる。

それだけでもまだ、信用に値するだろうと思いい、勉は優美の死体のそばを離れ、彼らに近付いていった。

「あの、僕に何か用事かな？」

お茶とかお水なら、倒壊したコンビニがそばにあるから、まだまだたくさんあるよ！」

「うるさい……」

自分より少し年上の、三十歳前後と思われる男性が不機嫌そうに答えた。

その態度に戸惑いつつも、勉は精一杯の笑みを浮かべて、隣の若い女性に声を掛ける。

「ねえ、なんでそんな怖い顔してるの？」

「痒いからよ……」

彼女の言葉を聞いた瞬間、反射的に勉は後ずさる。

彼ら、彼女らは感染者だ。

だとすれば、近くに居ること自体が危険だ。

けれども、感染したとして、だから何だと言っただ。

自分はまた逃げて、誰とも分かり合わないままなのか。

そう思い、ちらりと優美の死体を見る。

頑張れ。

彼女の焦点の無い白目が、そんな風にささやき掛けている。

そんな気がした。

「あの、かゆみ止めあるよ！ みんな、これが目当て？」

「えっと、柳さんか？」

俺達はね、あんたに用事があるわけじゃないんだよ」

そう言いながら、三人は優美の死体に向かっていく。

彼女の知り合いだろうか。

少なくとも自分に危害を加えるつもりは無さそうだが、それ以上

に無関心なのだ。

しかし、彼らの目は爛々として何か異常な光を帯びており、その視線は優美の死体に向けられている。

追い剥ぎ？ 必要が無い。

死姦愛好？ いきなり三人もそんな倒錯者がここに来るだろうか。

「彼女の死体に、何かあるんですか？」

「大ありだよ。やっと見つけたんだ」

「え？」

その瞬間、最初に辿り突いた男が、取り出したナイフを優美の腹に突き立てる。

ぐちゃりと嫌な音を立てて、男はゆっくり手を引いた。

赤黒い、そして灰色の内臓達が姿を現す。

映画や漫画で見るよりも、その色は遥かに毒々しく、生臭い。

「ちよつと、何してるんですか！」

「うるせえ……少し黙ってる。お前に危害を加えなきゃいいだろ……」

血と脂にまみれた手を腹から抜くと、勉の額のそばで止める。

万歳をするような姿勢で手を挙げて、数歩後ろに下がった。

すると、後から来た若い男女もナイフを取り出し、今度は死んでいる優美の胸と額に突き立てる。

ぐちゃりぐちゃりと音がする一方で、喉にナイフを突き立てた方

は、今度はそれが抜きづらくなって、うんうんと唸っている。

狂ってる。

ただその言葉以外に、何も表現しようがない。

ついに見捨てられた世界の中で、頭がおかしくなってしまったのだろうか。

呆然としている勉の前で、三人はぼそぼそと何かを呟く。

「これじゃない……これでもない……」

「あああ、あなた達、何をしてるか分かってるんですか」

「分からないと思ってる？」

女は唇に付いた付着物をべろりと舐め、感情のこもらない目で勉を見る。

その間も手を休める事はなく、優美の胸の中に手を突っ込んで、ぐちゃりぐちゃりと動かしている。

「あつた！ これだ！ これだわ！」

不意に女は叫ぶと、空いている方の手を優美の中に突き入れ、強引に横にいる男の手を押しつける。

「テメエ、何するんだよ！」

「あつた！ あつた！ あつた！ あつた！」

「うるせえんだよ！」

押しのけられた男は、体を起こすと女の左頬を力一杯殴る。

すると、体の中に手を入れたままだったせいで、優美の死体が手に引きずられて起きあがり、首を切り落とそうとしていた男の手元を狂わせる。

「痛えっ！」

「つつあつ、な、何しやがるんだこの野郎！」

「あ？ 知るかよ！」

「そのクソアマが悪いんだろうがよ！」

「ああああ！ あつた！」

「あつた！ あつたよおあつたよお！」

男達は声を荒げるものの、そこからケンカを始めるでもなく、必死になつて優美の死体に群がる。

そして、殴られた女もその隙間を縫って、その体に必死に手を入れる。

「何がどうなっているんだろう。」

勉はその光景が、いったいどんな状況なのか、全く理解ができない。

だが、自分を励ましてくれた、たった一人の理解者である優美の死体が、突然に現れた男女に好き放題に手垢まみれにされることが、この上なく腹立たしい。

しかし、ここに来て一瞬頭が冷静になる。
逃げればいい。

よく分らないが、感染者であり頭のおかしい奴らが三人もいる。
こんな場所からはさつさと去るべきだ。

そもそもよく知らない女の死体なんて、そこら中にいくらでも転がっている。

彼女もまた、そんな名も無い、極めて統計的な死者に数えられる
一人に過ぎない。

「やったあーっ！」

女が不意に声を上げ、何かを高らかと持ち上げた。

見た目ではよく分らないが、両手に持って少し余る程度の大きさのそれは、何か内臓の類だろう。

同じ女同士だろうに、なぜこんなに嬉しそうにしているのか。

死んでいるのに、冷たくなっているのに、弔いの言葉の一つも無しに。

僕はまた逃げるのか？

気が付くと、そばにあったぼろぼろのアタッシュケースを手に取り、思い切り振り上げて、女の後頭部に叩き落としていた。

「ひぎゃあっ！」

聞いたことの無いような悲鳴。

それは耳に嫌な余韻を残す。

「お前……おかしいよ……僕もおかしい……みんなおかしい……」
呼吸が荒い。手に嫌な汗が流れる。

言葉が続かない。

足が震える。

生まれて初めて、誰かを肉体的に傷付けたのだ。

それも、よりによって相手は女。

まるで犯罪者のやることだ。

けれど、今はそうせねばならない。

すぐに男達から反撃を受けるかと思っただが、彼らはまるで興味が

無さそうに、一心不乱に優美の体をまさぐっている。

一人は相変わらず、首の骨を切り落とそうと必死だ。

「ひああっ！ ひもっ、ひもひい！

ひもひいひよお！」

足下から声がある。

それは倒れた女が、歯が欠け、額に大きな傷が入った状態で、さつき持っていた内臓に手を入れたまま、手を小刻みに動かして歓喜の声を上げている。

「ひああああ！ あふっ！ あひやはははははっ！

やつは！ やつはああああ！」

「何なんだ。何なんだよ！」

女はゆっくり体を起こすと、地面をまな板のようにして内臓を開き、小さな胞子状の何かと、微細な血管らしきものが貼り付いたそれを、子供が遊ぶようにぐちゃぐちゃと触る。

「これだ……俺の痒みの原因……」

優美の死体から、また一つ男の手によって内臓がもぎ取られている。

見た目だけではよく分からないが、それはおそらく胃袋だろう。

そして彼もまた、それを地面に叩きつけると、ナイフで中身を開いて手を入れる。

「あははははっ！ これだこれだあ！」

うっ、気持ちいい！ 畜生、まるでバケモノだな俺は！

もういい！ もういいよ！ あははははは！」

腐りかけの優美の死体が、まるで食用に解体された家畜のように、徐々に空っぽの何かになっていく。

その姿は、見ていて心にまで穴が空いていくようで、後には嫌な寒さだけが残る。

膝を突いて、呆然とする勉に向かって、まだ首を切り落とせない男が、背中を向けたままでぼそりと言った。

「お前、感染してないから分からないだろう。」

俺にもよく分からないが、この女の体の中身を搔かないと、俺の痒みが治まらないんだ」

「言ってることがよく分からない……」

「俺だってなあ、好きで見知らぬ女の死体ははずかしめるような真似をしたいわけじゃないんだ！

でも、こいつの頭蓋骨の裏辺りが痒くて痒くて……痒くて痒くて痒くて痒くて、いつそ殺してくれと思うくらいなんだ！」

「自分の頭蓋骨なり尾てい骨なり、好きなところを搔けばいいだろう？」

他人の死体の骨なんて搔いて、痒みが取れると思うのか？！」

「ああ、取れるんだから仕方ないだろう」

「ごりりと嫌な音がして、優美の頭は切り離される。

そして、男はそのまま頭を地面に押し付けると、頭の後ろにナイフを刺し、ごりごりと中に手を入れていく。

「早く……早くしろ……気が狂っちまいそうだ……」

ちらりと横に目を向ければ、胃を地面にこすり付ける男と、笑い続ける女の姿。

「ああもう！ ああもう！ あはあーっ！ この胃が！ 胃が！ 畜生畜生！ 胃が！」

「ひはははあああ！ ひへえっ！

ひあっはあっ！ ほふおあああ！」

ああ、人間じゃないよ。

お前達、なんでそんな醜態を晒す？

僕は下らない。

僕はつまらない。

僕は逃げてばかりで、どうしようもないクズだ。

けれども、こんな姿になってまで、生き延びたいとは思わない。

お前達は単細胞生物よりも、遺伝子情報だけのウイルスよりも、なお下等で、なお劣っている。

どうしようもなく救われない何かだ。

だから僕がもう一度、お前達に人間としての死を、正しい死を与えてあげねば。

今度はアタツシユケースではなく、そばにあった金属の棒を手に取ると、二人いる男の頭を連続で叩き割った。

ぐしゃりと嫌な音がして、血と脳漿が辺りに飛び散る。

だらしなく舌を垂らして、男達は静かに横たわった。

ついにやってしまった。最低で最悪の結末だ。

しかし、それはやらねばならない事だった。

つまらない僕だけど、価値の無い自分だけれど、初めて何か成し遂げた気がする。

「ひゃひゃひゃひゃーっ！ あひあーっ！」

「君も、さよなら」

最後まで目を開いたまま、彼ら、彼女らが死にゆく様をじっと見届けた。

それは勉なりの贖罪であり、罪を背負う覚悟だった。

何だかんだで死にきれず、結局誰かを救う事もできず、そして自分自身さえこの有様。

人をこの手に掛けてしまった重みを感じ、ふらふらと熱病にうかされたような頭のまま、その場にどつかと腰を下ろす。

さつきまで男に手を入れられていた優美の頭部を持ち上げると、

涙が込み上げてきて、思わず彼女に謝罪をしていた。

「ごめんね……何だか……すごくごめんね……」

生きている女はおるか、死んだ女さえ守れない。

結局こうして汚されて、取り返しのつかない事態になってから、初めて自分は動いた。

だけでもそれが精一杯。

さんざん逃げてきた自分にとっては、振り絞った一滴の勇氣。

例え血まみれだったとしても、人としての道にそぐわないとしても、そうしなければいけない事がある。

だって、僕は人間だから

第26章 イーイーおめでとう！ 神は死んだよ！

楽園つて何だろう？

温かい？

涼しい？

お腹が空かない？

寝たいときに寝られる？

普通に生きていた時、春乃はそんなことを考えたことさえ無かった。

決められた時間に起き、だいたいの時間で着替えて食事を家畜のように流し込み、自転車で駅まで走って、満員電車で揺られて職場に行く。

嫌いな上司もいるけれど、同僚達とは結構仲良し。

嫌なお客様もいるけれど、とりあえずは何の問題も無く、商品を買ったらどこへともなく消えていく。

一通りの仕事が終わってタイムカードを押したら、そのまま町に繰り出したり、繰り出さずに帰ったり。

お土産に自分へのご褒美スイーツを買ったり買わなかったり。

ついでに立ち寄ったスーパーで、値引きシールの貼られたお総菜とサラダを購入。

ご飯を食べたらお風呂に入って、合間合間にケータイで友達と連絡。

モバイル日記に色々書いたら眠りに就く。

面白くもなく退屈で、未来も見えないけど不幸でも無い。

けれど、社会は漠然と不安だったし、無くなってもいいと思っていた。

別に痛くなきゃいいよ。

きつと私の未来に幸せなんて待ってないから。

フリーターが何の未来を見る？

学歴の無い私がどんな将来を考える？

だから戦争が起きた時だって、そのまま全て無くなっちまえと思
った。

酒を飲んで暴れるだけしか能が無い、クズの親父も。余所で男を
作って、自分も体売ってカネを稼ぎ、ついでに私にまでそれを勧
めてくるゴミの母親も。

みんなみんな死ねばいい。

ああだけど、痛くないようにだけはお願い。

それくらいはいいでしょ、神様？

山上春乃が見た世界。

それは子供と大人の間生きる中途半端な、少女と呼ぶにも遅す
ぎる、そんな春乃が見たセカイ。

楽園などという言葉とは、およそ対極にあるだろう。

それでも人に暴力を振るう事も、万引きなどで欲しいものを手に
入れる事も、絶対にする事は無かった。

それだけのリスクに対して、リターンが求められないからだ。

誰かを殴ればその場でスカツとするかも知れないが、警察に突き
出されれば暴力沙汰として訴えられる。

万引きなど、割と成功率は高いらしいが、捕まれば窃盗犯として
逮捕されてしまう。

どんなに地獄でも、楽園とはかけ離れていても、そこにルールがあ
る限りは、それに沿って生きること。

小器用に生きられなくとも、後ろ指さえさされなければいい。

だが、ある日突然にルールは無くなった。

春乃は金庫の前に座り込んだり、裏金を溜め込んでいた老人を捜
し出し、男達と徒党を組んで現金を奪い、楽園に入った。

決して気分が良い事ではない。

ただ、自分の手は汚れていない、などと言いつきをしたくなくて、
自分でも一人老人を殺した。

ナイフで心臓を一突きしてやれば、血が胸からにじみ出して、び

くりとも動かなくなる。

死とは案外あつけない。

リーダー格の男に良くやったと言われたが、大して嬉しくもなかった。

むしろ、ついにこんな事をして、平気な顔をしていられるほどに感覚が麻痺してしまった事に、我ながら情けなさや悲しさが込み上げて、鏡を見るのが怖くなった。

そこにいるのは名無しのモンスター。

見るに耐えない鏡の国のアリス。

けれども、それは紛れもない自分。

角が生えて口が裂けて、目が光って舌が長い、そんな風なら良かったのに。

その怪物は今までとまったく変わらない山上春乃の姿をしていて、泣いたり笑ったりするのだ。

だからこそ、自分の姿が一番怖い。

鏡なんて覗けたもんじゃない。

だけど、それが私。

しょうがないじゃない。

生きたかつたんだから。

自分に言い聞かせ、ごろりと横になる。

その日、敬一郎は帰ってこなかった。

まあ、別にどうでもいい。

好きというわけでもなく、単なる話し相手だ。

周囲には他にも色々な人がいるけれど、別に話したいとも思わない。

だって、みんな人の姿をした、バケモノ以外に居ないんだから。

「つまらなそーだねキミ。楽園は嫌いかな？」

ふと横を向くと、特徴のない高校の制服に身を包んだ、髪の毛の長い女の子が座っていた。

よく見ると、頭には天使の輪が乗っていない。

なぜだろう？

ひよつとしたらこれが神？
まさかね。

だからどうしたって事もないけど。

「面白くはないなあ。」

そりやまあ、外の世界は地獄やるけどさ。

「ここが楽園かって言われたら、それは無いと思うわ」

「なんでかな？」

「メシ食わせてもろて、寒くも暑くもなくて、寝る場所がきちんとしてりやあ楽園やって言うん？」

「十分に楽園だと思っけどなあ。」

バカやらかした人類に、神からの最高のプレゼントよ」

「ほんまに、そんな風に思ってるの？」

「思ってなきや、神なんてやってられないしいー」

くすくすと笑う女子高生もどき。

なるほど、やっぱりこいつが神か。

一応礼くらい言うべきだろうか。

でも、何だかムカつくので、やめておこう。

「神って全知全能で万能と思う？」

「あんた見て、そんな風に思える奴がおったら、そいつは嘔吐きやで」

「あははーっ、面白いよキミ！ チョーうける！」

「そりやどうも。うちは眠いねん。ほっといてえや」

「ごろりと横に寝そべって、視線を神から逸らす。」

自分以上にこの女はモンスターだ。

どこかの偉い人が言っていた。

深淵を覗き込むとき、自分も深淵に覗き込まれているのだと。

この女の顔を見ていて、つくづくそう思った。

この楽園の中にあふれている、助かったと思っつて、人間らしい顔をしている『救われた人間達』なんてのは、どいつもこいつも嘔吐きだ。

どうせみんな人殺し。

どうせみんなまともな世界に居れば罪人。

狂ったり狂わなかったりして、平気な顔でこんにちは、こんばんは、さようなら、いただきます、ごちそうさま、おやすみなさい、そしておはようございます。

人の言葉を喋るケダモノ。

人間らしく振る舞うバケモノ。

神も悪魔も人も馬鹿者。

「私、多分もうすぐ死ぬんだ」

「あつそ。神が死ぬなんて、おもしろくないネタやね」

「死ぬ前にもう一度だけ、同世代の女の子と喋りたかったんだ」

「ふーん」

「それで、最後に否定して欲しかったの」

「なんで？」

「私は正しくないって」

言いながら、神だと名乗る彼女は笑った。

少しだけ、分かったような分からないような、複雑な気分になる。けれども、一度はやってみたかったいたずらが成功したのに、やらなければ良かったと後悔するような、そんな気分かも知れない。

そもそも神様だって、全知全能で、それこそ「神みたいな奴」だなんて、勝手に決めつけられたら迷惑じゃないだろうか。

破壊するのに、創造するのに、殺すのに、生かすのに、維持するのに、放棄するのに、いちいち理由とか考えるのだって、人間だけのような気がする。

でも、神様には神様の理屈があるのかも知れない。

それこそ、神のみぞ知る世界だ。

「なあ、この樂園ごっこやってみて、後悔してへん？」

「後悔するなら、やらなきゃいいんじゃないかな。恋も同じだよ」
その言葉を聞いた時、ほんの少し春乃は考え、小さく頷く。

「あんたの事あんまり好きちゃうけど、今少しだけ納得したわ」

「あははっ、ありがと」

「なあ、神様なんで死ぬかも知れんの？」

「悪いことをしたからだよ」

ペロりと舌を出して笑う。

その姿はどこか人懐っこくて、およそこの大虐殺を提案した、世紀の大悪魔。

神という名のペテン師には相応しくないように思える。

だが、紛れもなくこの服装や言動から考えて、彼女こそが神なのだろう。

だが、そんな神が死ぬという。

神が死んだら、世界はどうなる？

「なあ、神様死んだら樂園は？」

「多分元に戻っちゃうんじゃないかな」

「うちら救われたんやないん？」

「今までは救われたでしょ。ご飯も食べたし、今はこうして何の苦も無い」

「なんやー、結局は救われへんのやん」

「人を殺して、奪って、憎んで憎まれて、それでも救われる。未来に希望があるなんて、都合良すぎと思わなかった？」

「えへへー、ちよっと思ってるん」

「でしよう？」

もやもやしていたのが、何だかスッキリした気分だ。

結局世の中はそんなもの。

この後私達はどうなるのだろう。

また神も仏も無い世界に放り出されたあげくに、謎の病気に怯えながら、そして実際にそれにかかってしまい、苦しみ抜いて死ぬのだろうか。

ああでも、それ以前にこの樂園から外に出たら、多分色々な人々に袋叩きにされてから、腹や胸をかつさばかれたり、レイプされたりして、ごみのように捨てられるのだろう。

最低で最悪で、クソみたいな死に様だけれど、私も含めたここに
いる奴らには、とてもお似合いに違いない。

「あつ、そろそろ来ちゃったみたい」

「あのおじいさん？」

「じゃあ私、行かなくちゃ」

そう言つて、神である少女は立ち上がると、小さくバイバイと手
を振つて、少し離れた老人のところに向かつていく。

上品な仕立ての綺麗な服。

杖を突いて、少しよぼよぼとした足取り。

でも、頭には天使の輪を載せてはいない。

なるほど、彼もまた、何らかの同族なのだろう。

二人が対峙しても、楽園の住人は別に気にする風もなく、寝転が
つたりおしゃべりしたりと、まるで眼中に無いらしい。

呑気なものだ。

ある意味一番平和なのは、ここにいる奴らの頭の中身かも知れな
い。

「久しぶりじゃのう。元気にしていたかね」

「元気だったよ」

そう言いながら、彼女はぺこりと頭を下げる。

「満足したかね、小僧の神様」

「満足したよ。私はとっても正しかったのだ」

「君にとつて正しくても、世界中のみんなにとつては正しくなかつ
たかも知れんのう」

「ふーん。正しくなかった私はどうなるかな？」

「死刑じゃろうな」

「あははーっ、ごめんで済んだら警察いらないもんね」

「残念じゃったよ。君は最高の神様と信じておつたのに」

「最低の神様だったみたいだよ。ごめんね、元神様」

「ああ。それじゃあ、さよならじゃ」

そう言いながら、老人は杖に手を掛け、中からぎらぎら光る刃を

抜く。

時代劇などで見たことのある、仕込み杖だ。

春乃が固唾を呑んで見守る中、ひゅんと風を切る音がする。

一瞬時が止まったような静寂に包まれ、次の瞬間に女の首は地面に転がる。

主を失った胴体は、辺りに血の雨を降らせながらゆっくりと倒れ込んだ。

「人が神になろうと思ったり、神が人になろうと思ったり、どちらも不完全で無理があったのかも知れんなあ」

今まで気にも止めていなかった二人の方に、楽園に住む全員の視線が注がれる。

沈黙、そして慟哭。

誰もが叫び声を上げ、沈没する船から逃れるように、出口へと殺到する。

押し合いへし合い、倒れた者は踏まれ、顔が吐瀉物にまみれては立ち上がり、再び外を目指して走る。

狭い楽園の中は一転して、小さな混乱の地獄絵図に包まれる。

「お嬢さん、逃げないのかね」

「うち？ まあ、どうせ逃げても殺されるんちゃうかなーて思うし」

「殺したりせぬよ。神だから人を裁く権利があるとしても言うのなら、その神こそがおこがましいんじゃないからな」

そう言って、老人は笑う。

目の前で神であったはずの女が殺されているのに、不思議と恐怖感はない。

むしろ、命乞いをするように、我先にと出入り口に殺到する人々を見て、言いようのない不快感を憶えた。

無責任な大人ばかり。

こんな奴らばかりだから、この世界は崩壊したんだろう。

少しは反省したらどう？

そんな偽善ぶった心が湧いてきて、思わず首を左右に振る。

今さらだ、何もかも、あらゆる意味で。

「わしの名前は宗方成安。」

今は人間のようなものでもあり、かつては神と呼ばれたものじゃ
「よ」

「過去形なん？」

「歳と共に限界を感じてなあ。」

引退がてら、この娘に神の座を譲ったんじゃ」

「譲る相手、間違ったって思ってる？」

「いや、間違っただなどと思っではおらんよ」

そう言っつて、成安は満足げに笑う。

だが、その事に春乃は疑問を感じた。

「さつき、世界中のみんなにとって正しくないって言うてたやん」

「世界中のみんなにとって正しくなくても、彼女にとっては正しかった。」

誰も救えない神だったが、たった一人、自分自身を救ったんじゃ。
そして彼女は納得し、然るべき罰を受けた。

これからどれほど悲惨な地獄に堕ちたとて、きっとあの子は幸せ
なんじゃよ」

「おじいさんの言うこと、難しくてよく分からへんわ」

「分かる必要も無いんじやて。」

それよりもお嬢さん、一つお願いがあるんじやよ」

「なんやろ？」

「今彼女を殺したこの杖で、今度はわしの首を刎ねてくれんかな」

血でべつとりと汚れた刃を、ずいと目の前に突きつける。

きらきらした光を反射するそれは、まるで怪物の目にも似ていた。

「うちは神になんかならへんよ。」

悪いけど、全身全霊でお断りや」

「神にならなくてもいいんじやよ。」

神などいなくても、人は誰しも生きていける。

いや、神がこの世におらずとも、人間は生きていかなばならんのだ。

「じゃから」

「そんなん当たり前やん。」

神とか仏とかおらん思てても、うちは今まで生きてきたで」

「ふあふあふあ、心強い言葉じゃなあ。」

それならば、安心して死ねるわい」

「なあ、おじいさんはなんで死ななあかんの？」

「それが死んだ者達への償い。」

神の贖罪、人類の背負った原罪じゃからな」

「あはは……うち、やっぱアホやからようわからんわ……」

「分からずともいいんじゃないよ。それより、介錯はしてもらえるのかね」

「かいしゃく？」

きよとんとする春乃に、成安は笑って答える。

「ああ、すまんことじゃて。」

つまりは首を切り落としてくださるか、ということじゃよ」

「ホンマうちアホですんません。」

なるほど、理解しました」

「で、していただけるかね」

「やったことないけど、せいっぱい」

成安は膝を突くと、神が流した血の海に手を入れ、指先で軽くもてあそぶ。

そして、死んだ彼女のまぶたが開いたままになっているのを指先で閉じようとすると、魚のうるこのようなものが地面にこぼれ落ちた。

涙？ 死人が？

春乃は不思議に思い、それを指で拾い上げてみる。

落ちていたのは黒に近い焦げ茶色のカラーコンタクト。

見ると、瞳孔の部分の色が違う。

ははあ、なるほど。

案外彼女も苦勞人なのかなあ？

不意に神の人間くささが上がって、身近な存在に感じられる。せめて遺品として、これをもらっておこうかな。

神様のカラーコンタクト。

何だか洒落が利いている。

そつと懐にそれをしまつと、軽く深呼吸をした。

「馬鹿じゃな本当に。」

神が全知全能なら、こんな風にはならなかったろうに……」

「おじいさん、あなたもこの子もかわいそうやわ。」

「もちろん、うちもかわいそう」

「ああ、かわいそうな奴らばかりじゃ」

「でもなあ、これでまた始まるかも知れへんで？」

「そのために、わしらは死ななきゃならんのじゃよ」

にやりと笑ったその顔は、不敵で素敵で最適の笑顔。

世界に地球にセイグツバイ。

神も仏も全部リセットボタンを押して、愚かな私達は生まれ変わる。

いや、生まれ変わる。きっとそのはず。そうに違いない。

だからいつか、遠い来世で会うかも知れないね。

みんながみんなに、来世なんてあるならね。

来年さえも分からないけどさ。

第27章 一生に一度のお願い

最低のジョーク、最悪のタイミング、それは空の上に浮かんだ大きな文字。

迫田景人は抜けるような蒼穹に向かって、力一杯中指を立てた。

最後の最後までふざけた態度を取られている事に、少しでも反抗をしたかった。

このまま逃げ切る？ 誰が許すか！

そう叫んでも、きつと思いは届かないだろう。

『イエーイおめでとう！ 神は死んだよ！』

本当だろうか？

冗談ではないか？

そもそもこれは何かの罠か？

そんな風に考えを巡らせていると、遙か遠く、かつて楽園があった場所は、ただの瓦礫の山へと戻っており、人々が争うような声が響いてくる。

幻覚を見ているのではなければ、おそらく本当に死んだのだろう。どこかの哲学者が言っていた戯れ言は、見事に現実となって目の前に横たわっている。

それはまるで悪臭を放つ腐乱死体。

犠牲者の名前は人類の夢と希望、そして未来。

楽園なんか無くてもいい。

神なんていなくてもいい。

むしろ死ねばいい。

もちろん何度もそう願っていた。

だが、一方ではそんな超自然的な力を持つ何かがある、気まぐれであつたとしても、助けてくれるかも知れないと、甘い予想が無かつ

たかと言われれば嘘になる。

人類なんて非力なものだ。

いざ文明を失ってみれば、包丁一つ作れやしなないし、スズメの羽も捕まえる事さえ難しい。

食べるものは食いつぶし、いつか無くなれば野垂れ死ぬ。

何とかなるさ。

明日があるさ。

そんな風に言ったところで、カネもコメもありやしない。

だが、唯一救われるかも知れない事がある。それは

「うう……何かあつたんですか……」

「だああーっ、もう！ 病人は寝てる！

また私達から逃げようなんてバカなことしたら、今度こそギッタギタにしてぶっ殺すからね！」

「ああ……ご……ごめんね……」

景人達の元を逃げ出したはずの、光樹を見つけることができたからだ。

だが、見つけた時には既に骨が露出しており、笑いながら泣きながら、ぼりぼりと乳白色のそれを彼は掻きむしっていた。

急いで応急処置は施したものの、ちゃんとした医療施設で輸血などをしなければ、あまり長くはないかも知れない。

多分、それは本人が一番よく分かっている事だろう。

一方で、そんな事を感じさせないようにと、睦美は笑顔で空元気を振りまいている。

こんな腐った世界で、どうしようもない掃き溜めで、まるでお遊戯みたいな恋物語が展開されているのは、見ていて滑稽でもあり、同時に胸に込み上げるものがある。

口では荒くれた事を言っつて、いくら現実主義者になろうとしても、かつての自分はただのサラリーマンだった。

優しさや思いやりという言葉の意味も、ちゃんと知っていたはずだった。

クリスと出会うまでは、そのまま抜け殻のようになって、死んでしまふかと思っていた。

そんな矢先だったからこそ、女神のように美しい彼女と、その容姿のままに優しい彼女に心を奪われ、恋に落ちた。

そして、恋は絶望を希望に変えようと必死にさせる。

死への衝動を生への欲望にしよう。

どんな薬よりも、彼の治療に役立ったと自分でも思っている。

そんなクリスは、今も横でじつと神に祈っている。

神は死んだと出ている空の方を見たはずなのに、彼女は祈りを捧げている。

その事が、どうにも違和感を感じて仕方がない。

「なあクリス、神は死んだんじゃないのか？ いや、嘘かも知れないが」

「神は、神の国は、常に私達の心の中にあるのです」

「まあ……そう言うだろうとは思ったが……」

彼女はなぜこれほど落ち着いているのだろう。

神は死んだなどというのは、どんな事実よりも重く肩にのし掛かる。

確かに彼女が元々信じていた神とは違っただろうが、それでもこの世界を支配していた神が死んだのだ。

もうちよっとうるたえてもいいような気もする。

横を見れば、相変わらず祈りを捧げるクリスがいる。

いったい何に祈っているのだろう。

死んだ神とは別に、自分達の信じる神はいて、その神が救ってくれると思っっているのだろうか。

「よいしょと。あー疲れたわ」

「谷村さんのところにいなくていいのか？」

隣に睦美が腰を下ろし、手に持っていた缶コーヒーを渡してくる。

別に喉は渴いていないが、たぶん何か話したい事があるのだろう。

ここは素直に受け取らないと、彼女のお小言を食らいそうだと思

い、黙ってそれを受け取る。

「今は苦しみ疲れて寝てる」

「大変だな、彼も」

「やっと同情してくれるようになっただね。少し、安心した」

缶コーヒーの栓を開け、一口飲みこむ。

「誰かを殺した事があるからって、別に心まで捨てたわけじゃない。だったら、軍人なんて全員が殺人鬼だ」

「そうだねえ」

睦美は小さく笑うと、仰向けに空を見上げる。

相変わらず人を嘲笑うような、神の遺言らしきものは出たままだ。

「一つだけ聞きたいことがある。けれど、怖くて聞けないんだよ」

「何をだ」

「神が死んだのに、病気は治らないのかな」

当たり前だろうと言いたいそうになって、ふと考える。

これは神が新たに作った病気だとするならば、死んだら治ってもいいと思ってもおかしくはない。

たいていはそれで終わりだろう。

だが、神が作ったものが死と同時に無くなるのならば、世界は無に返ってしまうのではないか？

もし神が創造したものが神が死んでも無くならないのなら、この恐ろしい病気は永遠に人々を脅かす、まるで史上最強の不発弾だ。

いや、不発弾ではない。

どちらかと言えば、放置された地雷原の中で、日々を生きるにも等しい。

「治らへんのやとしたら、谷村さんこのまま……」

「そうかも知れないな。だとしたら、どうする」

「どうしよう……」

「私だってクリスだって、君だって感染の可能性はある。きっと」
れからも、ずっとな」

「お医者さん。そう、医者を探そうよ！」

「骨が痒いなんて、謎の奇病をこの荒れ果てた世界でいきなり治せと?」

「治せなかったら、私がぶん殴つてでも治させてやる!」

「殴つたら医者が、突然に治療法をひらめくのか?」

「うるさいっ! 何だよあんた!

さつきから否定ばかりじゃないか!

少しくらい谷村さんの心配してくれたっていいじゃないか!」

「現実を無視してれば幸せになれるのか。めでたいな」

「じゃあどうしたらいいんだよ!」

「どうしようもない」

睦美は殴ろうとして拳を振り上げたが、その手は震えながら宙で止まった。

単に事実を否定して欲しいという、子供じみた欲求だった。

大丈夫だよ。

きっと治るよ。

なんとかなる。

問題ない。

根拠の無い励ましの言葉でも、今の自分を奮い立たせるためには必要だと思った。

「ぐあああああ つつつつ!」

「どうしたの?!」

光樹が寝ているビニールテントの中から叫び声上がる。

急いで駆け寄ると、そこにはくずおれるような姿勢のまま、かろうじて片腕で体を支えながら、包帯でぐるぐる巻きになっている、肉の削がれた方の手で、くり抜かれた眼球を転がす光樹の姿があった。

「なっ、何やってんのよバカあつ! 目だよ? 目! バカつ……バカあつ……」

「仕方なかったんだ。目がね、目の後ろ半分が痒くて痒くてさあ、ついきり抜いて、こっやってこりこりすると、すごく気持ち良くて。」

もし僕が今こうしていなくなったら、発狂しそうになってたよ。

ああ、とても最高の気分だ……はははっ……」

「腕の骨だけじゃなかったの？」

目玉まで痒いの？」

何でみんなに相談しなかったの？」

「相談したらどうなる？ 骨の次は目玉が痒い。」

言ったら治せるのかい？」

僕はどうせ死ぬしかないんだ。

神が死んで、だから何？」

僕の病気は治らないじゃないか。

神は死んでも病気は消えないじゃないか！

ね？ 僕はもう駄目なんだ！ 人生はこれで最終回だ！

ゲームオーバー！ 来世にご期待下さいって事だろう？

ハハッ、アハハハハハハッ」

「谷村アツ！ テメエ何あきらめてんだこの野郎ッ！」

「まったく、彼の言うとおりだろう」

「迫田ッ！」

振り返り、景人の胸ぐらを掴む睦美。

その目には明確な殺意がこもっている。

だが、彼はその目を逸らす事はない。

もう手遅れだ。

そんな現実を、誰もが受け止めねばならない時が来ている。

嫌でも猫の首に鈴を着ける役が必要なのだ。

「彼の言うとおりじゃないか。」

むしろ苦しみを長引かせてる、俺や君はいったい何だ？」

「でも、谷村さんは生きたいって思ってる！ 私もそう思ってるんだ

よ！」

「生きたいって言って生きられるなら、世界中に死人はいない」

「んだよオッ！ 何だよ、だから大人は嫌いなんだ！

私達の言うことなんて、ちっとも聞こうとしねえじゃねえか！

あんた達、大人なんだろ？

何とかしろよ！

何とかするよう考えろよ！」

「甘えるんじゃないぞ小娘？

地球温暖化も年金問題も、飢餓も戦争もみんな大人が悪いってか？

そうかも知れないが、大人だってみんなお前達と同じ青臭いガキの時代があつたんだ。

何百何千何万何億、数え切れないガキが大人になって、今があるんだよ」

「じゃあ大人になつたら、ガキの頃の事はみんな忘れちまうのかよ！」

「どうにもならない事があると、割り切れるようになった時、大人になるんだ」

「そんなのお前の理屈だ！

間違つた大人の理屈だ！

私は信じない！」

議論は平行線を辿る。

だが、そこに割つて入つたのは他ならぬ光樹だった。

「木戸さん……あんまりみんなを困らせちゃいけない……」

「ぐすつ……だつてえ……だつてこのままじゃ谷村さんが……うわ

ああああん！」

光樹は睦美を抱きしめ、その頭を撫でる。

血まみれで、片方の目が無く、腕の肉が削げている、人間としての心はまだ、温もりを求めている。

この子を泣かせたくない。

歯を食いしばって、耐えて、男の子だろうと自分を言い聞かせながら、精一杯のやせ我慢。

腕を切らずに残していたから、抱きしめてあげられる。

それだけでも、我慢した甲斐はあつたかも知れない。

もう少しだけ早く出会いたかった。

もっ少しだけ長く生きたかった。
そう思っても遅すぎる。

ああ、多分僕は、この女の子のことが好きなんだろう。
その事に気付くと、妙に顔が火照って、その事を悟られないように、できるだけゆっくりと体を離した。そして、思い切って言いよどんでいた言葉を口にする。

「ねえ木戸さん、僕を殺してよ」

「はあ？ 寝言は死んでから言えよ馬鹿野郎！」

「僕は真剣だよ」

「なおさら悪いわ！」

「あのね、僕は君が好きだ」

「へ？」

素っ頓狂な睦美の声。

そして、光樹は照れながら頭を掻く。

片方しかない目で睦美の事を見つめながら、彼はそっとその頬に手を触れた。

「こんな時に、こんな僕に言われたら、やっぱり迷惑かな」

「迷惑なんかじゃ……ないに決まってるだろう……」

「ふふふっ」

「なんだよ！ 何笑ってんだよ！」

「君もやっぱり女の子なんだなって。」

そう思うと、何だか嬉しくて、愛おしくてさ。

大好きだから、君に僕の最後を看取って欲しい。

このままじゃきっと、僕は痒みが全身に回りきって、発狂して死ぬだろう。

そんな姿を君に見られたくない。だから

「だ、だから何よ！」

「君に僕を殺して欲しいんだ」

「なんでそうなるのよーっ！」

「僕の人生に残された、最後に最大のイベントだから。」

それを大好きな君の手でして欲しいんだ」

分らない、光樹の言うことがさっぱり分らない。

けれども、それが彼なりの精一杯の愛情表現なんだという事だけは、何となくは分かる。

別に狂っているわけじゃなく、彼は極めて正気なのだろう。

なのに、なぜそんなことを自分に頼むのか。

死んだら全てが終わりなのに。

愛してるとさえ言えないのに。

「死んだら終わりなんだよ……この大馬鹿……私にそんなことできるわけ……」

「君にして欲しい。大好きな木戸さん、いや、睦美ちゃんにして欲しい」

「そんなの……ぐすつ……そんな……」

「残酷な事を言うんだな、君は」

「一生に一度のお願いってあるじゃないですか。」

僕は今、初めてそれを使うんです」

「さらつと言うじゃないか少年。」

でも、気持ちには理解できる。

やるかやらないかは彼女次第だが」

「死にたいなんて思わせないよ！」

大丈夫、もしあんたが狂いそうになるって言うなら、私が殴ってでも正気に戻してやるから！」

空元気で精一杯の明るい声。

そして胸を張り、どんと叩く。

だが、光樹は黙って首を振った。

どれほど強く殴られたとしても、その程度で正気が戻るのならば、今頃自分の両目は揃っているだろう。

腕の肉だつて削ぎ落としたりはしていないはず。

自分の認識は、あまりにも甘かったのだ。

痒いという事が痛いという事よりも、遙かに苦しい事だとは、今

まで想像したことさえ無かった。

痒いなんてのはせいぜい、腕や足などに小さく虫さされができて、その部分が痒みを帯びてくる。

仕方なくぼりぼりと搔くと、ぷっくりと小さくふくらみができて、さらにかゆくなってしまうという悪循環。

それが普通だ。

なのにこの痒みは、まるで心や魂にまで深く根を張っているようだ。

一度込み上げて来たら最後、強烈な痒みは少し搔いたくらいで消える事はない。

そして、搔けば搔くほど気持ちが悪くなるというおまけ付きだ。

目玉はくり抜いてからしばらくして、痒みが徐々におさまっていった。

だが、腕は相変わらず痛みながらも、痒みが治まる事は無い。

そして、それは徐々に範囲が広がっているようにさえ感じられる。こんな事がこれからも続く事があれば、いつか自分は発狂して死んでしまうだろう。

何が何だか分からない、ただ叫び掻きむしるだけの獣のようになり果ててまで、生を長らえる意味は無い。

こんな世界じゃ医者も医学も期待できない。

そもそも神が死んだと言うのに、病気は現に無くなるどころか、むしろ悪化している。

だからこそ、殺されたい。

愛する人に、たった一度しかしてもらえないこと。

彼女に手を掛けられて、死出の旅路に乗れるなら、僕の人生は本望だ。

「私も死ぬ。あんたが死んだら、私も死ぬんだからっ！」

「いつか人間は死ぬんだ。だから、君は生きて」

「嫌だ！」

「お願いだ。その代わり僕は、一足先に向こうで君を待ってるから」

「嫌だもん……ぐすつ……嫌だつて言ってるだろう馬鹿……」

泣いてもただをこねても、きつとこの流れは変わらない。

奇跡は起こらず、新しい神が現れる事もない。

それでも人は生きねばならず、命を絶つ者が出る。

クリスは全てを見届けた後、テントを出て、空に向かって祈りを捧げた。

何が正しいのか、何が間違っているのか、自分には分からない。

神のみぞ知る世界。

いや、神さえも知らない未来。

第28章 ガール・ミーツ・カミサマ

シアワセ、フシアワセ、ふわふわしてて赤くて重い。
雨の土曜日はフシアワセ。

外で遊ぼうにも気分はブルー、空はグレー。

テスト最終日の放課後はシアワセ。

みんなで町に繰り出そう！

きっとこれが普通の人の、普通のシアワセ、フシアワセ。

だから私はノートのすみっこに落書きをする。

シャーペンを使って、暇なときには色々と描き込むよ。

ああ、今日の私は少し元気で正気だね。

気分上々、心の予報は曇りのち晴れ。

それじゃ今回は私の自画像だ。

頑張る私。

ユカイな私。

かしこい私。

良い子の私。

でもね、結局一番好きなのは、ナチュラルメイクで髪も染めない、カラコンもしない、自然体のありのままの私だよ。

心の中で呟くだけでも、吐き気で死んじやいそう。

ブルーになる。

パパ、ママ、なんで私はガイジンなの？

日本人じゃない私は駄目なの？

ガイジンはモテモテ？

ああそうね。そうかも知れないね。

おかげさまでこの歳になるまでに三回はレイプされちゃって、経
験豊富な夏の魔女なんて二つ名も頂いたよ。

友達はいる。

親友もいる。

たぶんいる。

でも、その中に裏切ってる奴が絶対にいる。

どうせしつぽは掴ませない。

みんな賢くて、優しい人の振りをするのは天才的だから。

神様、ねえ神様。

私の願いを聞いて下さい。

世界は、とつてもくだらないんです。

地球は、もはや末期的なんです。

たぶん、すごく緊急事態です。

だから一度くらい、ドカーンと崩壊させちゃって、作り直した方がいいよ。

マジで。

一九九九年から出遅れたけれど、恐怖の大王とか、もう一度やってみたらどうかかな？

そんな風に願ってみたり、目をつぶって呪文を唱えて、ついでにアニメとかで見たおまじないを試してみたって、地球も世界も無くない。

無くならないけど死なないし、死ねないからくだらない会話で日常の時間を浪費して、いじめられても知らない振りして、いつも楽しい生活っぽく思ってみて、たまに悲しくて死にたくて、雨の日の真夜中に家の近所十分以内をうろついて、職務質問される前に帰ってくるだけ。

私はガイジン。

私はニンゲン。

私の回りはニホンジン。

私だって日本語喋るよ？

ほら見てよ。髪だってちゃんと黒く染めたし、カラーコンタクトも入れてみたんだから。

くるりと回れば、辺りに散るのは桜吹雪。

ねえねえ、どこから見てもヤマトナデシコって感じじゃないかな？

果てしなくオリエンタルでき、そんな私はチョージャパンっぽい。なのにみんなは私を馬鹿にする。

嘔吐きと言う。

と思つたら、カワイイとか言いながら近寄ってくる子もいるんだけど、表面だけならもういいよ。

疲れたよ。

帰れよ。

死ねよ。

うぜえよ。

影に回れば私のこと、ビッチだとかヤリマンだとか、言いたい放題言ってるんだから。

机に祖国へ帰れって書いたの、誰？

私の上履きに男性器のマークを描いたの、誰？

お弁当箱にいっぱい縫い針を入れたの、男子トイレに私の教科書捨てたの、カバンの中にレトルトカレーぶちまけたの、どこの誰なのよ。

私疲れちゃったよ。生きるの疲れちゃった。

助けてよ神様。

神様助けて。

心の底から願ってた。

叫んでた。

そしたらさ、ある日神様がやってきた。

放課後の教室、四階の窓をコンコンって叩く上品な雰囲気のおじいさん。

ペこりとお辞儀をしたから、私も演劇部みたいに大げさに頭を下げてみた。

どう考えても不審過ぎだけど、私の頭がおかしくなって、幻覚が見えてるだけかもね。

鬼も悪魔も、空飛ぶおじいさんも、何が見えたって怖くない。

まだ先だけれど、来るなら来いよ世紀末。

私は逃げも隠れもしないから、矢でも鉄砲でも持ってきやがれて感じたよ。

などと思いながら、まばたきしたり頬をつねったりしてみただけで、おじいさんは消えたりしない。

ただぼんやりと観察していると、窓を開けてと言いたそうに杖を当てるから、開けたら中に入ってきた。

「初めましてお嬢さん。

わしの名前は宗方成安、横浜で小さな貿易商を営んでおります」

さて、いきなり自己紹介されたけど、あまりにうさんくさいので黙っておくことにした。

すると、いつの間にか私の前には、湯気を立てるお茶と草餅が、ちゃんと二個ずつ用意されていた。

「立ち話もなんじゃし、食わぬか？」

「ケーキと紅茶の方が好きだけど、和菓子も嫌いじゃないんだよね」

毒入りかも知れないとか、そもそも知らない人にものをもらっちゃいけないとか、そんなことは知ったこっちゃない。

据え膳食わぬは女子高生の恥だよ、うん。

「ふあふあふあ、よく食べるのう」

「悪くないよ。ごちそうさま」

お茶を飲み干し、改めて目の前の老人と向き合う。

さて、取られるのは魂か。

それとも？

何でもいい。

さあ持っていつちやえ。

さよならワタシ。

グッバイ現世。

「お嬢さん、わしの事を悪魔と思つとるんじゃないかね」

「少なくとも神様じゃあないんじゃない？」

「その神様だとしたら、どうするかね」

「どうもしないよ。

祈りもしないし願いもしない。

私に天罰でも与えに来たなら、さっさと殺して空に帰ればいいんだし」

きびすを返して教室を出ようとした時、不意に出口が遠ざかる。

いつもの教室のはずなのに、地平線の果てまで黒板が、机の列が、ずっと続いている。

夕陽が照らす彼方には、外に出るためのドアがある。

のだらう、きつと。

「魔法？ 催眠術？

すごいね。拍手したら帰らせてくれる？

それが嫌なら殺してくれる？」

私はばちばちと小さく拍手を試みせる。

もちろん、少し小馬鹿にしてるだけ。

どっちにしたって興味無い。

テレビ局にでも売り込めばいい。

「少し話をしたいんじゃないよ。

お嬢さん、お茶をご馳走したのだから、少しくらいわしに付き合ってくれてもいいんじゃないかね」

「セクハラかな。嫌いんだけど、そういうの」

そう言いつつも、もはや逃げ場の無い私。

まるで鍵の掛けられたうさぎ小屋の中にいるうさぎみたい。

そう思いながら、いつものくせでカバンの中からノートを取りだし、どうでもいい落書きをする。

その時、世界はぐにやりと歪み、突然視界が遠ざかる。

あ、ヤバイ。

今はだめ。そう思ったらもう遅かった。

いらいらする私の心は曇りのち雨。

雨のち雨。

ゲリラ豪雨。

見たこともない言葉の字幕が世界を包み込み、パノラマとなつてぐるぐる回る。

聞いたことも無い音楽が流れ、知らない人達の言葉が響きわたる。泣き声、怒鳴り声、心の底から笑い声。

血、骨、肉、風、空、死、灰。

イメージしてみる。

イメージしてみよう。

飛ぶような感じ、吐き出すような感じで。

私の中がお祭り騒ぎ。

酒盛りをしたり会議をしたり、必死でそれを抑え込む。

あはははーっ！

笑えてきたよ！

おかしいよ！

畜生、またかよ！

私は私は良い子で良い子でありつづけようとしているんだよ！

分かってくれよ！

あいつが来る！ あいつが来る！

来なくていいのにあいつが来る！

「どうしましたかな。顔色が真っ青ですぞ」

「うつうつするさいわねっ。」

私が死のうが生きようが、私の勝手に自由でしょう」

「もう一杯、お茶でもどうじゃろう」

「はあっ……はあっ……いらないうてば……」

心臓の鼓動が一際高く鳴った時、世界は一度幕を下ろし、そして再び開かれる。

「こんにちは」

静謐の中に声が響く。

それは生まれ変わった私の声。もう一人の私。

「どうも、二度目の初めましてですか」

「はい。私の名前はクリス。クリスティ・カデルです」

第29章 ハート型の血溜まりの中で

それは例えば映画や、ドラマの中だけの話のように思っていた。

木戸睦美は頭を抱え、今置かれている状況をできるだけ冷静に整理しようとする。

平和だった時代、テレビのワイドショーを見ていて、通り魔や強盗、果ては痴情のもつれに至るまで、人殺しや暴力沙汰のニュースが流れると、軽く痛ましい気持ちを感じつつ、所詮は対岸の火事だと思いつつ日々を過ごしていた。

まともに生きていけば、人の死と遭遇するなどということは滅多に無い。

まして、殺したり殺されたりなどというのは、ヤクザと創作の世界の話だ。

不良生徒なんて言われたりもしたけど、成績が悪い子が通う学校というのは、自然とそういった奴らばかりが集まる。

そうすると、なめられないために自分自身もその色に染まらざるを得ないのだ。

セレブにはセレブの社交界があるように、底辺には底辺の、クズの世界がある。

授業はされていても聞く人間はいなくて、昼寝してる奴と漫画を読んでも奴と、そもそも学校に来ない奴の三種類しかない。

ケンカなんて日常茶飯事で、男達は私のような女の股ぐらを開かせる事と、バイクの事だけには熱心に頭を使うが、それ以外には一切何も考えない。

腐った世界の腐った私は、これからも腐った人生を歩み、腐りながら死んでいく。

一生懸命勉強したのに、頭にちっとも入ってこない。

取り残されて置いてかれて、私はこんな場所にいる。

これは頑張り切れなかった私が悪い。

分かつてる。

分かつてるけれど言いたい。

天は人の上に人を作り、人の下に人を作った。

あなたと私は違うんです。

私と姉も違うんです。

世間と私は違うんです。

私の居場所は違うんです。

一生懸命染まろうとしたのに、クズに私は染まれない。

カツアゲされる奴がいる。

パシリにされる奴がいる。

男達の肉便器にされる奴や、ストレス解消のサンドバッグにされ

る奴がいる。

怖い怖い怖い怖い。

私は怖くて仕方がない。

だから、精一杯強い振りをする。

でも、強い振りをしているだけの、私は虎の威を借る狐。

いいや、借りる虎の威さえも無いけど、借りている振りをしてい

るだけの狐。

頭に蘇るのは、ある日の現代文の授業で習ったとある歌人の短歌。

白鳥は 哀しからずや空の青 海のをにも染まずただよふ

それはまるで自分そのもの。

真面目にもなれず、不良にもなれず、流されていないような振りを
するだけ。

上っ面人間、嘔吐き、不器用、どうしようもない。

世間じゃあよく、不良の生徒を描いたドラマや映画なんかで、実
は落ちこぼれほど善良な心を持っているみたいに言われるけど、そ
んな奴らに私は言いたい。

お前ら、一度私の学校に来てみる。

底辺と言われる高校に来てみる。

いじめ？

そんな三文字で済ませられるような半端な世界じゃねえよ。

救われない人間と、救いようもない人間と、人間以下の何かが混ざり合って、ゴミみたいな日々を過ごしてるんだ。

だから、核戦争で世界が滅びるのも悪くない。

一瞬にして灰になれるなら、影だけを残して消え去れるなら、どれほど幸せな事だろう。

残された人間の事とか、幸せだった人達の事とか、私にはまるで関係ないじゃん。

どうしようもない世界だから、ゲーム機みたいにリセットボタンを押してしまおう。

アメリカ大統領、ロシア大統領、フランス大統領、イギリス首相、どこの誰でもいいからさあ、核を持つてる奴らが一発、どーんと火花を打ち上げて、それでお互い撃ち合いになって、地球は終わりでいいじゃない。

猫も杓子も男も女も、私も姉もあいつらも、みんなみーんな灰になって、それで終わりでもいいじゃない。

だから私は、灰になれなかった時の事なんて考えてなかった。

灰になれなかった時に、大切な人に巡り会うなんて思ったこともなかった。

運命なんて大嫌いだよ。

「君に辛いことをさせる、僕は最低な男だね」

「馬鹿野郎ッ！」

分かってるなら、分かっているなら生きろよッ！」

「君の前でこうやって、正常な僕を見せられる時間はもう限界が近いんだ。

いや、腕の肉が一部分無くて、目も片方しかない時点で、正常じゃないけれどさ。

それでも君にできるだけ、優しい僕でありたいと思ってる」

一秒が、一分が、永遠になればいい。

抱きしめられるその温もりに、ずっと包まれていたい。

なのに、そんな温もりを自ら手放さなければならぬ。

彼を殺さなければならぬ。

苦しみを長引かせる事そのものが、彼の幸せを奪う事になるからだ。

「ねえ木戸さん、約束して。僕が死んでも、君は生きるって」

「ああ、約束する」

「嬉しいよ」

片方しかない目で、血まみれの顔で、光樹は無垢な笑みを浮かべる。

そして、睦美の頬を流れる涙をそっと拭いた。

「じゃあ、そろそろお別れだね」

くるりと景人の方に振り返ると、彼は自分の武器である刀を睦美に手渡した。

さつき見知らぬ人の死体を使って、首を切り落とすための練習をした。

横一文字には切れないけれど、頭上から振り下ろせばなんとかなる。

狙った場所に振り下ろすのも、それほどに難しい事ではなかった。

後は実践に移すだけ。

光樹は廃車のボンネットの上に寝そべり、首を切りやすいよう仰向けの姿勢になる。

白い首筋が、どこか無機的で人形のように無機質に感じる。

世界が色褪せて、まるで自分は映画か何かを見ているようだ。睦美は思った。

そんな無責任とも言えるような空気の中に身を置くと、やれるような気がする。

大切な人だから、大好きな人だから、苦しみを長引かせるような失敗は許されない。

仰向けになつた光樹の顔を覗き込むと、彼女は自分から唇を重ねる。

「んっ……」

光樹はそつとまぶたを閉じ、彼女の唇に唇で応える。

見よう見まねの、漫画や小説で得た知識の口付け。

不器用で青臭いキス。

やがて体を離れた睦美は、少しだけ照れくさそうに、十代の少女が見せる純粋な笑顔を見せて光樹に言った。

「これ、私のファーストキスなんだ」

「僕もそうだよ」

「私、谷村さんが死んでもキスできるよ」

「愛されてるね、僕」

「そうだよ、あなたは私にすっごく愛されてる。」

世界で一番幸せなんだから」

「あはは、嬉しいな」

その笑顔がまぶしくて、とても胸が痛い。

とてもとても寂しい。

苦しい。

愛しい。

切ない。

だから笑って別れよう。

くるつと回って仲直り。

いい笑顔だよ、谷村さん。

そのままできて。

「バイバイ」

振り下ろした日本刀が地面に当たり、金属音が耳に響く。

赤いスプリングクラーみたいな血は辺りに吹き出して、落ちた首さえ染め上げる。

しばらくして、少し出が悪くなったところで光樹の首を持ち上げると、睦美は持っていたミネラルウォーターで彼の顔を丹念に洗い、

髪をタオルで拭く。

櫛で少しだけ髪型を整えると、それを抱きしめて彼女は泣いた。景人とクリスが見ているそばで、誰はばかることなく、子供のように泣きじゃくる。

やがて泣き疲れた睦美は、景人の方を見る。

「ねえ迫田さん、お願いがあるの」

「ああ」

「私の事も殺してください」

「分かった」

約束は破られるためにある。

秘密とは広まる運命にある。

死んだ光樹も、本当は薄々分かっていた。

分かっているとも言えない事がある。

吐かなければならない嘘がある。

光樹の髪を拭いたタオルで、刀に付いた血を拭き取るのを見て、

睦美も同じように光樹の横に寝転がる。

「優しいんだね、意外と」

「生きるって言う奴は、生きるための理由と未来を保証する必要がある。ある。」

それも分からず闇雲に、命だ未来だと言う奴は信用できない。

少なくとも俺はそう思う」

「私も同意だね」

「珍しく意見が合ったな」

「今までお二人の邪魔してごめんなさい」

「俺達だって、暇つぶしにはなったよ」

「クリスさん、私達の方まで幸せになってね」

「はい。ありがとうございます」

覚悟という言葉が、この場に居合わせた皆の胸の中にある。

精一杯生きて、知って、失って、見つけて、死んでいく。

もう手遅れという頃になって分かり合い、残り少ない時間を分か

ち合う。

誰もが優しく不器用で、そんな人達が生き残っていけば、そのうち世界はまた元に戻るだろう。

その頃にまた会えるといいね。

空の上で会えるといいね。

私、今なら少しだけ素直になれた。

「二人とも素敵だったよ。」

ありがとう！」

「さよならだ」

その言葉と共に、今度は景人が刀を振り下ろす。

まだ新しい血だまりの上に、睦美の頭が転がる。

二人の血が混じり合って、大きな赤い水たまりができた。

勢い良く噴き出す血が治まったあと、さつき睦美がしたように、

彼女の頭を水で洗い、二人の首を並べる。

「安らかで幸せそうな顔をしています」

「ああ、そうだな」

「私達も死ぬときは、こんな風にありたいですね」

「まだ当分先の話だ」

クリスを抱き寄せ、その温もりを全身で確かめようと肌を寄せる。

地獄の中で生きているのと、あるのか無いのか分からない死後の

世界に旅立つこと。

どちらが幸せなのか分からないと思いつながら、景人はクリスに頬を寄せる。

分かっていることは、まだ何も終わらないということだけだった。

第30章 両手からこぼれ落ちていく

光樹が死に、後を追うように睦美が死んだ。

今が平和な時代だったならば、こんな自殺に手を貸すような事も無かっただろう。

いや、それこそ普通の偽善者面をして、命の大切さなど説いたかも知れない。

だが、今は新世紀が始まってすぐに訪れた世紀末。

そして愛する人を失った時、生きる希望はどれほど簡単に崩壊してしまう事だろう。

いくら死ぬな、生きろと連呼したところで、到底無理に違いない。止める権利など、誰にもあるはずないのだから。

せめて自分にできるのは、苦しまないように殺してやること。

二人があの世界で再会して、幸多かれと祈ること。

あまり喋らないクリスと二人きりに戻って、世界は少し広く感じる。

今さらだが、光樹も睦美も悪い奴らじゃなかったと思うと、少しだけ自分の態度がきつかったことに、景人は軽い後悔を憶える。

楽園が無くなって、神が死んで、それでも自分達は生きていかざるを得ないのだ。

神無き世界に産み落とされ、豊かだった過去に取り残されてもお、人々はもがきながらも死を選ぶ事はない。

これからはもう少し、人に優しくしてもいいかな。

そんな風に考えながら、簡単ではあるが小さな墓を作って二人を埋葬した。

あまり体力を使う事はしたくなかったが、そんな心の余裕が出てくる程度に、自分の中にも秩序が戻りつつあることが、少し嬉しくもある。

「クリス、君はもっと泣いていいんだぞ」

「はい」

「君はいつも冷静だな。羨ましいよ」

「そうでしょうか」

いつもと同じ表情だが、ほんの少しだけ、悲しそうにクリスマスは俯く。

彼女の笑顔は、どこか作り物のように感じてしまう事がある。

時に、その優しさや祈る姿さえ、人形を見ているような感覚に陥り、思わず自分でも頭を振ってしまう程だ。

だが、それ故に彼女は美しい。

自然が造り得ない、或いは人では達し得ない境地に達した何かのような彼女の凛とした心の芯は、こんな世界に生きる中で、安心感を与えてくれる。

だが、もう一度二人きりになったのに、なぜか心はぽっかりと穴が空いたようで、どこか虚しい。

あんなうるさい奴らでも、死んだらいけないんだ。

何度か人を手に掛けたはずなのに、今さら命がどうとか考える。

とても皮肉な偽善だ。

ぼんやりと膝を抱え、空の向こうを見ていると、クリスマスも横に座った。

例えこの世界が嘘だとしても、自分自身さえ嘘だとしても、彼女の温もりは現実だ。

だから自分は、そのために生きる。

そう誓ったはずだ。

肩を寄せるクリスマスを抱き寄せ、軽く溜息を吐いた。

「寂しそうですね」

「そんなことはない」

「強がらなきゃいけないとか、思い込んでませんか？」

「そんなことはない……」

分かりやすすぎる嘘にも、彼女は何も言わない。

まるで子供のような強がり。

人は一人だけで生きていけない。

だからこうして言葉を交わして、泣いたり笑ったり、怒ったり喜んだり、愛し合ったりしている。

見知らぬ誰かと出会って、分かり合って、反発し合って、そしてまた分かり合ったり、そのまま分かり合えなかったり。

これから自分は、隣に座っている愛する人を守らねばならない。何かあるうとも、例え世界を敵に回したとしても。

「ねえ景人さん、もし私が嘘を吐いていたとしたら、怒りますか？」

「別に。今さら何が真実だとか、こだわるのも馬鹿馬鹿しい」

「私が人間じゃないとしても、愛してくれますか？」

「君が悪魔だろうと天使だろうと、俺のそばにいてくれるならそれでいい」

「私、幸せです」

「これからもっと幸せになるんだ。二人で一緒に」

そう言って、口付けを交わす。

甘やかなその一時、唇と唇の間が銀色の細い糸で繋がる。

この大切な人を守らなければ。

ぎゅっと抱きしめ、頬をすり寄せる。

まるで思春期の中学生のように、胸がドキドキする。

馬鹿馬鹿しいが、これが幸せというものかも知れない。そう、初めて具体的に思えた。

恋なんてものは、所詮はテレビやラジオから流れる歌の中のものだと思っていた。

そんな自分がこんな状況で目の青い金髪の女性に心を奪われているのだから、運命とは皮肉なものだ。

もし戦争が無かったら、彼女とは出会わなかっただろう。

それこそ神のお導き、というやつかも知れない。

つまらない冗談だな。

そう思い、自分でも苦笑する。

「ねえ景人さん。あなたに言わねばならないことがあります」

「何かな」

「私のお腹に、赤ちゃんがいます」

「え？」

「妊娠検査キットが落ちていたんです。つい、好奇心で使ってしまった」

「俺と……クリスの間に子供が……？」

「はい」

そう言つて、彼女は初めて人間らしい、照れた笑みを浮かべる。それがあまりにも嬉しくて、美しく、景人は立ち上がると笑い声を上げた。

見るよ神！ 俺は生きる。生き抜いてやる。

生きて生きて、二人の間にできた子供を、立派に育てあげてやるんだ！

空に向かつて誓つたその瞬間、耳をつんざく一発の銃声が辺りに響いた。

右腹に焼けるような痛みが走る。

何が起こつたか分からず、その場に膝を突いてうずくまつた。

「やつたか？」

「まだだ。まだ死んでない」

男達のくぐもつた声が聞こえる。

殺気のコもつた目で辺りを舐めるように見回すと、隠れる事もせず、堂々とした足取りで白髪混じりの男達が二人、車の影から出てくると、こちらに近付いてくる。

だが、その二人の姿に違和感がある。

よく見ると、一人は腕が片方しかない。

そしてもう一人は、耳が一つと鼻が無いのだ。

どちらの顔も血の気が失せて、どこか乳白色の病的な肌の色をしている。

ああ、まるでバケモノだ。

ひょっとしたら自分も、今こんな風になっているのだろうか。

よく考えてみれば、戦争が終わってからこちら、ずっと鏡を見たことが無い。

痛みに遠のきそうになる意識を、唇を噛みしめ、出てきた自分の血で喉を潤しながらも考える。

違う。

自分はこんな奴らじゃない。

こんなバケモノになり果てちゃいない。

「すまないねお兄さん。痛かったらう？ でも、俺達にも事情があるんだ。分かってくれ」

へらへらとして、どこか掴みよのない、男達は両生類のような笑みを浮かべる。

二人の手には銃が握られている。

「ご丁寧にも一人一挺だ。」

それに比べて、こちらは身を守るために穴あき包丁が一本あるだけ。

武器としては限りなく心許ない。

油断していたせいで、日本刀からは距離が離れた場所にいる。

さあてどうしよう、この暴漢達を。

人の土手っ腹に風穴を空けておきながら、二人は極めて冷静で取り乱した様子もない。おそらくは、三千万円争奪戦の時に人を何度か殺したのだろう。

腹が疼くたびに込み上げる怒りはあるが、たった今撃たれたばかりでは形成が不利だ。

もし相手が物取りだったら、そこにある食糧さえ渡せば済む事だ。「すまないって何だ……食い物と水ならそこにある……とっとと持つてけよ……」

「いや、食べ物や水なら、まだまだその辺のコンビニやスーパー跡を探せばそれなりに手に入る。」

お前達もそうだろうが、こちらもそれほど困っちゃいないんだ」
男達の目は、クリスの方に向いている。

だが、彼女は逃げる事もせず、ただじつと目を閉じて、神に祈りを捧げている。

「クリス……逃げる……」

「クリスって言うのか、そこのお嬢さん」

「馬鹿っ！ 早く逃げろ！」

「ここは俺が何とかする！」

その時、再び銃声が辺りに響き渡った。

今度は弾が右脇腹をかすめて、肉が一部そげ落ちる。

「ぐああっ！」

「お兄さん、少し黙っててくださいませんか」

「クリス……馬鹿野郎ッ……早く……逃げろ……」

「正確に言うとなあ、その女にも用は無いだ。」

ただ、その腹ん中にある、お子さまに用事があるんだよ」

何を言っているのか分からない。

自分の気が動転しているからだろうか。

彼女の妊娠を知ったのは、つい今し方の事で、それも二人だけの会話だ。

盗み聞きするにしても、彼らの位置からは聞こえなかったはずだ。

「おい、何の事がさっぱり分からないんだが」

わざと知らない振りをしてみる。

何かの間違いであって欲しかった。

「妊娠してるんだろ？」

そのお腹の中に子供がいる。

なあ、そうだろうか？」

「待て……何をしようとしている……」

「見たところ、まだ腹は膨らんでないようだし。」

かなり小さな胎児の状態なんだろうな。

この場でいきなり産んでくれるならいいんだが、そうもいかないだろう」

「お前ら……ちょっと……待て……」

クリスも武器をもっている。

だが、それはその辺で売られているだろう、かなり錆びたカッタナイフだけだ。

銃とやり合えば結果は目に見えている。

しかも、彼女はそれを構えようともしない。

じりじりと距離を詰めていく男達に対し、クリスはまるで人形のように、目を閉じたまま祈っている。

諦めたのか？

終わりなのか？

ああ、そんなことは俺が許さない。

許せるはずがない。

「痒いんだよ。そのお腹の中の子供が、俺達の痒みの原因なんだ」

「痒いなら自分の体を掻けばいいだろう？

何を言ってる？ 頭がおかしいのか？」

「俺は腕が痒かった。だから切り落とした。

こいつは耳と鼻が痒くて、切り落としたらほとんど言葉が喋れなくなった。

だが、これでお互いに痒みは治まった。

そうしたら、今度はな、全身が痒くて仕方がないのに、掻いても気持ち良くならねえんだよ。

俺は困ったよ。

どんなに引っかいても掻きむしっても、てんで治まらないんだからな。

さすがに自殺は嫌だ。

だが、この痒みに付き合っていたら、あと数時間もしたら発狂しちゃまいそつだ。

そして、気が付くと隣にいた相方も同じように痒みが再発していたよ。

やがて分かったんだ。

痒みの原因は、まるで別の場所にあると。

不思議なことだ。

自分の体の痒みの原因が、自分達じゃないところにあるってんだからな……

見えない何かに導かれるように、痒みが指す方へ。

ただ本能が赴くままに、まるで夢遊病みたいに俺達は歩き続けた。そして今、見つけたんだ。

この女の腹の中にある、胎児が痒みの原因だってな」

ああ、痒みからついに頭がおかしくなったのか。

哀れだ。

だが、同情したところで病気は治らない。

そして、彼らは今、俺とクリスの明確な敵だ。

話を聞きながら、自分も護身用に隠していた包丁を手に持つ。

相手に見えないように力を込めながら、隙を窺いつつ相手の話に聞き入る振りをする。

「胎児が原因なんて馬鹿げてるだろう？」

俺も本気でそう思う。

でもなあ、事実だから仕方がないんだ。

科学だとか医学だとか関係無い。

だが、この女の腹ん中にいる奴が、俺達の地獄の原因なんだ。

本当は話してるのだって辛い。

きつい。

叫びたい。

痒くて痒くて痒くて痒くて痒くて痒くて……お前に分かるか？

なあ分かるか？

お前が女とちちくり合おうと、こちとら知ったこっちゃんえけどな。

俺達の事情も分かってくれよ！ な？

あんたにも良心つてもものがあるだろう？

俺も同じだ。

殺したりしねえから、ちょっと腹を蹴らせてくれ。

もはや足に力が入らず、男達とは反対側に倒れ込む。だが、その頭を柔らかな感触が包み込んだ。クリスが覗き込んでいる。

少しだけ悲しそうな顔をして、しかし涙は流さない。ああ、まるで人形みたいだ。

相変わらず綺麗だよ、クリス。

君は、綺麗だ。

「景人さん、何で私を守ったの」

「当たり前だろう……馬鹿な質問するなよ……」

「愛してる。私も言葉では言えるのに、まだよく分からないんです」

「何を言ってるんだ……？」

「でも、今少しだけ分かった気がします。

私も、景人さんのこと、愛してます」

人工的な彼女の顔が、また少しだけ人間らしく見える。

それが何だかとても嬉しくて、ふっと心の力が抜ける。

「あはは……出会った時からそうだったが……最後までよく分からない女だな……でも、そんなクリスが俺は好きだよ……愛してる……」

「……」
「ありがとう、景人さん」

泥で汚れたその顔を、白いハンカチでそっと拭くと。

まだ温かい景人の唇にキスをする。

自分から初めて、そうしたいと思えた。

不思議だけれども、嫌な気分じゃない。

さようなら、大切な景人さん。

ありがとう、抱えきれない思い出を。

また会えるといい。

また会いたい

人は死んだらどうなるのだろう。

私は死んだら、どうなるのだろう。

第31章 まちがいさがし

神様は一人じゃなくてもいい。

もつと一杯いてもいい。助けてくれるならなんでもいい。

だからね神様、あんなのじゃなくて、もつとまともで人類を助けてくれる奴を一人寄越してくれないかな？

その神様は万能で、このサバイバルゲームも無かったことにしてくれて、戦争も無かったことにしてくれて、生き返った人類には思いつきり説教をするんだけど、もうするなよって言って、笑って許してくれる。

まるでお父さんみたいな神様。

まずは手始めに、こんな蚊帳をつり下げて、私がニューナンプとかわられるリボルバー式拳銃を持たないでも、お留守番ができるよな仕組みが一番いいんだけどね。

君島夏子は殺虫剤でしつこいくらいに消毒された蚊帳の中で、ぼんやりと網目の向こうに見える世界を見つめていた。

結局楽園には入ることができず、大きなスーパーがあつたらしき跡地で蚊帳を見つけ、仁と藤次と共に、移動することもできずに悶々と過ごしていた。

三木原毅がいなくなったという変化はあるが、捜しに行かない方がいいということ、見事に仁と意見が一致した。

藤次はハツコイエンペラーを助けてと強く哀願したが、現実を直視すれば、いくら子供のお願でも、こればかりは聞くことができない。

藤次もそれを洪々理解したようだった。

そして、蚊と物取りに怯えるままに日々を過ごしていると、今度は神が死んだという、あのふざけた影法師のような空に浮かぶメッセージが流れた。

「んなもん、信じて何か良いことありますかって言われると、答え

はノーなんだよね」

寝転がって空を見上げる。

もはやあのメッセージも消えて、今日もまた、血のように濃い夕暮れが迫ってきている。

逢魔ヶ時と言っけれど、あの神様が現れた時もこんな夕暮れだった。

そういえばあの声、どこかで聞き覚えがある気がする。

それがまるで、喉の奥に刺さった魚の骨のように、微妙に気になる。

どこで聞いた？

近所のよく買い物するスーパーの店員さん？

以前振られた彼氏の妹？

従姉妹の弓恵？

何度考えても、良い回答が浮かんでこない。

別に誰だったか思い出せたからと言って、今さらどうでも良いことのはずなのに、なぜかそれが、とても大切な事の気がする。

うんうん唸りながら寝返りを打つと、少し遠くから、こちらに向かって歩いてくる人影がある。

まだかなり遠いが、全身がべつとりと乾いた血らしきもので、赤黒く染まっている。

仁が帰ってくる気配も無く、ここは自分一人でなんとかするしかないらしい。

やれやれ、神がいてもいなくても、救われない私は、きつと最悪なのだろう。

「練習がてら二発撃ったけど、全然思ったところに当たらないんだよね……」

護身用のニューナンプを握りしめ、体を起こして相手を待つ。

だが、そこにやってきたのは少しだけ見慣れた少女だった。

いや、少女と言うにはあまりにも大人びた風貌を持っている

「クリス？」

「ああ、先生お久しぶりです」

そう言って、不肖の教え子はぺこりと丁寧に頭を下げる。

夏子がかつて、高校の教師をしていた。

都内の進学校と言うにはギリギリといったレベルの学校で、彼女はクラスの中でも唯一のドイツ人としても知られていた。

最初の頃は校内でも有名な、綺麗な金髪で碧眼のとても美しい少女だった。

だが、三年生になった時を境にして、彼女は髪を黒く染め、茶色に近い黒のカラーコンタクトをして学校に来るようになった。

校則としては間違っていないし、教師達も文句を言うわけではなかったが、誰もがもつたいないと首を傾げたものだ。

そんな彼女が金髪碧眼に戻っている。

それだけではなく、自分を「先生」と呼んだ。

彼女はいつも、ファーストネームで「夏子」と自分を呼び捨てにする。

言葉遣いについても、噂に聞く「絶滅寸前の大和撫子」とはほど遠い、渋谷のセンター街辺りをうろつく、典型的なギャル系の女の子だった。

昔、ちらりと金髪で碧眼の後ろ姿を見たことはあるものの、ただそれだけで、印象には乏しい。

だが、その声、その顔立ちはまさに、自分の教え子であるクリステイ・カデルだとすぐに分かった。

「髪、いつの間に金色に戻したの？ カラーコンタクトも外したみたいだけど」

「ありのままの私の方が、私らしいと思いませんか先生？」

「まあ……良いこと言ってるんだけど……何で血まみれなのかしら……」

手に持った銃を離す事はできそうにない。

こんな格好でいきなりやってきて、信頼しろと言われても困るのだ。

そもそも、まるで修道女を思わせるような不思議な服装も、いったいどこで手に入れたのだろうか。

「コスプレというやつだろうか？」

それにしたつて、こんなご時世にそんな余裕は無いはずだ。

「先生、私が怖いですか？」

唐突に彼女は尋ねる。

だが、夏子もそれに素直に答える。

「悪いけど、そうね。今がどんな時代で、どんな状況なのかは、あなたもよく分かってるでしょう？」

かつての教え子だからつて、背中から刺されないと限らないわ。特にその血まみれの服装。

「誰か殺したりしたんじゃない？」

「この血は、大切な人から流れたものなのです」

「大切な人？」

「こんな時代にこんな私を、心から愛してくれた人です。」

私はずっと忘れません。

「忘れたくないと思っています」

「はあ、そりゃあロマンチックなことねえ。」

で、今さら私に何か用？」

「用というわけではないのですが、ただあてどもなく歩いていたところ、先生のお姿を拝見したのでつい、声を掛けた次第です」

にこにことして、慇懃無礼な言葉を吐く。

どこか抜けた感じもするが、演技という風にも感じられない。

よく分からないが、誰でも彼でも疑うというのも、確かに良くないのかも知れない。

そもそも自分に危害をくわえたいのなら、あんなに堂々と真正面からやってくるとも思えない。

食糧や水ならまだそこから手に入るし、三千万円の件が無い今、女一人で物取りをする理由も無い。

かつての生徒に対して、あまり警戒するのも失礼だろうか？

いつの間にか、心にそんな余裕も芽生えてきた。

「一人ぼっちでここまで来たの？」

「元は何人かの人と助け合っていたのですが、気が付けば自殺していたり、殺しあったり、殺されたりしました」

「本当に？ あなたが殺したんじゃないの？」

「信じていただけなくても、この服装では仕方ないですね」

そう言つて、クリスは血にまみれた自分の腕を眺めて、少しだけ悲しそうに俯いた。

だが、あまり表情に変化は見られない。

どこか人形のような、作り物めいた雰囲気をしている。

彼女が悪いわけではないのだろうけれど、何かとても嫌な違和感を感じる。

その原因が何なのか考えていると、不意に腹の鳴る音がした。

自分ではない。ちらりと目の前の元教え子に視線を戻す。

だが、彼女はしれっとして、照れもせずはこちらを見ている。

眞実は常に一つ。犯人は目の前にいる。

「何か聞こえたわね」

「そうですね」

「ひょっとして、お腹空いてる？」

「おそらくですが、そうかと思えます」

「いや、おそらくって……まあいいわ。こっちおいで。別に食べ物にはまだ困ってないから、お菓子とか缶詰しか無いけど、食べていいよ」

その言葉に、彼女はなぜかきょとんとした顔をする。

自分が食糧をあげると言った事が、それほど珍しかっただろうか。

その時ふと、最近鏡を見ていなかった事を思い出す。

ぎすぎすしたこの場所で、常に自分の事ばかり考えてきたせいで、

案外鬼のような形相になっていたのかも知れない。

だとすれば、こんな状況とは言え、何だか悲しいことだ。

仮にも自分には、教師としての誇りも職業意識もある。

こんな状況であつたとしても、自分は教職者であり、教育者なのだ。

それは夏子にとって、今自分が人間であることの証明にも等しい。「先生、ありがとうございます」

「ん？ ああ、いや、別に礼なんていいんだけどね」

「私、先生に嫌われているかと思つていました」

やはり、彼女の顔はどこか作り物じみた笑顔だ。

けれども、久しぶりに感謝された事が素直に嬉しく、また照れくさくもあつた。

まあ入つてと言いなながら蚊帳を開けると、クリスは向かい合つて座つた。

「しつかしまあ、そんなに血まみれだと大変でしょう。」

ここ、スーパー跡だから、服とかも探せばあると思つし、一緒に探そうか」

「よろしいのですか？」

「別にいいんだけど、なんで態度や言葉遣いが馬鹿丁寧になつてるのかな。」

戦時中にどこか頭でも打つた？

それとも、何か変なモンでも食べた？」

「頭を打つた、変なものを食べた、ですか。」

確かにその通りかも知れませんか」

どこか作り物じみた笑みを浮かべ、彼女はころころと笑つた。

不愉快というわけじゃないのに、なぜか違和感はつのである一方だ。

なぜこんな気持ちになるのだろうか？

外見？

しゃべり方？

それらが今までの彼女と違うから？

いや、そんなことはないはずだ。

もつと言いようのない、どんよりとした不快感。

不気味さと言えばいいだろうか。

原因も分からないまま、世間話を交わしつつ考えていた時、はたと気が付いてクリスの顔をじっと覗き込む。

「どうしました先生？」

さっきから、私の顔に何か付いてますか？」

「あははは、久しぶりに教え子の顔を見たからさ。

嬉しくてつい気になっちゃって」

嫌な脂汗が背中をつたう。

乾いた笑い声で返事をし、やや強引な理由でごまかした。

違和感の理由が、今やっとはつきり分かったのだ。

クリステイ・カデル、通称クリス。

彼女は最初に出会った時から、一度としてまばたきをしていない

第32章 ハツコイエンペラーの終焉

「くしゅん」

「大丈夫か藤次？ あつちで待ってても良かったんだぞ」

「ううん。僕のためのお薬なんだもん、自分で探さなきゃ駄目だよ」
昨日の夜、少し寒かったというのもあって、藤次が風邪気味になっ
っている。

くしゃみや鼻水の症状があり、心なしか熱っぽいような感じもある。

本来であれば、夏子のところで留守番させておく方がよいのだが、
足手まといになりたくない。

僕は男の子だとあまりにも強く主張したために、根負けした仁が、
風邪薬を探しにドラッグストアを漁りに行く際に、藤次も同行して
一緒に探す事になったのだ。

女性を一人で残すのも気が引けたが、一応拳銃は渡してあるし、
二発ほど練習に撃ち方を教えた。

食糧事情はまだ急を要する程悪化していない事を考えれば、たい
ていは威嚇射撃で何とかなる。

いや、暴漢の一人や二人来たところで、拳銃がある以上、自分で
何とかしてもらわなければ困るのだ。

そうでなくとも、藤次という幼いパートナーの存在も、自分にと
っては足枷となっている。

こんなご時世であれば、女子供など足手まといもいいところだ。
昔の自分であれば、何のためらいも無く射殺していた事だろう。

だが、お互いに極限状況の中で過ごすうちに、仁もまた、自分の
中に人間らしい感情が芽生えている事を自分でも感じ、同時に戸惑
いを憶えていた。

人間らしい感情、それは行動に対して「ぶれ」を起こす。

その「ぶれ」は思考を濁し、行動を遅らせ、場合によっては死に

も繋がりがねない。

何かを守るうとする時、人は強くなるというのが映画やアニメの鉄則だが、そんなものは現実世界では通用しない。

守るものなど邪魔なだけで、殺し屋も薬の売人も、何らかの事情で逃避行などをしていた場合、女連れであれば、考えられないほど愚かな死に方をする事が多い。

そして、仕事を終えた後に酒を酌み交わしながら、

「アイツがビリー・ザ・キッドなら、俺はクリント・イーストウッドだ」

などと皮肉を言い、笑うのだ。

およそ年に一度は必ずある。

馬鹿な者、愚かな者がこの世界から退場する時、そいつらがへまをしたり裏切る事で、表の世界とのバランスを崩したりする可能性が減る。

それはとても喜ばしい出来事であり、そんな時は一際酒が旨い。だが、今自分はまさに、そんな馬鹿で愚かな事に手を貸している。まさにビリー・ザ・キッドを気取っているだけの、三流ピエロが舞台上に立っている状態だ。

思わず苦笑が漏れるものの、たまにはこんな家族ごっこもいいかも知れない。

そんな風に思えるようになってきたのだから、自分の中の変化はかなり大きい。

「ねえ陣内さん。ブルーオーシャンとハツコイエンペラー、元気がな」

「お前はまだアイツらのことを心配してるのか。さっさと忘れて、自分の体の事だけ考えろって言ってるだろう」

「でも、陣内さんも本当は寂しいよね」

「別に」

「本当に？」

「当然だ」

「そっかあ……」

寂しそうに俯く藤次。

実際のところ、かつて秋葉原でお互いに頂点を目指して争った戦友達が、こんな事件のせいで死ぬというのは悲しい。

だが、現実世界で小悪党だったり、既に感染してしまったりした人間達と行動を共にすることはできない。

せめて彼らが苦しまずに死に、冥福を祈ってやる事が、自分ができる最大限の手向けというものだろう。

「僕ね、もし今が平和な世界だったら、ロンドンキャットとブルーオーシャンとハツコイエンペラーと僕と、四人で対戦したかったな」

「そうだな。あいつらは素晴らしいプレイヤーだった」

「ぐすっ、ごめんね陣内さん。僕が子供で」

「子供ってのはな、思ったことをつい口にしちまうのが仕事みたいなもんだ。」

ついでに、きれい事を言ってみたり、正論を振りかざしたり、理想を追い求めたりもそう。

お前は何も悪くない。

むしろ、今その気持ちを大切に、これから生きていくんだ。

そしてこの国がもう一度立ち直って、また秋葉原みたいな電脳都市ができたなら、そこにもう一度ゲームセンターを作ろう。

そしたら、ブルーオーシャンもハツコイエンペラーも、また遊びに来てくれるかも知れない」

「来て……くれるかなあ……」

「ここにいる俺は誰だ？」

「陣内さん」

「違うだろう？俺の名は」

そこで言葉を切る仁。

視線を送られた藤次は、最初何が言いたいか分からなかったが、すぐにはっとする。

「ロンドンキャット……えへへ……かつこいいなあ」

「今度は藤次、お前がでつかくなるんだ。

そして、秋葉原ゴツドスリーではなく、秋葉原四天王と呼ばれるようになろうじゃないか」

「なりたくないあ。くしゅんっ」

「おっと、薬を探さなきゃいけないな。

ぼやぼやしていると日が暮れちまいかねない」

「はい！ 頑張ります！」

「お前は本当にいい返事をするなあ」

「返事だけじゃないよ。頑張るよ！」

「よし、頑張ろう！」

それから一時間ほど、ドラッグストア跡を色々と漁ってみたが、出てくるのは痔の薬やら口内炎の薬やら、本当に関係の無いものばかりだ。

だが、かゆみ止めも出てきたので、縁起でもないとは思いつつも、仁はそれをポケットにしまった。

「藤次、そっちはあったか？」

「ビタミン剤と栄養補助食品、それにダイエットの薬しかないよ」

「ダイエットか。はははっ、戦前なら君島さんにプレゼントしてやりゃあ喜んだだろうな」

「ビタミン剤と栄養補助食品はいるよね」

「ああ。他にも便利そうなものがあつたら取っておけ」

背中を向けて作業を再開したとき、ぺちっ和小さい音がする。

振り返ると、藤次が手のひらを覗き込んでいた。

その手のひらの上には、小さな黒い点のようになった蚊が死んでいる。

理由はよく分からないが、神が死んだ以上、もうあんなふざけた病気も無いだろう。

だが、変な伝染病が流行ってもおかしくはない衛生状態だ。

虫除けスプレーや蚊取り線香もできるだけ確保しておいた方がいいかも知れない。

「かまれちゃった」

「あまり搔くんじやないぞ。搔いたらよけい痒くなるからな。かゆみ止めを見つけたら、とっといてやるよ」

「お願いします」

もう一度前を見ると、遠くからゾンビのようなたまたとした足取りで、男が一人近付いてくる。

映画やドラマで見るとような山高帽を頭に被り、シャツも破けてぼろぼろになり、ところどころに血が付いているが、その姿に懐かしさを感じ、思わず手を振った。

「三木原さん、生きてたのか！」

「え？ ハツコイエンペラー？」

こちらに気が付くと、三木原は顔を少し上を向かせて、にたりと歯を見せて笑った。

その姿は痛ましく、同時に心の中に言いようもないもやもやを感じさせる。

自分は一度、彼を追放したのだ。神が死んだ今となっては、あの病気も恐らくは治ったのかも知れない。

少なくとも、そうでなければ姿は現さないはずだ。

だが、もしも病気が治っていないままだったなら？

想像はしたくないが、その時は再びご退場願うしかない。

最悪の場合も想定して、胸の内ポケットには、今もグロックがあることを改めて確認する。

「ここここ、こんにちは陣内さん、藤次くん。神、死んだんだってね？ あはははーっ」

目がぎよるぎよると前に出っ張って、口から涎が垂れている。

手も薬物中毒のように震えていて、時々奇妙な笑い声が漏れる。

ああ、駄目だ。色々な意味で駄目だ。

その笑顔そのものが犯罪だ。

殺すとかそれ以前に、さっさとこいつの視界から消えなければならぬ。

藤次の教育上もよろしくないだろう。

「こわいよお……」

露骨すぎる変化に、さすがの藤次も仁の後ろに回り込む。

さてどうするかな。

殺すか逃げるか。

できれば穏便に済ませたいところだ。

「こわい？ こわいなあ。

あはははっ！

こわいこわいこわーい！」

「元気そうで何よりだな。

それじゃ、俺と藤次は忙しいから、失礼させてもらう」

「ちよっと待つてくださいよ、少しばかり久々の再会じゃないですか」

「いや、忙しいんだよ。悪いな」

「良いことを教えてあげますから、もう少しだけここにいませんか？」

「いらん。興味が無い」

「神が死んだはずなのに、この病気が治らない」

肩に置かれた手を強引にふりほどき、藤次の手を引いてその場を離れようとした時に、毅はほそりと呟いた。

その言葉は、あまりにも心に重くのし掛かる十字架だった。

そんなこともあるのではないかと、かすかに予想はしていた。

だが、まさかあり得ないだろうと思ったのだ。

神は死んだ。

死んだならば、その神がいたずらに作った病気など、消え失せてもいい。

いや、消え失せ、二度とこの世に現れてはならないものはず。そうでなければならぬ。

物語にも映画にも、必ず終わりがあるものだ。

エンディングを過ぎて、ページやスクリーンから目を移せば、そ

「こには平和でつまらない日常がある。
それが続くなど、あつてはならない。

「ふふっ、あははははっ！

あーははははははははははっ！

痒いのが治らない！

治らないんだよお！

どうする？

どうすればいい？

これで陣内さんも感染するかも知れないなあ？

さあ、あんたも俺達の仲間になれよ！」

ぐっつと肩を持つ力に手を入れる。

だが、それ以上の殺気を感じない。

黙ったままで振り返らず、仁はその場を動こうとしない。

「おい、どうしたんだよお？

殺せよ？

お前や藤次くんの敵だぞ？

早く殺さなきゃ、間に合わなくなっても知らないぞ？

だからさ、ほら、その銃でパーンとさあ……」

「それは、お前の願いか？」

「願いつて何だよ。」

お前、自分の身を守れよ。

ほらほら、藤次くんも心配そうに見てるだろうが。

守つてやらなきゃ、何が起こるか分からないだろう？。」

「殺意の無い奴を殺すのは、目端の利かない三流だ」

その言葉を聞いた刹那、酔ったような、踊ったような毅の体は、

時間が止まったように動かなくなる。

「なんですか……それ……カッコつけてるつもりですか……」

「自分で死ぬ勇気も無いからって、狂った振りして他人にケツ持っ

てくるんじゃないよ」

「悪かったな……死ぬ勇気も無いクズで……」

「分かってるなら自分でやれ。」

俺は生きるのに忙しいんだ」

「あんたに何が分かるんだよ……地方の私立だけど高校も卒業して、ちゃんとした会社に就職して、結婚もして、まともに生きるはずだったのに、残業続きで鬱病になり、妻に逃げられ、結局は日雇い労働者になって……それでも真面目に生きてきた……」

「だから何だ」

「真面目に、精一杯、誠実に生きてきたんだ！」

なのにどん底に落ちて、死ぬこともできずさまよって、秋葉原のゲームセンターで憂さ晴らしをするだけの日々。

そこにしか居場所が無いような、つまらない俺でも、つつましく生きてたんだ！

なのに何だよ？

戦争に巻き込まれ、楽園にたどり着く事もできず、謎の奇病に悩まされて、狂おうとしたけれど狂いきれず、むしろ頭の皮を剥がした後になって、どんどんと正気が戻って来るんだ！

見るよほら！

哀れだろう？

悲惨だろう？

悲劇だろう？

せめて笑ってくれ！

嘲笑ってくれ！

そして俺を殺してくれ！」

彼は被っていたベレー帽を投げ捨てると、軽く頭を下げて、二人にいやがおうにも見えるように、頭をずいと近付ける。

骨の乳白色と、乾いた血が赤黒くなって混ざり合った半球形の頭の上に、幾筋もの細い爪痕がくつきりと残っている。

藤次は思わず目を逸らすと、近くの車の後ろに走り込み、胃の中のを吐き出す。

だが、仁はその場に立ち尽くしたまま、眉根一つ動かさずとはし

ない。

彼の反応が鈍いことを見て取ると、毅はさらに頭を近付けてくる。「どうしたんだ？」

言葉も出ないか？

裏社会の人間でも、これはびつくりしただろうか？」

「俺達の世界で不義理をしたら、こんなモンじゃ済まされないな」

「こんなモン？」

「こんなモンだつて？」

「自分が世界で一番不幸だつて叫ぶ奴ほど、醜いものは無い」

仁は胸ポケットに入れてあった、小さなウイスキー瓶を取り出すと、一気にそれを半分まで飲み干す。

ジャケットの袖で口元を拭くと、毅の襟首を掴み、ぐっところちらに引き寄せる。

「テメエは幸せなんだよ。」

自分で生き死にを決められるんだ。

俺のサバイバルナイフを貸してやるから、勝手に喉笛でもかつ切つて死にやがれ。

死ぬまで誰かに頼ろうつていう、まるでどら焼きにチョコレートをコーティングして、ハチミツと黒蜜を掛けたような気持ち悪いほどの甘い考え。

そんな事を考えられる奴は、まだ幸せなんだ。

むしろ生きようとして必死にあがく奴、生きたくても生きられない奴、死ぬ権利さえ持てない奴らが、どれだけ悲惨で残酷なのか、知りもしねえで一人前の大人みたいなツラするんじゃないやねえ！

お前なんざ自分で死ね！

海でも山でも勝手に死ね！

俺達の前に汚いツラ見せてんじゃないやねえ！」

呆然として、やがて流れ落ちる涙。

苦しいだろう。悔しいだろう。

俺を殺したいだろう。

だが、それ以上に自分の情けなさが身に染みて、骨まで痛むことだろう。

一目見た時、爛々として狂ったように見える目をしていたが、その光に狂気は見られなかった。

彼は狂った振りをしているだけ。

そしてその予感は見事に的中する。

長年修羅場をくぐり抜けてきたせいか、相手がどんな思考をしているか、その目と声を聞くだけで、ある程度の予想はできるようになった。

彼は甘えているだけだ。

狂いきれず殺意も持てず、人に殺して欲しがっている。

自分を殺す事にさえ、手を汚したくないという、この期に及んで子供じみるにも程がある。

そのまま毅を捨て置いて、去ろうとする仁のところに藤次が駆け寄ってくる。

「陣内さん……ひどい……ハツコイエンペラーが泣いてる……」

「構うな。今アイツは自分が大人に、いや、一人前の男になれるかどうかで、自分と戦ってるんだ」

「戦ってるの？」

「ああ、次に会うときのアイツはきつと手強いぞ。」

本物のニコライ・チャレンコフくらいに強くなっていて、北極のシロクマにだって勝つかも知れない」

「すごいね！」

「ああ、凄い奴だよ。」

ハツコイエンペラーは俺が結局超えたくても超えられない、アキバで最強のロシアン・ソルジャーだ。それは今も昔も、何ら変わりやしない。

なあそうだろう？

シベリアの白い悪魔、ハツコイエンペラー」

その言葉に、毅は苦笑いを浮かべながら、天を仰ぐように親指を

立ててウインクする。

それは彼の使うキャラクターが、戦いに勝っても負けても、相手に行く別れの挨拶。

また会おう。

また戦おう。

そんな意味が込められている。

その仕草を見て、今まで我慢していた仁もまた胸に込み上げるものがあつた。

「ありがとう。」

ロンドンキャット」

「どういたしまして、ハツコイエンペラー」

「ダスヴィダーニヤ！（さよならだ！）」

彼はその時、人生で最高の笑顔を見せた。

心なしか、暮れ始めた太陽の光を受けたその顔は、少しだけきらきらとしている。

そして、その手に持っているのは錆びた茶色いカッターナイフ。

それを喉元に突き刺すと、壊れた笛のような音が響き渡る。

一瞬、何が起きたか分からずに、しばし呆然となる。

やがて訪れるのは現実と、込み上げてくる悲しみ。

そして理解する目の前の全て。

「ハツコイエンペラー……？」

藤次が搾り出すような声で、ふらりと歩く。

一步、二歩、よろよろとして、生まれたばかりの子馬のような足取りで。

「馬鹿野郎オオオツツツツ！」

「陣内さ……ハツコイ……死んで……」

「死んでねえ！」

死んでねえよ！

死ぬかよ馬鹿野郎！

シロクマより強えんだぞ！」

「血……いっぱい……ねえ……起きてよ……」

少しずつ、辺りに赤い水たまりが広がっていく。

未来は誰にも分からない。適当に投げたルーレットは、何色の何番に入るか分からない。

だが、今起きたことはルーレットではなく、何とかなるはずの事だった。

久しぶりの大失敗、あまりにも遅れ過ぎた大誤算。

それでも彼は、自分の力で決断を下した。

他人に頼らず、孤高に生き、そして死んだ。

生きていた時は不平不満でいっぱいだったかも知れない。

精一杯過ぎて袋小路だったかも知れない。

だが、その目は真つ直ぐ前を見続けた。

誰よりもお前は誇り高かった。

ニコライ・チャレンコフ以上にクールで熱い男さ。

胸ポケットの中から煙草を取り出そうとして、もう無くなっていた事に気が付き、苦笑する。

最後の手向けもしてやれない。

せめて酒でもどうだ？

黙ってウイスキー瓶を取り出すと、下を向いていた毅の体ごと上を向かせ、少し砂の付いた唇の所にとくとくとそれを垂らす。

「悪いな。」

こんな安物が死に水になっちまって」

「陣内さん……えぐっ……ハツコイエン……ぐすっ、ハツ……」

「泣くなよ藤次。お前、男の子だろう？」

「だってハツコイエンペラーが！

ハツコイエンペラー死んじゃった！」

「じゃあ、お前がハツコイエンペラーになってやれ」

「え？」

「死んだこいつの分まで、お前がそうなってやるんだ」

「僕が……なる……」

藤次の目線まで腰を曲げて、くしゃくしゃと頭を撫でる。

「誰よりカツコいい、ハツコイエンペラー二世になるんだ」

「でも、僕まだ子供で、ハツコイエンペラーは今そこで死んでて」

「お前の心の中のハツコイエンペラーは、生きてるだろう？」

きよとんとする藤次を抱きしめ、高く持ち上げる。

「僕の、心の中？」

「ああそうだ。」

お前と俺の心の中だ。

目を閉じてみるよ、藤次」

「うん……」

「心の奥底に、ずっとずっと深いところに、ハツコイエンペラーが俺達に残したものが見えないか？」

「見えるよ……温かくて優しく……でも、すごく強いんだ……」

「そうだ。北極のシロクマよりも強いし、誰よりクールで、なのに温かいだろう？」

お前もそうなるんだ、藤次」

「なれるかなあ」

「なれるさ」

「ロンドンキャットがそう言ってくれるなら、頑張れるよ」

ああ、柄にもない事をしている。

泣く子も黙るとは言わないが、こんな日の当たる坂道が上がっていくような子供には、自分は不釣り合いなことだろう。

だけれども、今はこうする事が正しい気がする。

いや、自分がしたいからしている。

ハツコイエンペラー、お前は死んでもその心は引き継がれていく。世間から見ればジャラ銭を浪費するだけの、ちゃちでくだらない

お遊びだっただろうが、俺達はみんな真剣だった。

お互い言葉は交わさなくても、通じ合うものがあった。

それがこんなどうしようもない壊れた世界で、芽吹いてる。

すげえだろう？」

とんでもなくすげえ事だよ。

武器商人も建築労働者も、大学院の学生も子供も、俺達はみんな同じ仲間さ。

きつと俺達の行く天国にもゲームがあつて、みんなあの頃みたいに、馬鹿みたいに技術を磨き合つて、言葉にならない会話をしてるんだ。

神なんて知つたことじゃない。

あの世の存在なんて、実際に死んでみなきゃ分からない。

だから俺達だけの天国があつたつて、不思議でも何でもない。

どうせ近い内に俺も行く。

遠い未来には藤次も行くだろう。

そうしたらまた、遊ぼうじゃないか。

百円玉、たくさん用意して待つておけよ。

分かつたか？ ハツコイエンペラー。

「ねえ、陣内さん」

「何だ」

「かゆいよ」

「そりゃまあ、蚊に刺されりゃ痒いだろう」

「そうじゃなくて……背中の中かなあ……」

「ん？ 背中が痒いのか」

持ち上げていた藤次を下ろし、背中の方を向けさせると、ぼりぼりと掻いてやる。

だが、藤次は不満そうにくねくねと体を動かす。

「どこが痒いんだよ。そんな動かれちゃ分からねえぞ」

「なんだろう。背中のもつと奥の方がかゆいんだ。それに、足の裏もかゆいなあ」

ぼりぼりぼりぼり。

爪の音が響く。

「おい、まさかさっきの……」

ぼりぼりぼりぼりぼりぼり。

「さっきの？ 何？」

ばりばりばりばりばりばりばりばりばりばり。
爪の音だけが響き渡る。

第33章 たぶん私は空気人形

「先生はやっぱり、私の事嫌いでしたか？」

「やっぱりって何よ。私はみんなの事、嫌いじゃなかったわ」

「だって先生……いえ、いいです……」

さすがに声のトーンがおかしいんだろうか。

それとも態度に不信感があるのか。

かれこれ三十分くらい一緒に過ごしているのに、本当に一度もまばたきをしない。

ロボット？

ゾンビ？

それとも？

そもそも核戦争が起こったり、神が降臨したり、変な病気が蔓延したり、私の一生で全部使うぐらいのびっくりが起きた後なのに、なんでまだそこに追加されるかな。

夏子としては、このまま走って逃げ出したらどうだろうかと妄想したり、何も考えずに顔をつねれば、夢オチになってベッドで寝ほけた自分がいるんじゃないか。

そんな風に考えて、とりあえず逃げるのは無理として、顔をつねってみるが、やはり頬に鈍い痛みが走るだけで、何も世界は変わらない。

考えに考えたあげく、夏子は思いきって質問する事にした。

もしも自分にとって敵なら、今頃は地面に自分の首が転がっていたり、身ぐるみはがれてもおかしくはない。

つまり、クリスは少なくとも敵ではないのだ。

と、決意した時点で不意に気付く。

質問する、というのは、

『ねえクリス、何であなたまばたきしないの？ 人間じゃないの？』

『ドライアイってあるじゃない。あれって病気的一种なんだよ。クリスは知ってる?』

『アンドロイドってさ、私は嫌いじゃないよ。』

カツコイイし、ロボット三原則とか、人間は共存をちゃんと考えてるんだから凄いやね』

など、どれを聞いても失礼に当たるし、親切に答える前に、場合によっては相手の逆鱗に触れる事にもなりかねない。

ただ分かっているのは、クリスは一度としてまばたきをしないと
いうこと。

開いたままの目は閉じられる事はなく、憂いを含んだ美しい蒼い目で、自分や景色を見ている。

そんな彼女が着ている修道女のような服は、べっとり血に汚れている。

この血が、下手な質問をしてはならないという心のブレーキを踏み、その場の空気を、流れを乱すことをためらわせる。

考えれば考えるほど思考は迷路に迷い込み、出口から遠ざかっていく。

そもそも、まばたきしない女って何よ!

何で私が悩まなきゃいけないのよ?

いつそ逆ギレして、よく分からない説教の一つでもぶちかましてやるうか、などと半分本気で思い始めた時に、クリスはぽつりと咳いた。

「先生と私が出会った時、私はもう黒髪で、カラーコンタクトをしてましたね」

「いきなり何?」

出会った時って、三年生の担任になって、ちゃんと話したのは確かゴールデンウィークの手前くらいだったかしら。

私の趣味が映画を観る事で、アカデミー賞作品のDVDを一つずつ揃えてるつてのを知って、貸して欲しいって言ってきたのよね」「そうでしたね。

それから時々、先生にお願いしてDVDを貸していただきました。

明るく振る舞ってるけれど、実は友達もいなくて、学校に来るのも苦痛だった私には、先生のそういう小さな気遣いが、すごく嬉しかったんです」

「友達、いなかったの……？」

「私も含めて、みんな女の子は良く言えば今時の、ギャルっぽい女の子ばかりでしたね。」

確かにそれなりの進学校でしたが、みんな明るく元気で、むしろ元氣過ぎるくらいで、おとなしい生徒はまるで空気のよう。

そこにいても、目には見えないに等しい」

まばたきをしない瞳で、彼女は寂しそうに俯く。

彼女は一年生、二年生と金髪碧眼で、おとなしい生徒だったとは知っている。

しかし、空気のように誰からも気にされない存在だったのか？

そんなことはないはずだ。

男子生徒達は時折美人の生徒がいると言って、クリスの名前を挙げていた。

女子の間でも、あんな金髪は反則だと、やつかみ混じりに羨んでいた。

むしろ空気と言うべき生徒は、他にもたくさんいた事だろう。

この時点で既に、空気どころか周囲の耳目を集める、ちょっとしたマドンナ的存在だ。

目立つのは構わない。

個性があるのは大いに結構、むしろぐんぐん伸ばして欲しい。

だが、逆に『空気のような生徒』などというのは、できれば存在してはならないのだ。私は情熱を傾けた。

精一杯の仕事をしていた。

いじめ、仲間はずれ、落ちこぼれ、不登校、援助交際。

そんな問題はどんなに模範的な学校に行ったところで、必ず一つや二つはある。

どれほど目を皿のようにして気を遣っても、取りこぼされる生徒が出る。

それでもせめて、自分が担任しているクラスの生徒くらいは把握しようとして、自分なりに必死だった。

夏子はもう一度、頭の中で彼女が自分の生徒として、教室にいた時代を思い出す。

クリステイ・カデル。

三年生に進級し、春の始業式と同時に黒髪とカラーコンタクトを入れて、外見はまるで品行方正の鏡のようになった。

しかし、言葉遣いはまるで正反対。

誰とでもフレンドリーに、悪く言えば教師相手にも友人同然で敬語も使わず、自分に対しても砕けたしゃべり方をしてくる。

だが、別にそれは不愉快な事ではない。

彼女は成績も優秀だったし、校則を破るような事は何一つしていない。

授業中の態度も真面目で、ごく一般的な生徒。

それこそまるで空気のようで

「私は……クリス……」

はたと気が付く。

いや、気が付いてしまった。

しかし、それは事実ではない。あくまでも仮定の話だ。

彼女は空気のようだった。

限りなく透明だった。

だから、自ら変わるうとした。

いや、変わったのだ。

しかし、その結果は決して彼女が予想したようなものではなかつ

たとしたら？

思えばクリスは一年生から二年生に掛けて、近付きがたい雰囲気
を放っていた。

その整った顔立ちは、アメリカと言うよりはヨーロッパ的な落ち
着いた雰囲気。

もちろんドイツ人である両親の血筋によるものだろう。

そして、厳格なしつけを受けて育ってきた彼女は、身のこなしや
言葉遣いを一つとっても、慇懃無礼と相手には感じられるほどだ。

クリスは誰もが羨む金髪碧眼の美少女。

しかし、それは女子生徒達から敬遠される原因となり、まるで美
術館に展示されている、高名な彫刻家の作品のようにも見えるだろ
う。

お高く止まった女。

私達とは相容れない。構うことはない。

無視に始まり、時には陰湿ないじめに発展する可能性だってある
だろう。

そしてそれは、彼女自身が訴え出なければ、表面化する事もほほ
あるはずがない。

自分自身が高校生や中学生だった時、いじめはそこに無かったか？
先生は必ず気付いていたのか？

自分はいじめの存在を知って、何をした？

ああ、ひよっとすると私は、とんでもない過ちを犯していたのか
も知れない。

今さら謝っても遅く、償っても償えないようなこと。

「先生、今の私は人間に見えますか？ 透明ではありませんか？」
血まみれの両腕を広げ、太陽の逆光を受けて私を見る。

その姿は神秘的で気高く、痛々しくて悲壮感に満ちている。

「三年F組、出席番号八番。

クリステイ・カデルは私の教え子。

透明なんかじゃないわ」

途中で詰まりそうになりながら、夏子は最後までその言葉を言い切る。

それが今、彼女にできる精一杯の事だった。

そして、夏子は彼女を抱きしめると、いつの間にか泣いていた。これから言われるだろう事に、恥と後悔と自責の念が強すぎて、自分ではもはやどうしようもない感情の重荷がのし掛かる。

そんな夏子の耳元で、クリスは小さく呟いた。

『神のご加護がありますように』

笑えないブラックジョーク。

なのに少しでも救われたような気がしたのは、思い上がりじゃないと信じた。

「先生とちよつとだけ、私に関するお喋りがしたいです」

「そうね。お茶でも飲みながらゆっくり話しましょう」

ペットボトルに入ったお茶を渡すと、相変わらず作り物のような笑みを彼女は浮かべる。

もちろん、まばたきしない瞳でこちらを見ながら。

「ありがとうございます。いただきます」

「礼なんていいわ。そこらにまだ、いくらでも転がってるから」

「くすくす。やっぱり先生はお優しいです」

「優しいなんて思えるほど、おこがましくも無いつもりよ」

自分もまた、ぬるいスポーツドリンクを乾いた喉に流し込むと、複雑な感情を抑え込むように目を逸らす。

ちらりと横目で見るクリスの顔は、少しだけ優しい気がした。

「では、そろそろ聞いてください。私が話す私の事を」

第34章 クリスの過去

カミサマタスケテ

カミサマタスケテ

カミサマタスケテカミサマタスケテカミサマタスケテ

それは搾り出すような私の願い。

なのにその声は神様に届かない。

願いは叶わない。

私は救われない。

みんな救われない。

世界は何も変わらない。

私は厳格なキリスト教徒の家に生まれ、幼い頃から神の教えを説かれてきた。

信じていれば救われる。必ず夢は実現する。

どんな困難も信仰と共に乗り切れる。

果たしてそれは本当だろうか？ と、疑問に思う事もあった。

だが、幼い子供にとっては、親とは神以上に神なのだ。

だからこそ、親の言うことは鵜呑みに信じ、親に怒られぬよう、

気に入られるように、いつしか私は親の顔色を見て育ち、まるで純

粋培養のお嬢様のようになる事が義務付けられていた。

漫画やアニメやゲームなどは、当然与えられる事はない。

私の娯楽とは聖書だ。

清くあれ。正しくあれ。つつましくあれ。

それは悪い事だとは思わない。

けれど、子供社会にそんな大人のものさしは通じない。

私は金色の髪と青い瞳のせいで、幼稚園の頃からいじめに遭っていた。

私は泣いた。お腹を壊しやすくなった。

学校と名の付く全てが嫌いになった。

生きるのが嫌いになった。

なぜ耐えねばならないのか分からなかった。

一人くらい、いや、二、三人くらい殺したって、日本の人口に比べればささやかな数だ。

などと思っただけれど、思うだけで実行はしない。

それは神に背く事だから。

そんなある日、私は父に言った。

「私、学校に行きたくない」

「なぜだ？」

「いじめられるから」

「それはお前にも原因があるんじゃないか？」

清く正しく、つつましく生きているか？」

誰かを羨んだり、嫉妬したりしていないか？」

嘘を吐いたりしていないか？」

「してません」

少なくとも、私は両親はおろか、神に背くような事などした覚えが無い。

私はあるがままに、神の欲するがままに生きてきた。間違いなどかけらも無い。

正しい私に、父はきつと良き言葉と良き方策を授けてくださる事だろう。

きつぱりと言い切る私に、父は満面の笑みを浮かべ、思い切り握りしめた拳で横っ面を殴りつける。

幼い私は風船のように浮かび上がり、気が付けば頬と打ち付けた右脇腹と右足に、鈍い痛みを感じていた。

なぜ？

どうして？

何が起こったの？

あれれ？ おかしくない？

夢？

ふしぎ？

理解できずに混乱する私の髪を引つ張り上げて、父は醜く歪んだしかめつらをしながら、今度は軽く私の頬をひっぱたく。

それは一発で収まらず、二発、三発、四発と、いつしか忘れるほどに繰り返された。

「クリス、我が娘クリスよ。

お前は今私に嘘を吐いた。

だから、私は神に代わって、お前に罰を与えたのだ。

分かるかい？

分かるよね？

聡明なお前なら、分かるはずだ」

「痛い……よ……お父さん……なんで……？」

「その顔は、理解できてないようだね。

お前が清くないから、正しくないから、つましくないから、神はお前に罰をお与えになったんだ。

試練をお与えになっているのに、お前はそれに気付いていない。

私だって辛いんだぞ、クリス？

目に入れても痛くない、大切な我が子を手に掛けているという、その心の痛みが分かるか？

だが、それ以上に私は情けない。

いじめに遭うなどというのは、お前の心がくすんでいるから、汚れているから、お前が嘔吐きのろくでなしだからだ。

神は信ずる者を救われる。神は試練をお与えになる。神は内省を促す。

お前は私の目を見て、もう一度さつきと同じ事を言えるか？」

「言えるよ……お父さん……」

その瞬間、今度はお腹に鈍い痛みが走る。

思わず胃の中身が少し飛び出し、爬虫類みたいな声が口から漏れた。

「もう一度言っつ。

いや、三度も同じことを言わせるなよクリス？

私は今、とても悲しいんだ」

「私は……悪い子でした……だから神様が罰をお与えになったのに……それに気付かせませんでした……ごめんなさい……」

私が言い終わると、父はひざまずいて抱きしめ、声を殺して泣いた。

だが、それはとても嘘臭く感じる。

私には分からない。

何が正しくて何が正しくないのか。

何が本当で、何が嘘なのか。

父の抱擁は、本当なのか。

それを現実の世界で言葉にして言い切れるような力など、子供にあるはずもない。

だから私はその時、自分が間違っていて、父が正しいような気がした。

いや、そうであろうと思いついていた。

学校のいじめもみんなが正しくて、私が悪いような気がした。

そんな私に父は言う。

「祈れ。ただひたすらに祈れ。そして懺悔せよ」

「祈ります、お父さん」

「私も祈ろう。」

母さんも祈ってくれるはずだ。

そして、神の国は常に心の内にあることを知ればいい」

目を閉じ、主のお姿を心に描き、祈りを捧げる。

その事に疑問を感じても、言葉になどするはずがない。

疑問を感じたこと自体、自分の心の中で殺す。

祈り続ける事で世界は祝福に包まれ、私は救われ、世界は救われる。

信じる者も信じぬ者も、神はいつしか救って下さる。

大丈夫。

きっと大丈夫。

第35章 クリスの思い

チキチキチキチキ

使い古されて、錆びたカッターナイフの刃を出したり引っ込めたり。

祈って祈って祈り抜いても、私の生活は変わらない。

あれから一年、そして三年、気が付けば五年経過した。

私は清く、正しく、つつましくあった。

常に神の教えを胸に、神の意向に沿った生き方をしてきた。

けれども、世界はだんだんと色褪せていき、私の人生はまるで下り坂を転がる岩のようだった。

くだらない。

つまらない。

なぜ生まれただらう。

私も誰かも、皆死ねばいい。

それは狂った欲望で、本当は救われたいという叫びの裏返し。

小利口な私は、自分が狂いたくても狂えない。

その程度の事は理解していた。

だが、そんな私と私の家族にも転機が訪れる。

ある時、私達は賃貸のマンションから、庭のある一戸建ての家に引っ越した。

一軒家を購入できたのも、信心深かったからだと言いはり、母も私も同調した。

幸せになる私達。

光の階段は目前に。

私は今まで以上に祈り、感謝した。

私はやっと、いじめる子のいない学校に転校したのだ。

これはきつと、私と家族が清く正しくあったから。

祈りが通じたからに違いない。

私はここで始まる新しい生活に、きつと満足するに違いない。だって神様がくれた、最高のプレゼントだから。そんな風に考えていた。

けれども世の中は、私が思うようには、神様の理想のようにはできていない。

いじめというのはどこに行っても付きまとう問題で、きつと人類が減びるその日まで、無くなる事は無いだろう。

結局日本人らしくない私に、居場所などできないのだ。異物は排除する、それがシステム。

いや、異物であったとしても、自ら努力すれば良かったのかも知れない。

今となっては分からないことだ。

そして、一軒家を買えば幸せというのもまた、場合によっては幻想の毒薬だ。

父は三千万円の住宅ローンを抱え、必死で働いた。働いて、働いて、祈って、働いて、祈って、また働く。

なのに、会社は倒産した。

なぜか私は殴られた。

お前の祈りが正しくないから。

祈りが足りてないからだ。

母は黙って祈るだけで、私の味方も、父の味方もしない。

だから私はもっと祈った。

強く祈った。神の足下にすぎり、自分と家族と世界の平和を祈り続けた。

それはまるで消耗戦。

兵糧攻めに遭っているようなもの。

なぜなら心はすり減って、継ぎ足される事は無いからだ。

チキチキチキチキ

カッターナイフの音が聞こえる。

チキチキチキチキ

静かな狂気。

私の友達。

家族と世界と血と刃物。

私は夢想する。

当たり前のように生きる私。

自由な私。

奔放な私。神を信じない私。

例えば渋谷のセンター街辺りにいるような、テレビでよく見かける女子高生。

あんな風になりたい。

頭空っぽにして騒ぎたい。

分かってるよ。

本当は彼女達だって考えたり悩んだり、色々あるってことくらい。

ノートの隅に落書きしてみる。

黒髪で黒い瞳の、純粋な日本人の私。

日本人の私は誰にもいじめられなくて、カワイイものが大好きで、友達がたくさんいて、めいっぱい恋して、オシャレして。

あなたはクリス。

私もクリス。

どっちが本物？

どっちが偽者？

ねえクリス、教えてクリス。

私は私は私は私は、いったい誰が何なんだろうね。

ああ、お父さんの足音が聞こえる。

こっちに近付いてくる。

この時間に私の部屋に来るのは、私の祈りが足りないからって、殴りに来たんだ。

私は祈ろう。目を閉じて祈ろう。

痛くないよ、痛くない。

私は素直で純粹で、神に祈るしか能が無い。

私は求めます。愛を、救済を。

お願いします神様。

神様助けて。

カミサマタスケテ

第36章 新しいカミサマ、古いセカイ

ある日、私が日常を生きるための、学校人格としてのクリステイ・カデルが生まれた。

彼女は髪を黒く染め、カラーコンタクトを付ける。

ただ言葉遣いはギャルそのもの。

それは私がノートに描いていた、単なる落書きだったけれど、いつしか現実の世界に現れていたものだ。

いや、現れたというのは不適切かも知れない。

私は自分の心を二つに分割し、本物の私は学校人格のクリスになった。

今度こそ本当に、神様がくれたプレゼント。

元気で明るくて、友達がいつぱいのクリスになれる。

ピュアで祈るしか能が無い私なんて要らない。

そんなの生きてても意味が無い。

お父さん、お母さん、神様、私は自由になります。

「あははーっ、チョーいい気分じゃね？」

フリーダムって感じじゃね？」

飛び跳ねてベッドにダイビング。

姿見に映る私はどこから見てもニッポンジン。

名前はクリステイ・カデル。

だけど別人。

生まれ変わった私は素敵。

三千万円の事とか、学校の事とか、そんなの私は気にしない。

さよなら私。

グッバイ私。

こんにちは新しい私。

否定したいものは過去。

古くさい偶像は全て破壊。

それはまさに一人革命。

そして私は幸せへと続く、陽の当たる坂道を上っていく。

ああ、そのはずだったのに……

「クリス、お前は祈りが足りない。

三千万円をどうやって払えばいい？

あと二十年ものローン支払いを、どう乗り切ればいい？

お前の祈りさえ足りていれば！

足りていればこんなことには！」

現実、というものは私が変わろうが変わるまいが、必ず後から追いついてきて、私の肩にそっと冷たい手を載せる。

友達が増えない。

いじめられっ子のポジションもそのまま。

私は大切な事を見落としていた事に、今さらになって気が付いた。私がどんなに変わっても、世界は何も変わりはない。

そんな当たり前にさえ気付かないほど、子供の私の頭はおめでたくて、愚かだった。

だからといって、変化した私が元に戻るのも嫌だった。

昔は良かったのかと言われたら、別にそんなことはない。

祈ってもすがっても、どうせ同じだったのだ。

私は自由に見えてとても不自由。

取り繕って嘘の自分。

人格が変わっても、ただの変な子にチェンジしただけ。

それでも後悔はしていない。

チキチキチキチキ

カッターナイフよ教えておくれ。

チキチキチキチキ

世界と私はいつたい何？

チキチキチキチキ

神様助けて。助けて神様。

チキチキチキチキ

お祈りなんてしてやるもんか。
神様はいなくても、人はいる。
人はこの世界を変えるはず。
きつと変えてくれるはず。

子供にできなかった事をできるのが大人だから、私の住むこの世界もいつか、きつと今より良くなるはず。今日より明日。明日より明日。

きつと良い日が訪れる。

そんな風に思っていたから。

それを信じていたから。

私はあの日神様に出会った。

誰もいない独りぼっちの教室で、逢魔が時の放課後に。

宗方成安。

それは神様だったおじいさんの名前。

「クリステイ・カデル。君は誰よりも神を信じ、神の助けを心から願った」

放課後の教室で、私と神は向かい合う。

私はこくりと頷いた。

「君に神器をあげよう。」

正確に言うならば、神器を選ぶ権利じゃ。

神器を手にした君は、私の跡を継いで神となり、この世界を見守るようになる。

そして、いつかこの世界を見守る仕事に疲れた時は、新しい人間にまた同じ権利を与えればいい。

その相手は君が選べばいいんじゃないよ

「神様、一つお聞きしていいですか？」

「何なりと」

「例えば私がこの世界を破壊したいと願ったなら、この世界は消えて無くなるのですか？」

「それは無理じゃな。」

自分が創造したものの以外、消す事も壊す事もできない」

「自分が創ったものを壊す、なるほど。」

王のものは王の元へ、神のものは神の元へと返すわけですね」

「ああ、そうじゃ」

成安は孫娘を慈しむような笑みを浮かべて、私の前で杖から刀を取り出す。

なるほど、この杖は仕込み杖になっているのか。

「刃物は時に人を殺し、時に守り、時に奪い、時に生み出す。

神器として君が選んで良いのは、必ず刃物となるのじゃよ。

君は善と悪を天秤で量りながら、目隠しをして夜道を進むに等しくなるじゃろう。

その際の君の共となるのが、神器としての刃物じゃ。

クリステイ・カデル。

君はその力の象徴に、はたして何を選ぶ？」

「私の神器はここにあります」

チキチキチキチキ

鳴くよ歌うよカッターナイフ

チキチキチキチキ

おめでとう。

君は今日から私の神器だ。

チキチキチキチキ

君は私を裏切らない。

私も君を裏切らない。

チキチキチキチキ

私が神様。私の神様。

「なるほど、了解しました」

「ありがとうございます」

神としての地位を譲り受けた瞬間、私の中には知識が濁流のように流れ込んできた。

何ができて何ができない。

何は良くて何が良くない。

何をすべきで何をしてはいけない。

OK、了解、アンダースタンド。

これで今日から私は神様。

誰も知らないけれど神様。

「ところでクリス、わしから一つ言っておくことがある」

「何でしょう」

「もしも君が神に不的確だと思ったら、わしは君を殺すことができ
る。」

先代の神は、現在の神に対する責任を負うのだ。

そういう風に出て来ている。

それが世界の仕組み、世界の意思、世界の規律だ」

「分かりました」

「それでは失礼するよ」

言い終わると、彼は空気の中に溶けていくように、夕闇迫る教室
の中で消えてしまった。

それから三ヶ月、結局私は学校人格のクリスティ・カデルとして
元通り。

神様だからって別に私の人生は、取り立てて面白くなるわけでも
ない。

二つに別れた人格も、別れたままで何も変わらない。

カッターナイフの刃は出したら引っ込めて、引っ込めたら出すだ
け。

猟奇殺人事件も宇宙人襲来も、未来からの暗殺者もゾンビ軍団の
復活も、何一つ起こらず平凡で平和で、私は相変わらずいじめられ、
無視され、父に祈りが足りないかと罵倒され、それでも地球は丸くて、
回転し続けるだけの普通の世界。

でもきつと、いつかきつと、何か変化は訪れる。

私は変わって、世界は変わらなくても、きつといつかどうにかな
る。

私の中の、もう一人のクリスが励ましてくれる。

だから私は頑張れる。

頑張れ私。頑張れ神様。頑張れ人類。頑張れ未来。

明日の地球と美味しいご飯、平和な世界とお日様のおいのする
布団のため。

きっと世界は曇りのち晴れ。

第37章 バカか人類！ バカか人類！ バカか人類！

そしてある日、いきなり世界は破滅した。

よく分からないうちに核戦争が起こって、いきなりたくさんの方が死んだ。

文明も科学も一晩にして滅び去り、阿鼻叫喚の地獄が待ち受けていた。

ゴキブリやアリの方が元気で、私達人類はそれ以下の存在となった。

明日の地球は、美味しいご飯は、平和な世界は、お日様のおいにする布団は、いったいどこに行ってしまったのだろうか。

子供が泣いている。

女性が泣いている。

父は死んでいる。

母も死んでいる。

近所のおじさんは首から上だけになっている。

野良猫は舌を垂らして動かない。

黒い雨が降る中で、私はぼんやりと考えた。

私の祈りは足りなかった？

私の何がいけなかった？

神様って言われても、派手に何かしちゃあいけない。

人類に干渉しちゃいけない。

ただ普通に生きて、見守ってあげるだけ。

強大な力は持っているけど、最初の天地開闢以外は、神と呼ばれた者達は、ほとんど何もせずには人類を見守ってきた。

何度となく世界で戦争が起こり、数え切れないほど流行病が起こり、飢えて渴いて苦しんで死んで、そして人類はやっと、大規模な戦争をしない世界を築こうとしていた。

それなのに、ああそれなのに、またも人類は全てをゼロに戻した。

いや、それどころかマイナスにしてしまったのだ。

人は愚かだ。救いようが無い。

馬鹿だ。

醜い。

とてつもない。

ろくでもない。

彼らはあまりにも取り返しがつかない事をしてくれた。

それは歴代の神に対する、てんちかいびやく天地開闢をした唯一神に対する、冒瀆も良いところだ。

時間は巻き戻すことができず、こぼれた水はコップの中に戻らない。

今まで否定したかった。

人類は、大人達が築いた社会は、砂上の楼閣だということ。

けれども、自分達で勝手に自爆して、勝手にその頭の悪さを露見したのだ。

私は幸せになれない。

今も、これからも、ずっと幸せになれない。

私だけじゃなく、たくさんの人がこれから、不幸の中に生きていくことだろう。

ああ、それならいつそ人類は、一度滅びても良いかも知れない。

ねえカッターナイフ、あなたはどう思う？

チキチキチキチキ

私には甘さがある。甘えがある。まったくもってその通りだよ、

うん！

チキチキチキチキ

私に必要なのは捨てる力。決断する力。

チキチキチキチキ

けれども、タダで手に入れるなんて調子に乗るんじゃないってね？

あははは、ホントにその通りだよね！。

チキチキチキチキ

じゃあ、私の迷いを切り落とそう。

チキチキチキチキ

私が心まで神となるために。

チキチキチキチキ

さよなら、私だった私。

もう一人のクリステイ・カデル。

カッターの刃を引っ込めると、勢い込んで私は自分の首を切り離す。

とんからりと転がるそれは、まるでつるべ落としのよう。

チキチキチキチキ

ほらね、簡単でしょ？

チキチキチキチキ

神器なのだから、神も殺せる。

二つある心だつて切り裂ける。

私のカッターナイフは無敵。

チタンより、モリブデンより、硬化テクタイトよりも強いんだからね。

そして切られた痕から血は出ない。

だつて神だから。

神はアイドルより凄いだし。

頭と胴体、二つに別れた私の体は、うねうねとして泡立って、肉は分裂を繰り返す。

やがて私は二人になった。

金髪碧眼だった過去の私。

そして黒髪でカラーコンタクトを付けて、ギャル言葉の学校人格の私。

「初めまして、私」

「うっひゃあ、私そっくり！ チョーウケるんだけど！」

「あなたは私、私はあなた。だけれど、二人はまるで違うものです」

「そうねー、私の中にある要らない感情とか感傷とか過去だけ、全

部切り取って創られたんだもの。

でもね、私はあなたであることも、否定しないよ」

私は私を見て、腕を組みながらうんうんと頷く。

そんな私に、私は答える。

「はい。私もまた、あなたです。

お互いの弱い部分、強い部分、様々な私が二人に分かれただけですから」

「私達の相互理解はオツケーだねっ！

じゃあ、私は神様としてこの腐り切った世界に、このどうしようもない戦後社会に、復讐するっていう大事な仕事があるの。

宗方のおじいちゃんが私を殺しに来るまでの間、やれることを一杯やってやりたい。

最後に生き残ったゴキブリ以下の人類共に、最後の審判と大破壊を味わわせてやるの。

神様だった私の期待を裏切って、平和も未来も夢も無くって、どうしようもない後始末だけを子供達に残してしまった。

そんなバカ共がどうするのか？ 私は見届けたい。

私がつつと夢想してた、残酷無比なサバイバルゲーム。

それを実行するために、私はあなたを切り離した。

もうためらわないし、迷わない。

私は鬼になれる。

蛇になれる。

悪になれる。

魔になれる。

そして、どうか死にゆく人類と、愚かな私を哀れんで。

最後の最後に祈って欲しいの」

「わかりました」

修道服に身を包んだ私は、静かにそう返事をした。

この瞬間から、一人だった私は二人になって、別々の道を歩き出す。

後ろを振り返れば、私は再び一人になった。

右も左も分からないまま彷徨っていると、三千万円を求めて旅をしていた迫田景人さんという男性に出会い、行動を共にする事になりました。

第38章 覚めない悪夢のこれから

クリステイ・カデルの話は、まるで寝物語のように感じた。

或いはこの極東の島国で誕生した、千夜一夜の物語。

気が付くと、夏子は声を殺して泣いていた。

別に理想主義者であろうとは思わない。

自分は徹頭徹尾の現実主義者だ。

三五人もいるクラスの中で、全員を理解できると思う方が無理があるし、取りこぼす生徒が出る事だつて必然で仕方の無いことだ。

けれども、大きな問題を抱えた生徒や、本当に悩みを抱えている生徒に対して、自分は体当たりで接しようとしてきた。

ドラマのような、映画のような、そんな教師になりたかった。

別に取材されたり、全国のお茶の間に知れ渡りたいとは思わない。

ただ、ちつぽけでもくだらなくても、世界が平和だったあの時代、自分は教職者としての誇りを持っていた。

精一杯の仕事をして、取り組んでいて、小さなSOSの声も聞き漏らさないようにしていたつもりだったのだ。

だが、それは結局「つもり」でしかなかった。

そして自分の思い込みは、新しい大惨事を引き起こす事となる。

三千万円のカネを巡って争った人々。

喉や頭を掻きむしる病に陥り、死んでいった人々。

見知らぬ誰かに殺されてしまった、大切な幼なじみの木戸優美。

もし自分が教師としてあるべき仕事をしていたならば、二次破綻とも言うべき、この悲惨な状況を回避できたかも知れない。

そう思うと、情けなさと同時に、込み上げてくるのは果てしない後悔の念。

しかし、後に悔いると書くように、もはや自分ができる事など何も無い。

このクリスがまばたきしないのは、死んだ本物のクリスの残りも

のだからかも知れない。

今さらながら思い出してみれば、あの腹の立つ声をした女子高生は、確かにクリステイ・カデルそのものだ。

その時に自分は気付くべきだった。

気付いて、何が何でもその馬鹿なたくらみを辞めるように諭す。

それはきつと、自分に与えられた「仕事」だったのだろう。

もしもあの時、もしも自分が、もしも止める事ができていたなら、考えれば考えるほどに、自分の無能さが鼻につく。

死んでいった人々の無念を考えれば、死んでも死にきれぬものではない。

けれども自分に、何が出来ただろう。

教職者としての私は、本当はすごく無力な存在じゃないか。

この状況で、私には何が出来たと言っただろう。

ああでも、それでも、やっぱり、私は。

「私は……何をしていたんだろう……」

「先生は悪くありません。きっと誰に何を言われても、もう一人の私はこの復讐を行った事でしょう」

「でも私は！

私は教師として！

あなたの担任として！

やるべき事があつたはず！」

泣き伏す夏子のそばで、クリスはいつくしむような目をして言う。「既に終わっている出来事を、歴史と人は呼ぶのです。

過ぎ去った時間と共に全ては歴史となり、私達は今と未来を生きるために、歴史を学ぼうとします。

それは決して後悔するためや、懺悔するためにあるのではなく、同じ過ちを繰り返さないためにあるのです。

と、先生は最初の授業の時、おっしゃったでしょう？」

静まり返る世界に冴え渡る、それはまるで魔法の言葉。

今まで両肩に力を入れて、ハイヒールを履いたように背伸びをし

て、生きるために必死だった夏子にとって、かつて自分が教えたはずの、大切な事を教えられている。

嬉しさと恥ずかしさが混ざりあっている。どんな表情をしていいのかわからない。

ただ照れくさくて、嬉しくて、つい下を向いてしまう。

なのに涙は止まらない。

現実が、横たわっている。

「先生の一生懸命な姿を見るのが、私はとても好きでした。

だから先生、これから歴史を学び、今を生きる私達に、色々な事を教えて下さい。

先生がこの世界でこうして生き残っているのは、きっとそのための神の思し召しです」

「神の思し召しって、クリス、こんな時まで冗談きついよ」

夏子の言葉に、クリスは小さく首を横に振る。

「いいえ先生、信じるか信じないか、居るか居ないかは関係無いんです。

やっぱり神は私の心の中にいらっしやって、全ての人々を見守っていると思います。

実際の神として、戦後にさらなる混沌を招いた罪深い私ですが、私などが神を名乗る、その事自体がやはり、おこがましかったのではないかと思います。

そして私は自分が生まれ、やがて死ぬことの意味をこれからも探そうと思います。

先生はそのために必要なもの、大切なものを教えてくださいました。

言葉に出来ないほどに、私は感謝しています」

クリスは夏子に深々と頭を下げる。

それは彼女なりの、最高の感謝の表れだった。

本物だったはずのクリスが死に、偽者であり残り物だったはずの自分がこうして生きていくことには、何らかの理由がある気がする。

だが、それが何なのか分からない。

だからこそ、生きて探してみたいと思う。
奪われる命があれば、生まれる命がある。

そして、今自分のお腹の中には、景人が残した命が宿っている。

「おい、新しいお仲間さんか？」

背中の方から声がする。

振り返ると、藤次を背中に背負った仁がこちらに向かって、ゆっくりと歩いてきた。

ちょうどいい機会だ、クリスの事を二人にも紹介しよう。

そして、これからの事を一緒に考えよう。

「彼女は私が教師だった頃の教え子で、クリスティ・カデルよ」

「クリスです。初めまして」

深々とお辞儀をするその姿は、血まみれの修道服姿と相まって、どこか不思議で、神秘的な印象を与える。

相変わらずまばたきをしないクリス。

だが、それは本体ではないことによるものだろうか。

もし仁と藤次が気付いたら、ちゃんと説明してやらねばならない。

彼女は悪くない。

むしろ責めに帰すべきは自分なのだと。

「初めまして、俺は陣内仁と言います。」

英語じゃなくても大丈夫ですか？」

「はい、むしろ日本語しか喋れませんから」

「なるほど。ちなみに俺が背負ってる、後ろで可愛い寝息を立ててる奴は向山藤次だ。」

名前が違うところから分かる通り、俺や君島さんの子供じゃない
い

「お昼寝の最中なら、静かに話さなきゃいけませんね」

「ああ、そうだな。ところで君島さんよ、ちょっと話があるんだが」

「何かしら」

「最悪のお知らせだ。藤次が感染しちまった」

第39章 カミサマのお願い

人生は曇りのち晴れ、だったはず。

戦争は終わった。

神は死んだ。

そしてゼロから新しい一步を踏み出す。

それは小さな一步かも知れないが、人類にとっては偉大なる一步となるはずだ。

貧しくとも、文明は無くとも、私達は徐々に復興の道を辿っていく。

それこそが歴史に学んだ私達が生きる今であり、進んでいく未来。私達は手を取り合い、助け合って生きていく。

陽の当たる坂道を上っていく。

しかし、未来に向かう現実とは往々にして、実に嫌な友達として尋ねてくる。

かゆみ止めを塗って応急処置をしたとは言え、そんなものは数日もすれば効果が無くなるだろう。

さらに、クリスが言うことが本当ならば、骨や眼球、内臓から、果ては全身が痒くなり、その痒みを解消するためには、他人の体の一部を掻かねばならなくなることもあるという。

あまりにも悪趣味。

あまりにも非道。

絶望する夏子にクリスは問いかける。

「先生は何歳の時、水ぼうそうになりましたか？」

「いきなり何よ……」

「私は十五歳の時に経験しました。」

通常は小学生くらいでなってしまうものですが、成長してからの水ぼうそうというのは、実に厄介で、地獄のような苦しみなのです。体中にフジツボのような疱疹が広がり、その全てが痒いのです。

いえ、痒いという言葉で表せるようなものではなく、それは地獄そのものでした。

しかし、掻けばその跡がずっと残ると言われ、掻くことができませ

ん。
少しでもそれを我慢するため、手足を抱え、だんご虫が丸くなるような格好でうずくまります。

でも、そんなもので痒みが治まるわけありません。

ほんの少し、背中をパジャマがこすれるだけで、快感と不快感の両方が全身を駆けめぐります。

苦しくて辛くて、何度自殺を考えたか分かりません。

両親に訴えると、祈りなさいと言われるだけです。

医者に行きたくても、行くお金が無いと言われ、水ぼうそうなんて放っておけば治る病気だから我慢しろと言われます。

母が買ってきてくれたかゆみ止めを塗ると、一時的にだけ痒みが止まりますが、このままでは死んでしまう。

そう思った私は、近所の小さな病院に逃げ込むようにして相談をしたところ、お医者の方が両親に入院をさせるよう、むりやりねじ込んでくれたのです。

私の人生で辛かったことは、殴られた事でも蹴られた事でも、ご飯を抜かれた事でもなければ、いじめで靴を隠され、靴下のままで家に帰ったことでもありません。

水ぼうそうになった時に放置され続けた、あの期間なんです。

だから私は、正確に言えば本物の私は地獄を創る際に、その経験を参考にしました。

それがこの罰ゲーム『爪の音』です。

そして、その罰ゲームを終わらせるために必要なのは、私という存在が、完全に死ぬこと以外にありません」

淡々と語る彼女の顔は、まるで無表情で、何を言いたいのか理解するのに少しの時間を要した。

だが、言いたいことが分かるとすぐに、夏子はクリスの肩を掴む。

「何が言いたいのか……」

「先生、私を殺してください」

「軽々しく言うんじゃない！
命を何だと思ってるの？」

「でも、私はたくさんの人々を犠牲にしました」

「それはあなたがやったんじゃない。」

「それをした張本人は、もう死んだんでしょ？」

「けれども、行ったのは私に間違いありません」

「その言葉に、今度は仁がずいといと体乗り出す。」

「言ってる意味がさっぱり分からないね。」

馬鹿の俺にも分かるように、ちゃんと説明してくれるかな」

「それは……」

言いよどむ夏子に代わって、クリスが口を開く。

「かしこまりました。陣内さんもまたこの件の犠牲者。
知る権利があります」

そして、クリスは自分が神の分身であること、この罰ゲームを終わらせる為に自分が死ねば終わる事を、簡潔に説明した。

通常であれば笑い飛ばすような与太話だが、彼もまた夏子と同じ、彼女の異常に気付いていた。

それは同じく、クリスがまばたきをしないとという事だ。

その事を仁が言うと、彼女はにっこりと笑い、作り物に必要な無い機能ですからと感情のこもらない声で答えた。

「なるほど、事情は理解した。」

それでクリスさん、あんた覚悟はできてるのかい？」

「はい。これは私が背負うべき罪です」

「手を出しな」

「こつですか？」

そつとクリスが差し出した手に、仁はナイフを突き立てる。
たたりと血がこぼれ落ちた瞬間、夏子は彼をひっぱたく。

「何するのよ！」

「このお嬢さんの本気を確かめてる」

「あんた頭おかしいんじゃない？」

クリス、包帯はえーっと……あー畜生！

タオルしか無いわ！ ごめん、これで何とか止血できるかな？」

夏子が差し出したタオルを受け取らず、手から血を流しつつも、

クリスは平然と首を横に振る。

「痛いですね。けれども、たくさんの人々が、もっと苦しんでいる
のでしょうか」

その質問に、仁は血の付いたナイフを拭いながら答える。

「ああ、こんなもんじゃない痛みにのたうちまわって、しまいにや
あ自殺までしてる」

「取り返しがつかないこと、という言葉があります、私の行った
ことがまさにそれなのでしよう」

「まったくもってその通り。」

あんたが死ぬことでこの悲劇の連鎖が終わるなら、とつとと死ん
で詫びを入れる。

それがスジってものだろう、違つかいお嬢さん？」

「陣内さん……うちの教え子にこれ以上手を出したら、分かってる
でしょうね……」

「カタギの世界でのんびり教師をしてた女と、真正面からやりあっ
て俺が負けると思うのかい？」

おめでたいねえ、ハハハハッ！

クリスマスと正月と誕生日が、頭の中で茶会ティーパーティーでも始めたか？」

「腕をちぎられても、足をへし折られても、あんたの喉笛を食いち
ぎってからじゃないと死ねないわ。」

分からないかも知れないけど、誰が何と言おうとクリスは私の教
え子、大切な生徒よ」

「やってみるか、小娘？」

「上等だよクザ野郎」

そんな二人の間に、そつとクリスは割って入った。

もし一秒でも行動が遅れていたら、夏子は確実に胸元が涼しくなっていたことだろう。

「お二人とも、藤次君が起きているのに気付いていますか？」

二人同時に振り返ると、そこには小さな体を震わせ、声を殺して泣いている藤次がいた。

「ごめつ、ごめんなさい。」

「僕が悪つ、悪いんです……ひぐつ……」

「ガキが一人前に謝るんじゃねえよ。」

「そもそも、感染したのはお前が悪いせいじゃない」

「そうよ藤次君。あなたは悪くない」

「でも僕の病気が治るためには、このお姉ちゃんが死ななきゃいけないでしょう？」

藤次のそばに膝を突き、クリスは彼を優しく抱きしめる。

「ごめんね藤次君、お姉ちゃんはとっても悪い人だったの。」

「だからね、償いをしなきゃいけない。」

藤次君も友達とけんかしたら、ごめんなさいってするでしょう？

それと同じ、大人には大人の、ごめんなさいがあるの」

「やだよお……僕が我慢するから、お姉ちゃん死なないですよ……」

「君がそう言ってくれるから、お姉ちゃんは君を助けたいと思うよ」

「ぐすつ……だめだよお……だめだから……」

「ねえ藤次君、お姉ちゃんの体は温かい？」

「うん……」

「お姉ちゃん、人間みたいに見える？」

「人間だよ」

「ありがとう」

つくりものじみた彼女の顔が、嬉しそうにほころんだ。

誰よりも人間らしいその笑みは、写真のように心にいつまでも残ることだろう。

気が付くと夏子もひざまずき、涙を流していた。

もはや避けられない運命。

自分は覚悟を決めねばならない。

きれいな事だけで生きてきて、結局口先ばかりで汚れ仕事なんてしなかつた。

そんな自分が今、最もしてはならない禁忌を犯そうとしている。

「先生、私が死ぬ前に一つだけ、お願いしたいことがあります」

エピソード グルー・オーシャン・アフター

楽園は崩壊し、サバの塩焼き定食のような温かいご飯にも巡り会えなくなつた。

頭から天使の輪っかは消え、洋服は近くにあつた服屋っぽい建物の中からとってきたので、とりあえずは人心地ついた感じだ。

食糧と水は同じく、その隣にあつたらしいコンビニっぽい建物から、クッキーとチョコ、それにペットボトルのスポーツドリンクを見つけたので大丈夫だろう。

春乃はふんと鼻息も荒く、前を見据えて気を引き締める。

準備は万端、後は頑張るだけ。

足下を見れば、アリとゴキブリがわさわさと元気に動き回っている。

「負けへんねんで。人間はなあ、あんた達より遥かにしぶといんや」結局闇市は楽園の入園終了と共に崩壊し、誰もがその辺のがれきの下から服や食い物を引っぱり出して生きる生活に帰っていった。

だが、それも長くはないだろう。

そう、アリやゴキブリよりもしぶとい人間は、こんな焦土から再び立ち上がる。

神がいなくても、仏がいなくても、人は生きていかなばならない。なぜなら、生きているからだ。

ごくりと水を喉に流し込み、小高くなつたごみの山を越えると、春乃は目の前に広がる光景にしばし息を呑んだ。

信じられない。そこには緑の草原が広がり、白く小さな花がぼつぼつと咲いている。

そして、そんな緑の絨毯の横の方で、一生懸命に何かを振り上げては、地面に振り下ろす作業をしている男の姿が目にとまった。

山を下りて近付いていくと、こちらに気が付いた男が、首から掛けたタオルで汗を拭きながら、にっこりと笑つた。

「こんにちは」

「うち、山上春乃いいいます。初めまして」

「僕は柳勉って言うんだ。よろしく」

「さっそくやけど、この辺に咲いてる小さい綺麗な花、何なん？」

「どくだみって言うんだよ。」

広島が原爆で焼かれた時、真っ先に生えてきたのはこのどくだみだった。

名前はやたら悪いけど、こんなに綺麗で可愛い花が咲くんだ。

それに、民間医療では原爆症にも効果があるって言われている。

植物が生え始めたなら、そろそろ他の野菜や果物だって、できてもいいんじゃないかなあと思ってさ。

今、実験的に畑を作ってるところなんだ。

何を植えるか、見つかった種次第だけだね」

そう言っつて、彼は水筒の中から、自分が作ったどくだみ茶を春乃に渡す。

「お、もろてええのん？」

「どござ」

「うわ、まずっ！」

「あははっ。」

飲みづらいけれど、体にはすごくいいからさ。

よかつたら飲んでおきなよ」

「はあー……やけにお兄さんさわやかやねえ……」

「そんな事言われたの、生まれて初めてだな。」

「ちよつと嬉しいよ」

勉はちらりと、そばにある小さな盛り土の山を見る。

それは木戸優美が埋葬された、何の飾り気も無い墓。

死体の女の子に勇気をもらったなんて、口が裂けても言えないなあ。

そう思い、勉は苦笑する。

「なあ、うちも畑仕事やってもええ？」

「え？ あ、いいけど」

「やっぱなあ、いつまでもくよくよしてたらアカンでなあ。人生に必要なのって、無意味にポジティブな心やと思わん？」

「そうかも知れない」

「その農具、手作りやる？」

「作り方教えてえな」

「ああ、それじゃまず、何か適当な棒を探そうか」

「おっけー、がんばるでー」

ぽかぽかと当たる太陽の光は、秋にしては暖かい。

けれども、これから冬がやってくる。

でも、それを超えればまた春は訪れる。

人生も同じだ。

冬は長く感じて、春や夏はあっと言う間に終わってしまふ。

人は失敗して、間違つて、失つて、そしてまた生きていく。

春夏秋冬めぐる季節。

人生は終わらない。

いつか死ぬまで生きるしかない。

楽園は無ければ、これから自分の手で作るだけだ。

さあ耕そう、これからの未来を。

そして私の人生を。

エピソード ワールド・クリエイト・ワンスモア

「陣内さん、この川の水はけっこう綺麗だよ」

「そうだなあ。飲むのは厳しいかも知れないが、色々と便利かも知れない」

河原に下りてきた藤次が指をさす方向にかがみ、まじまじと水面を見つめる。

両手にそつとすくってみると、冷たさが指先から脳天に向かって突き抜けた。

ああ、なんだかともリアルだと仁は思う。

最近は生きているのか死んでいるのか、分からないような生活だった。

そんな中で、藤次の無邪気で無垢な声と表情こそが、一番身近に感じられるリアルだったせいもある。

五感で感じる何かというのは、案外貴重な経験なのだと、こんな時に改めて感じる。

「お魚さんはいないね」

「川をたどっていけば、そのうち海に出るだろう。俺、釣りは結構得意なんだ」

「おさしみ!」

「そうだなあ、早く海に行きたいな」

そんな会話をしていると、遠くから夏子の呼ぶ声が聞こえる。

「おい、二人ともご飯ができたよ」

「ごはん!」

「ああ、食うこととは生きることだな」

戻ると、そこには携帯用コンロを使って作った、おじやが鍋に湯気を立てている。

具は乾燥したワカメくらいしか無いが、それでも温かな料理が食べられるというのは、この上なくありがたい事だ。

ホームセンターの跡地を漁っているうちに、調理道具なども見つけたおかげもあって、ミネラルウォーターを併用して、割と様々な料理ができるようになったのだ。

夏子達は今、少しずつだが人間らしい生活を取り戻しつつある。けれども、気を抜けばすぐに生活は原始人に逆戻り。

江戸時代よりも遙か以前のものになってしまうことだろう。

「さつき通りすがった人達に聞いたら、海の方に小さな集落ができつつあるらしいわ」

「やっぱりな。農作物と比べて魚はすぐに釣れるし、生でも焼いても食える」

「海に行こうっていうあなたの提案、意外と正解じゃないかしら」

「意外とってのはひどいな、単純に考えただけなのに」

「最近はずいぶん、陣内さんの事を信用しても良いと思えるようになってきたかもね」

「はははっ、ヤクザ者なんて信じねえ方がいいぞ」

おじやを食べる仁の横で、ちょこんと腰を下ろしてもたれかかる藤次。

彼の目は、夏子の下腹部に注がれている。

「ねえ、少しは大きくなつたかな」

「何が？」

「赤ちゃん」

「さあて、どうかなあ」

夏子はお腹をさすりながら、慈しむように目を細める。

死ぬ前にクリスがした最後の願い、それは自分の子供を産んで欲しいということ。

そんなことができるのかと聞いたが、できるとクリスは夏子に言った。

最後の別れ、神を殺す神器となったカッターナイフで、クリスの首を切り落とす。

後悔と血と涙にまみれて立ち尽くす。

肩で呼吸をしながら空を見上げるたその時、夏子は自分の子宮に微妙な変化が起こった事を確かに感じた。

生命の誕生、それはまさに奇跡。

またの名を、処女懐胎

まさに二千年と少し前に起きた、ありえないはずの出来事。

今の自分はひよつとすると、神の子を宿しているのかも知れない。思わず思い浮かべた皮肉に、苦笑が漏れる。

「ねえねえ、生まれてくるの男の子かな？ 女の子かな？」

「さあて、どっちかしらね」

「名前付けていい？ 僕が名前、考えるの！」

「いいわよ」

「やったあ！」

微笑ましいとは、こういうことを言うのだろう。

人は絶望しても、悲しくても、罪を背負っても、なお生きねばならない。

それは死んだ人間から渡されたバトンを、次の世代に渡すリレーのようなもの。

神がいてもいなくても、私達の世界は消えて無くなりはない。

だから私達は生きる。生きて生きて生き抜いて、そして死ぬ。

だが、今度こそ同じ過ちを繰り返さない世界を創ろう。

歴史となつてしまった過去に、私達は学んだはずだ。

ねえ優美、もうすぐ青い月が上るよ。

星灯りは全てを平等に照らすよ。

さようならクリス。

また会う日まで。

この世界にはもう、爪の音は聞こえない。

(了)

エピローグ ワールド・クリエイト・ワンスモア（後書き）

以上、長々と書きましたが 『爪の音』 は終了です。

どこかコミカルな作風が入ってしまうのは、よくも悪くも私のクセだと思っています。

水疱瘡には、実際には24歳で発症し、その時の経験がベースになっています。

骨が痒いなら？ 眼球が痒いなら？ 他人が痒いなら……
勿論、想像上の世界です。

痒みというものが、実は医学上はまだ不思議と解明されていません。だからこそ、と言ってはなんですが、こんなファンタジーホラーもあり、かな？

などと思ったりもしています。

宜しければ感想など頂けると嬉しいです。

今後とも、皆様お付き合いの程、よろしく願います！

追伸

ファンタジーライトノベル「超弩級要塞のサンタクロース」（完結）を以下で掲載しています。

もし私の他作品にご興味があれば、ご覧下さい！

<http://ncode.syosetu.com/n74190/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7536o/>

爪の音

2010年11月12日12時07分発行